佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第18集

MO RI SHI TA
森 下

長野県佐久市長土呂森下遺跡発掘調査報告書

1 9 8 9

佐 久 市 教 育 委 員 会
佐久埋蔵文化財調査センター

例　　言

1　本書は、昭和63年度市道近津中佐都線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　調査委託者　　佐久市土木課

3　調査受託者　　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター

4　発掘調査所在地

　森下遺跡（ＩＮＭ）　　佐久市大字長土呂字森下・若宮・西近津他

5　調査期間及び面積

　発掘調査　　昭和63年６月６日～６月18日、10月４日～11月11日　　2、000㎡

　整理調査　　昭和63年12月１日～平成元年３月31日

6　調査団の構成

（事務局）　佐久埋蔵文化財調査センター

所　　長　　西沢　正巳

庶務係長　　畠山　俊彦

庶　務　係　　田中　芳美（昭和63年12月退任）

　　菊池　直美（平成元年２月就任）

調査係主任　　高村　博文

調　査　係　　三石　宗一、木内　晶義、須藤　隆司、小山　岳夫、小林　真寿

　　翠川　泰弘、竹原　学、助川　朋広、篠原　浩江（嘱託）

（調査団）

団　　長　　黒岩　忠男（佐久考古学会副会長）

調査指導者　　白倉　盛男（佐久考古学会副会長）

　　林　幸彦（佐久市教育委員会）

　　羽毛田卓也（佐久市教育委員会）

調査担当者　　高村　博文、三石　宗一

調査主任　　助川　朋広

調査補助者　　木内　晶義

調査補助員　　浅沼ノブ江、市川　香里、堺　益子、高杉　昌子、橋詰　信子

　　渡辺久美子

発掘協力者　井出　愛子、井出つねじ、大井　キセ、小田川　栄、小田川時江、
高地　正雄（佐久考古学会員）、角田　時、角田　とく、角田　良夫、
花岡美津子、花里きしの、村松とみ子、茂木とよ子、森泉　欽一、
森泉源治郎、森泉　好治（佐久考古学会員）

整理協力者　木内　明美、小宮山智代子、斉藤　一美、田村　祐子、柳沢豊志子

遺物写真　畠山　俊彦

7　本書の編集は、高村・三石が行い、執筆は第II章第1節森下遺跡付近の自然環境を白倉が、第2節遺跡の歴史的環境を黒岩が担当し、他の章については、高村・三石・助川がそれぞれ分担し、文末に記して文責を明らかにした。

8　本書及び森下遺跡出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

本調査において、長土呂区々長神津義久氏をはじめ、地元の方々には、発掘調査中数々のご協力及びご援助をいただき、また、報告書作成にあたっては、下記の各氏よりご指導・ご助言をいただきました。記して感謝の意を表します。

宇賀神誠司、臼田 武正、河西 克造、小平 恵一、小林 秀行、近藤 尚義、島田 恵子、堤 隆、
寺嶋 俊郎、花岡 弘、福島 邦男、丸山 敞一郎、百瀬 忠幸、森泉かよ子、由井 茂也　（敬称略、五十音順）

凡　　例

1　本書は、事業年度等の関係から限定された時間内での迅速な刊行を基本的編集方針とし、検出された遺構・遺物の資料をできるだけ多く図化し、また、最大限分かりやすく記録することに努めて作成した。

2　竪穴住居址（以下、本文中においても特別な場合を除いて住居址とする。）の記述については、検出位置⇨検出層序⇨重複関係⇨平面形態⇨覆土⇨壁（壁溝を含む）⇨床面⇨ピット⇨炉・カマド（位置→残存状況→平面形態→層位→構材→その他）⇨その他の付属施設⇨遺物の出土状況⇨その他の観察事項の順に記載し、他の遺構についても基本的にこの記載順序を踏襲した。

3　遺構の略称　　竪穴住居址→H、特殊遺構→Q、土坑→D、溝状遺構→M

4　水糸レベルについては、各遺構毎に統一し、標高は縮尺尺度の上に明記した。

5　本遺跡の基本土層・遺構覆土及び遺物等の観察における色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の新版標準土色帖に基づいて行った。

目　　次

例　言

凡　例

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機……1

第２節　調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　森下遺跡付近の自然環境……2

第２節　遺跡の歴史的環境……5

第Ⅲ章　基本層序及び概要

第１節　基本層序……8

第２節　検出遺構・遺物の概要……9

第Ⅳ章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址……13

1）第１号住居址……13　2）第２号住居址……14　3）第３号住居址……16

4）第４号住居址……18　5）第５号住居址……23　6）第６号住居址……27

7）第７号住居址……29　8）第８号住居址……31　9）第９号住居址……33

10）第10号住居址……34　11）第11号住居址……38　12）第12号住居址……41

13）第13号住居址……48　14）第14号住居址……50　15）第15号住居址……53

16）第16号住居址……55　17）第17号住居址……57　18）第18号住居址……60

19）第19号住居址……61　20）第20号住居址……63

第２節　特殊遺構……64

1）第１号特殊遺構……64　2）第２号特殊遺構……64　3）第３号特殊遺構……66

第３節　土　　坑……66

第４節　溝状遺構……73

第５節　トレンチ出土土器及び表採遺物……79

第Ⅴ章　調査のまとめ

第１節　遺　　構……84

第２節　遺　　物……85

引用参考文献

付　表　目　次

第１表　浅間火山を中心とした編年……4
第２表　周辺遺跡一覧表……6
第３表　第２号住居址出土土器観察表……15
第４表　第３号住居址出土土器観察表……18
第５表　第４号住居址出土土器観察表……22
第６表　第５号住居址出土土器観察表……26
第７表　第６号住居址出土土器観察表……29
第８表　第７号住居址出土土器観察表……31
第９表　第８号住居址出土土器観察表……32
第10表　第10号住居址出土土器観察表……37
第11表　第11号住居址出土土器観察表〈１〉……40
第12表　第11号住居址出土土器観察表〈２〉……41
第13表　第12号住居址出土土器観察表〈１〉……46
第14表　第12号住居址出土土器観察表〈２〉……47
第15表　第13号住居址出土土器観察表……49
第16表　第14号住居址出土土器観察表……53
第17表　第16号住居址出土土器観察表……56
第18表　第17号住居址出土土器観察表……60
第19表　第20号住居址出土土器観察表……63
第20表　第２号土坑出土土器観察表……71
第21表　森下遺跡土坑一覧表……72
第22表　第19号土坑出土土器観察表……73
第23表　第２号溝状遺構出土土器観察表……78
第24表　第３号溝状遺構出土土器観察表……79
第25表　トレンチ出土土器観察表〈１〉……81
第26表　トレンチ出土土器観察表〈２〉……82
第27表　森下遺跡表採土器観察表……83

写　真　図　版　目　次

図版　一　森下遺跡付近航空写真
図版　二　１　森下遺跡より浅間山を望む
　　２・３　森下遺跡近景
図版　三　１　第１号住居址
　　２　第２号住居址
図版　四　１　第３号住居址
　　２　第３号住居址カマド
　　３　第１・２・３号住居址
　　４　第４・５号住居址
図版　五　１　第４号住居址
　　２・３　第４号住居址カマド
　　４・５　第４号住居址カマド掘り方
図版　六　１　第５号住居址
　　２・３　第５号住居址カマド
　　４　第５号住居址カマド掘り方
　　５　第５号住居址遺物出土状況
図版　七　１　第４・５号住居址
　　２　第１号トレンチ
　　３　第４号トレンチ
図版　八　１　第２号トレンチ
　　２　第３号トレンチ
図版　九　１　第６号住居址
　　２～５　第６号住居址遺物出土状況
図版　十　１　第７号住居址
　　２　第８号住居址
図版　十一　１　第５号トレンチ
　　２　第６号トレンチ
　　３　第９号住居址
図版　十二　１・２　第９号住居址遺物出土状況
　　３　第10号住居址
　　４・５　第10号住居址遺物出土状況
　　６　第10号住居址炉址
図版　十三　１　第11号住居址
　　２　第12号住居址遺物出土状況
図版　十四　１～４　第12号住居址遺物出土状況
　　５　第12号住居址
図版　十五　１　第13号住居址
　　２　第14号住居址
図版　十六　１　第14号住居址カマド掘り方
　　２　第14号住居址遺物出土状況
　　３　第７号トレンチ
　　４　第19号住居址
図版　十七　１　第８号トレンチ
　　２　第９号トレンチ
　　３　第15号住居址
図版　十八　１　第16号住居址
　　２　第17号住居址
図版　十九　１　第18号住居址

挿　図　目　次

第１図　森下遺跡の位置……1
第２図　浅間山の形態と構造……3
第３図　黒斑山東部の破壊によって生じた塚原泥流の流下した状態を示す図……3
第４図　周辺遺跡分布図……5
第５図　森下遺跡基本層序模式図……8
第６図　森下遺跡発掘調査対象地……10
第７図　森下遺跡トレンチ設定図及び遺構配置図……11
第８図　第１号住居址実測図……13
第９図　第２号住居址実測図……14
第10図　第２号住居址出土土器実測図……15
第11図　第３号住居址実測図……16
第12図　第３号住居址カマド実測図……17
第13図　第３号住居址出土土器実測図……17
第14図　第４号住居址実測図……18
第15図　第４号住居址カマド実測図……19
第16図　第４号住居址出土土器実測図……21
第17図　第５号住居址実測図……23
第18図　第５号住居址カマド実測図……24
第19図　第５号住居址出土土器実測図……25
第20図　第６号住居址実測図……27
第21図　第６号住居址出土土器実測図……28
第22図　第７号住居址実測図……30
第23図　第７号住居址出土土器実測図……31
第24図　第８号住居址実測図……32
第25図　第８号住居址出土土器実測図……32
第26図　第９号住居址実測図……33
第27図　第９号住居址出土土器拓影図……34
第28図　第10号住居址実測図……34
第29図　第10号住居址炉址実測図……35
第30図　第10号住居址出土土器実測図……36
第31図　第10号住居址出土土器拓影図……37
第32図　第11号住居址実測図……38
第33図　第11号住居址出土土器実測図……40
第34図　第12号住居址実測図……42
第35図　第12号住居址遺物出土状況実測図……43
第36図　第12号住居址出土土器実測図〈１〉……44
第37図　第12号住居址出土土器実測図〈２〉……45
第38図　第12号住居址出土土器拓影図……48
第39図　第13号住居址実測図……49
第40図　第13号住居址出土土器実測図……49
第41図　第14号住居址出土土器実測図……50
第42図　第14号住居址カマド実測図……51
第43図　第14号住居址出土土器実測図……52
第44図　第14号住居址出土鉄製品実測図……53
第45図　第15号住居址実測図……54
第46図　第15号住居址出土土器拓影図……55
第47図　第16号住居址実測図……55
第48図　第16号住居址出土土器実測図……56
第49図　第17号住居址実測図……57
第50図　第17号住居址出土土器実測図……59
第51図　第17号住居址出土鉄製品実測図……59
第52図　第18号住居址実測図……61
第53図　第18号住居址出土土器拓影図……61
第54図　第19号住居址実測図……62
第55図　第20号住居址実測図……63
第56図　第20号住居址出土土器実測図……63
第57図　第１号特殊遺構実測図……64
第58図　第２号特殊遺構実測図……65
第59図　第２号特殊遺構出土鉄製品実測図……65
第60図　第３号特殊遺構実測図……66
第61図　第１～10号土坑実測図……67
第62図　第11～15号土坑実測図……68
第63図　第16～20・22号土坑実測図……69
第64図　第21・23～28号土坑実測図……70
第65図　第29号土坑実測図……71
第66図　第２号土坑出土土器実測図……71
第67図　第19号土坑出土土器実測図……71
第68図　第10・14・19号土坑出土土器拓影図……73
第69図　第１号溝状遺構実測図……74
第70図　第２号溝状遺構実測図……75
第71図　第６号溝状遺構実測図……75
第72図　第３号溝状遺構実測図……76
第73図　第４号溝状遺構実測図……76
第74図　第５号溝状遺構実測図……76
第75図　第２号溝状遺構出土土器実測図……77
第76図　第３号溝状遺構出土土器実測図……78
第77図　第３・４号溝状遺構出土土器拓影図……79
第78図　第３・５・７号トレンチ出土土器実測図……80
第79図　第11号トレンチ出土土器実測図……81
第80図　森下遺跡表採土器実測図……83
第81図　森下遺跡表採石製品実測図……83

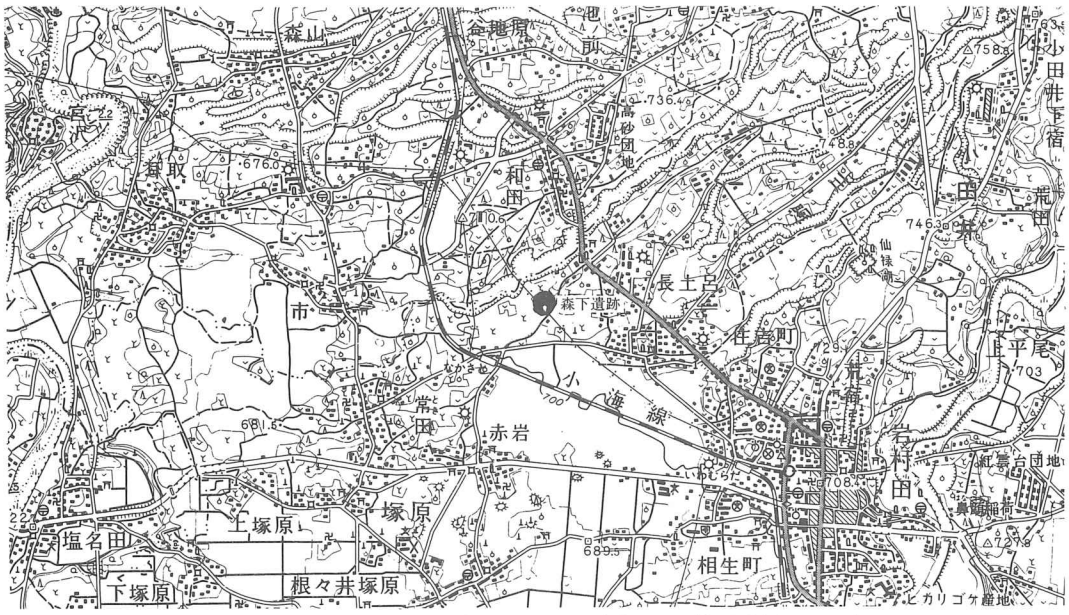
2　第20号住居址
図版二十　1・2　第10号トレンチ
3　第11号トレンチ
4　第12号トレンチ
5　第13号トレンチ
図版二十一　1　第１号特殊遺構
2　第２号特殊遺構
図版二十二　1　第３号特殊遺構
2　第１号土坑
3　第１号土坑馬歯出土状況
4　第２号土坑
5　第３号土坑
図版二十三　1　第４・５・６号土坑
2　第７号土坑
3　第８号土坑
4　第９・10号土坑
5　第11号土坑
6　第13号土坑
7　第14号土坑
8　第15号土坑
図版二十四　1　第16号土坑
2　第17号土坑
3　第18・19号土坑
4　第20号土坑
5　第21号土坑
6　第22号土坑
7　第23号土坑
8　第24号土坑
図版二十五　1　第25号土坑
2　第26号土坑
3　第27号土坑
4　第28号土坑
5　第29号土坑
6　第１号溝状遺構Ｃ区
7　第３号溝状遺構
図版二十六　1　第２号溝状遺構
2　第４号溝状遺構
3　第５号溝状遺構
4　第６号溝状遺構
5　森下遺跡発掘調査団
図版二十七　1～3　第４号住居址出土土器
4　第５号住居址出土土器
図版二十八　1・2　第５号住居址出土土器
3～5　第６号住居址出土土器
6　第７号住居址出土土器
7　第８号住居址出土土器
図版二十九　1～5　第10号住居址出土土器
6～9　第11号住居址出土土器
図版三十　1・2　第11号住居址出土土器
3～7　第12号住居址出土土器
図版三十一　1～9　第12号住居址出土土器
図版三十二　1・2　第12号住居址出土土器
3　第13号住居址出土土器
4～6　第14号住居址出土土器
7　第16号住居址出土土器
8　第17号住居址出土土器
図版三十三　1～5　第17号住居址出土土器
6～9　第２号土坑出土土器
10　第19号土坑出土土器
図版三十四　1～3　第２号溝状遺構出土土器
4・5　第３号溝状遺構出土土器
6・7　第３号トレンチ出土土器
8・9　第５号トレンチ出土土器
10～15　第７号トレンチ出土土器
16・17　第11号トレンチ出土土器
18　表採土器
図版三十五　1　表採土器
2　森下遺跡表採石製品
3　第17号住居址出土鉄製品
4　第14号住居址出土鉄製品
5　第２号特殊遺構出土鉄製品
6　第13号住居址出土墨書土器
7・8　第７号トレンチ出土墨書土器

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　発掘調査に至る動機

森下遺跡は、佐久市長土呂地籍に所在し、御代田方面から南西に伸びる田切り地形の終末部分で、東方の周防畑遺跡群、西方の西近津遺跡群に挟まれた小田切地形が存在し、西近津遺跡群の東側縁辺に含まれると考えられ、標高は700～710m前後を測る。周防畑遺跡群・西近津遺跡群は、『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』によると、いずれも縄文時代から平安時代の複合遺跡であり、昭和46年度西近津遺跡、昭和54年度周防畑Ａ遺跡、昭和55年度周防畑Ｂ遺跡、昭和58年度若宮遺跡、昭和59年度下長畝遺跡等の発掘調査が実施され、該期の遺構が多数検出された。

今回、佐久市土木課が行う市道近津中佐都線道路改良事業に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となり、拡幅工事に先立ち発掘調査を行い、記録保存する必要性が生じた。そこで、佐久市教育委員会の指導管理のもとに、佐久市土木課から委託を受けた佐久埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施する運びとなった。



第１図　森下遺跡の位置（１：50,000　国土地理院地形図による）

第２節　調査日誌

今回行った調査は、道路の拡幅工事に伴うものであり、調査区が長さ約520m、幅約６mであるためグリッドの設定は行わず、調査区を40m間隔のＡ区～Ｎ区までの各区を設定して行った。また、調査区北側の第１・２・３号トレンチについては、大型車輌の通行を確保するため、緊急に発掘調査を実施することが必要となり、10月の調査に先立ち、６月に調査を実施することになった。

昭和63年６月６日（月）～６月８日（水）

調査区北側より、第１～３号トレンチの掘り下げ作業、併行してプラン確認作業を行う。

６月９日（木）～６月16日（木）

プラン確認作業により検出された遺構の掘り下げ作業を行う。実測図作成・写真撮影は随時行う。

６月17日（金）

テント・機材の撤収を行う。

６月18日（土）

原点標高の移動を行う。

ＢＭ１＝709.46m、ＢＭ２＝710.90m。

10月４日（火）～10月８日（土）

Ｈ区～Ｍ区を通行止めとし、調査区南側より、重機により表土削平作業を行い、併行してプラン確認作業を行う。

10月11日（火）～10月29日（土）

プラン確認により検出された各遺構の掘り下げ・実測作業・写真撮影を行う。

10月31日（月）～11月10日（木）

第10・14・17号住居址については、現道下にも存在することが予想されたため、重機により削平を行い、掘り下げ・実測作業・写真撮影・全体図作成を行う。

機材の撤収を行い、現地調査を終了する。

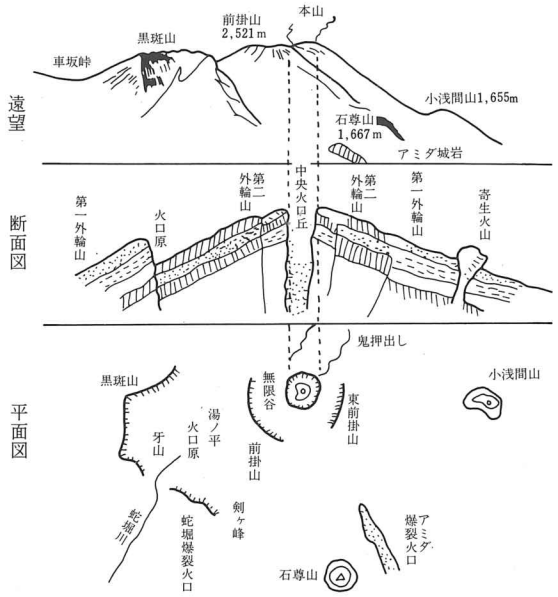
12月１日（木）～平成元年３月31日（金）

室内にて報告書作成作業を行い、森下遺跡の全調査を完了する。

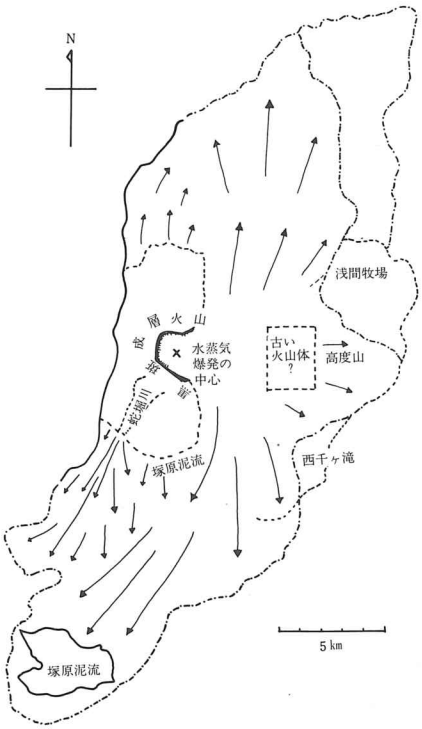
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　森下遺跡の自然環境

森下遺跡は佐久市の最西北端の西近津遺跡群の小諸市との境に位置している。この付近一帯は北方にそびえている浅間火山の噴出物によって地質構成されている地帯で、この地域環境を記載



第２図　浅間山の形態と構造（白倉　原図）



第３図　黒斑山東部の破壊によって生じた塚原泥流の流下した状態を示す図
（荒牧重雄著『浅間火山の地質』による）

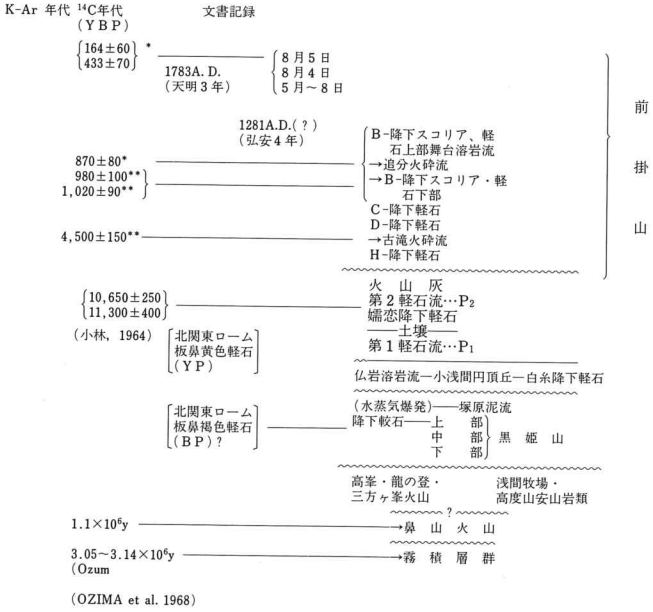
するには先ず浅間山の構成からはじめなければならない。

浅間山は群馬・長野県境の上信越国立公園の最南端にあり火山国日本の中においても珍しい代表的な活火山で現在も盛んに噴煙を上げていることで知られている。それに加えて研究史の長いこと、火山活動の記録が古くから残されていること、火山形態が各面から具備していることなどにもよりわが国東西交通の要路中仙道・信越線沿いにあり、活動している火山として時に大噴火をし周辺に災害を及ぼすこともあり、四季の風望の変化のすばらしさなどによって古来文学絵画の対象ともなり多くの作品も残されている。

浅間山は黒斑山・前掛山・中央釜山の三重式成層火山で標高2560m、四方からの眺望の変化があり、しかも常に噴煙を上げ続けているので人目につき易いが特に南方佐久市側から見渡す形態が実にすばらしい。火山構造も含めて図示したものが第１図であるが、コニーデ型の裾野と三重式噴火口寄生火山火口瀬など火山の模形を見るようである。しかも噴煙は上空の偏西風によって東に傾くことが多いため大噴火による災害も西側には及ばないのが現状である。しかし長い火山活動の歴史をたどって見ると、南方佐久市側にも噴火の状況を語る噴出物溶岩火山灰火山砂礫の堆積層が多く残されている。浅間山はわが国の火山としては最も新しい若い火山で、第１次黒斑火山の活動を開始したのが新生代第四紀

洪積末期であるが、黒斑火山最盛期には単式成層火山で標高2800mを越える大型火山であった。その整然とした大火山は噴火口の東半分以上を破壊する大爆発によって山体を失ってしまった。その時の噴出溶岩熱水泥流の大部分が主として南方に流下して佐久市中佐都付近まで押出している。その堆積物は現在ＪＲ中佐都駅付近を中心として塚原・赤岩・平塚付近の田園地に散在し、松島湾に浮かぶ松島のように並んでいる泥流残丘である。基盤整備以前はその数100を越す大小残丘が浅間山頂方向から放射状に並んでおり地名の起源にもなっていた。岩質の研究結果から黒斑岩壁に残っている岩石と同一であることが実証されている。

第１表　浅間火山を中心とした編年
（荒牧重雄著『浅間火山の地質』による。一部加除）



その破壊された黒斑火山の中心から再び活発な火山活動が再開されたのが前掛山に成長するわけであるが、その過程の長い期間の多量な噴出物である火枠流軽石流（熱火山灰砂軽石）と降下火山灰砂が二回に渡って佐久市北半部に厚さ20m以上に堆積した。これは浅間山南面追分原以南・佐久市中込原、西端は小諸市懐古園付近まで広範囲に223㎢に分布して、佐久平北半部の生活地表面を形成して第一・第二軽石流と呼ばれている（第１軽石流はP_1、第２軽石流はP_2と命名されている）。

この軽石流は湯川を埋め、一部に湖沼状態も作り湿地水中堆積層も各地に作り、浅間火山山麓を平坦化した。この大規模な第一軽石流と小規模な第二軽石流の間には100年以上の間隔があったらしく20cm内外の黒土層を夾んでいる所もある。

この軽石流P_1・P_2の地表面が佐久市北半部を形成しているが、この地層は火山から噴出したままの火山灰砂軽石の堆積したままのもので凝固していないために水の浸蝕には頗る弱く豪雨洪水には極めて大きな地形変化を受ける。従ってこの地帯には火山山麓特有な“田切り”の地形が発達している。最大なものとしては湯川の谷をはじめとして浅間山麓に深い谷が50余発達しており、山麓湧水地下水の流下通路となっており古代からの稲田耕作をささえてきている。

この田切りの周辺に多くの遺跡が分布しており、森下遺跡もその一つである。森下遺跡北西300mの小諸佐久両市境となっている大田切もその代表的な一つであり、御代田町湧玉からの湧水を流下させており湧玉用水とも呼ばれ、その周辺に水田耕地村落が早くから発達した所である。

（白倉盛男）

参考文献

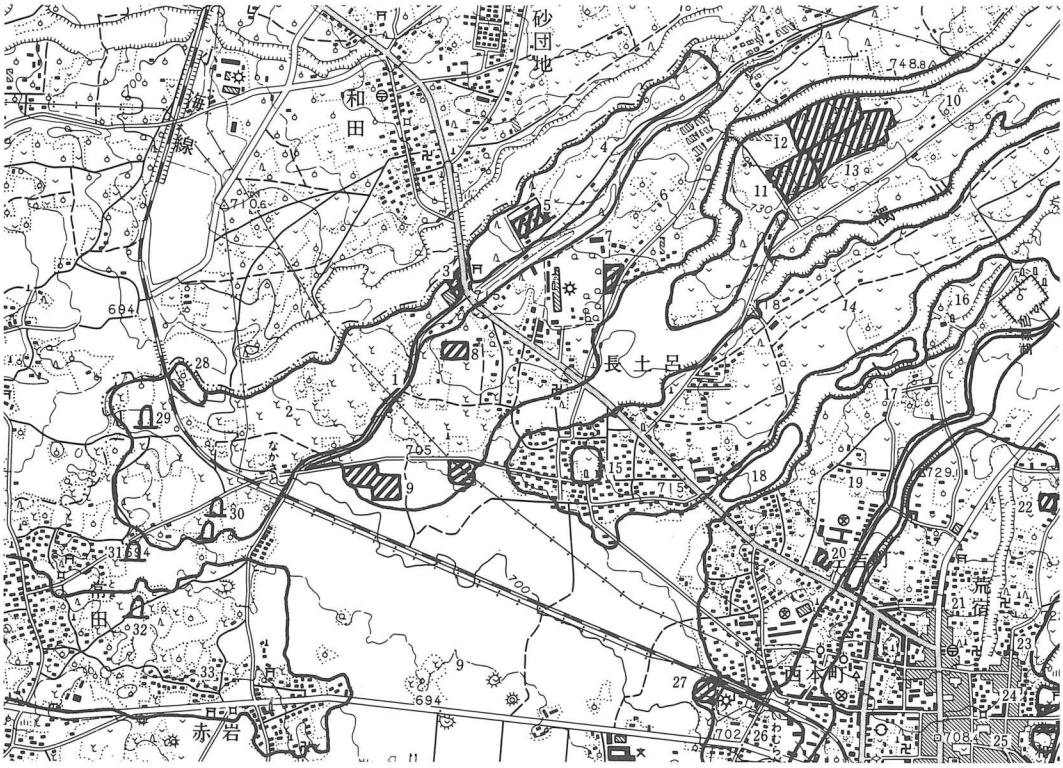
白倉盛男　1971　『浅間山と火山博物館』　小諸市立火山博物館

荒牧重雄　1968　『浅間火山の地質』　地学団体研究会

第２節　遺跡の歴史的環境

森下遺跡は長土呂部落西北部に近接する字森下に所在し西近津遺跡群に属している。長土呂部落の東を流れる濁川・湯川の流域は、土器・石器が採集されることで、古くから著名な遺跡群が広く分布している地帯として知られているが、これ等の遺跡は佐久平特有な田切り地形の台地上に位置し森下遺跡もその例外ではない。

これ等の遺跡群は、佐久市教育委員会が昭和57・58年度に実施した『佐久市遺跡詳細分布調査



第４図　周辺遺跡分布図

第２表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺　跡　名	所　在　地	立地	時代						備　考
					縄	弥	古	奈	平	中	
1		森下遺跡	長土呂字森下・若宮他	微高地							本調査
2	29	西近津遺跡群	長土呂西近津・下大豆塚他	〃	○	○	○	○	○		
3	29－1	長土呂字西近津	長土呂字西近津	〃		○	○				昭和46年度発掘調査
4	6	近津遺跡群	長土呂字本宮・北近津他	台地		○	○	○	○		
5	6－1	北近津遺跡	長土呂北近津	〃		○	○				昭和46年度発掘調査
6	7	周防畑遺跡群	長土呂字周防畑・上北原地	〃	○	○	○	○	○		
7	7－1	周防畑Ａ遺跡	長土呂字南下北原	微高地				○	○		昭和54年度発掘調査
8	7－3	若宮遺跡	長土呂字若宮	〃			○	○	○		昭和58年度発掘調査
9	7－2	周防畑Ｂ遺跡	長土呂字大豆田・下仲田他	〃		○	○	○	○		昭和55年度発掘調査
10	8	芝宮遺跡群	長土呂北上中原・北中中原他	台地	○	○	○	○	○		
11	8－1	芝宮遺跡第一次	長土呂北下中原	〃	○	○	○	○	○		昭和54年度発掘調査
12	8－2	芝宮遺跡第二次	長土呂北中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和55年度発掘調査
13	8－3	芝宮遺跡第三次	長土呂字中中原	〃	○	○	○	○	○		昭和57年度発掘調査
14	9	長土呂遺跡群	長土呂字長土呂隠し・聖石他	〃		○	○	○	○	○	
15	40	長土呂館跡	長土呂字城	〃						○	
16	541	曽根新城跡	岩村田下穴虫	〃						○	
17	45	新城遺跡	岩村田字新城	低地		○	○	○	○		
18	38	下蟹沢遺跡	長土呂字下蟹沢・中蟹沢	〃		○	○	○	○		
19	41	枇杷坂遺跡群	岩村田字枇杷坂・久保田頭他	台地		○	○	○	○		
20	41－1	琵琶坂遺跡	岩村田字枇杷坂	〃				○	○		昭和60年度発掘調査
21	52	岩村田遺跡群	岩村田六供後・六供他	〃		○	○	○	○	○	
22	52－1	六供後遺跡	岩村田六供後	〃		○				○	昭和55年度発掘調査
23	51－2	石並城跡	岩村田字石並他	〃		○	○	○	○	○	
24	51－1	王城跡	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和54年度一部発掘調査
25	51－3	黒岩城跡	岩村田字古城	〃		○	○	○	○	○	昭和55・59年度発掘調査
26	39	円正防遺跡群	岩村田字円正防・田中他		○	○	○	○	○		昭和59年度一部発掘調査
27	39－1	清水田遺跡	岩村田字清水田	微高地		○	○				昭和53年度発掘調査
28	30	鷺林城址	常田字鷺林	〃						○	
29	37	鷺林古墳群	長土呂字鷺林	〃			○				
30	35	下大豆塚古墳群	長土呂字下大豆塚	〃			○				昭和56年度発掘調査
31	36	東池下古墳群	常田字東池下	〃			○				昭和49年度発掘調査
32	34	大豆塚古墳群	塚原字大豆塚	〃			○				
33	28	常田居屋敷遺跡群	常田字家地頭、塚原字長塚他	〃		○	○	○	○		

報告書』によると、西近津遺跡群（２）は長土呂字西近津・下大豆塚・三貫畑・小金井・森下・下長畝・東鷺林、常田字鷺林・東池下、塚原字大豆塚に跨って分布する縄文時代から平安時代の集落址であり、近津遺跡群（４）は長土呂字本宮・北近津・宮浦・下宮原・上宮原等の地域に分布し弥生時代～平安時代の集落址である。周防畑遺跡群（７）は長土呂字周防畑・上北原・北上宮久保・菱林・入高山・南上北原・南下北原・一本松・渋右衛門・東近津・南近津・若宮・宮の前・上墟端・道常・一ツ長田・大豆田・下仲田・上仲田を含む地域で集落址、芝宮遺跡群（８）は長土呂字北上中原・北下中原・上芝宮・南上中原・下芝宮・上高山・中高山・下高宮、小田井字穴沢・下曽根の地域に分布し縄文時代～平安時代の包蔵地、長土呂遺跡群（14）は長土呂字長土呂隠し・聖石・上餌袋・下餌袋・上聖原・中聖原・下聖原・上聖端・上大林・下大林・下聖端

・上日影・南聖原・下日影・三百地・西浦・城・北小路・下小路の地域に展開し弥生時代～中世の包蔵地、枇杷坂遺跡群（19）は岩村田字枇杷坂・久保田頭・蟹沢端・下穴虫・下久保田向・上久保田向、長土呂字舟久保の地域で弥生時代～平安時代への包蔵地、岩村田遺跡群（21）は岩村田字六供後・六供・行人塚・梨の木・新町・中宿・木戸在家・外西浦・菅田・荒町・古城・城下・北羽毛平に展開し弥生時代～中世の集落址、円正防遺跡群（26）は岩村田字円正防・田中・蔦石・清水田に分散し縄文時代から平安時代の集落址とされている。昭和59年度、岩村田字円正防・田中地区の発掘調査が行われ、弥生時代竪穴住居址10棟、古墳時代竪穴住居址８棟が検出され、濃密な集落址と再確認された。常田居屋敷遺跡群（33）は常田字家地頭、塚原字長塚・砂畑・砂原・屋敷・大豆塚・駿河塚に分布し、弥生時代～平安時代の散布地としている。

本遺跡の周辺に分布する既発掘遺跡を概観すると、昭和46年度、西近津遺跡（３）で、弥生時代後期竪穴住居址１棟、古墳時代後期竪穴住居址３棟、昭和46年度、北近津遺跡（５）で、古墳時代竪穴住居址４棟、土坑３基、柱穴址等が検出され更に台地全体より竪穴住居址13棟、土坑７基を検出し、集落址の一部が確認された。昭和54年度、周防畑Ａ遺跡（７）では、平安時代竪穴住居址５棟、溝状遺構３基、ピット状焼土址等が検出された。出土遺物は少なかったが、弥生時代百瀬式の壺も１点出土している。若宮遺跡（８）は昭和58年度、一部発掘調査され、竪穴住居址16棟が検出され、所産期は古墳後期～平安時代に求められる。周防畑Ｂ遺跡（９）は昭和55年度発掘調査され、弥生後期竪穴住居址23棟、円形周溝基２基、土坑17基、平安時代竪穴住居址18棟が検出された。芝宮遺跡第一・二・三次調査は、昭和54・55・57年度に実施され、溝２基、土坑７基等が検出されている。清水田遺跡(27)は昭和53年度発掘調査され、弥生時代中期竪穴住居址８棟、古墳後期竪穴住居址３棟が検出され、六供後遺跡（22）は昭和55年度、幼稚園舎建設のため一部発掘調査を行い、中世の溝址が検出された。尚、未発掘調査遺跡として、新城遺跡（17）は岩村田字新城に所在し、下蟹沢遺跡（18）は長土呂字下蟹沢・中蟹沢に所在する。また、本遺跡周辺には古墳群も点在する。鷺林古墳群（29）５基、下大豆塚古墳群（30）２基、東池下古墳（31）３基、大豆塚古墳群（32）３基等があり、いずれも円墳である。中世の城址も長土呂館跡（15）、石並遺跡（23）、王城跡（24）、黒岩城跡（25）、鷺林城跡（29）等が所在する。黒岩城跡は昭和55年度・59年度に発掘調査された。弥生時代土坑１基、古墳時代後期竪穴住居址15棟、中世竪穴遺構54基、堀立柱建物址３棟、土坑285基等が検出され、土師器、須恵器・鉄鏃・金属製品・石製品等が多数出土している。

以上森下遺跡周辺を概観したが、調査事例も乏しく実態は判明していない。その意味で、森下遺跡の発掘調査は実態解明に対して重要な示唆を与えることは言うまでもない。

（黒岩忠男）

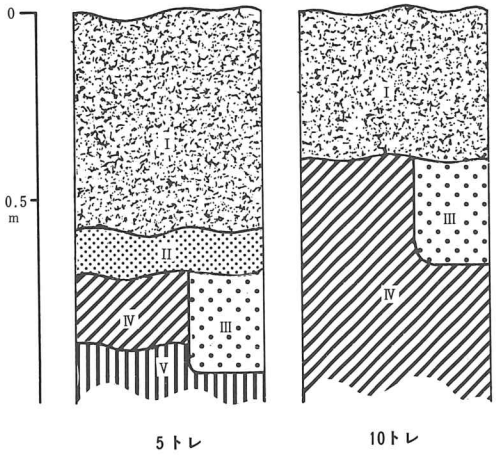
第Ⅲ章　基本層序及び概要

第１節　基本層序

森下遺跡は、佐久平の北端部に位置し、標高は約704～710mを測り、南西に向って傾斜する。東方に濁川、西方に湧玉川が南流し、この両河川の周辺は、田切り地形が帯状に形成され、この台地上には、近津遺跡群・周防畑遺跡群・芝宮遺跡群等の大遺跡群が展開している。

本遺跡は、東方の周防畑遺跡群、西方の近津遺跡群に挟まれた、田切り地形の終末部分であり、今回の調査においても、調査区の東側に沿った形で小田切りが存在していることが明らかになった。従って、本遺跡は西方に広がる近津遺跡群の東側縁辺に位置するものと考えられる。

発掘区における基本層序の抽出は、調査区北側第５号トレンチ、南側第10号トレンチの２箇所について行った。



第５図　森下遺跡基本層序模式図

第Ⅰ層　7.5ＹＲ３／３　暗褐色土層
耕作土。

第Ⅱ層　7.5ＹＲ３／４　暗褐色土層
パミス含む。粘性なし、しまりややあり。

第Ⅲ層　遺構覆土

第Ⅳ層　黄褐色ローム層

第Ⅴ層　7.5ＹＲ７／２　明褐灰色土層

第Ⅰ層耕作土は、30～40cmの層厚を測るが、第６号トレンチ北側・第８号トレンチでは役10cmと浅く、また、第５号トレンチにおいては40～60cm前後に厚く堆積している。第Ⅰ層直下は第Ⅳ層黄褐色ローム層であるが、第５号トレンチ内においては、第Ⅰ層直下に第Ⅱ層、第Ⅳ層下に第Ⅴ層が存在している。遺構は第Ⅳ層黄褐色ローム層内に構築されるが、第５号トレンチ内で検出された遺構には、第Ⅴ層まで達しているものも存在する。

第2節　検出遺構・遺物の概要

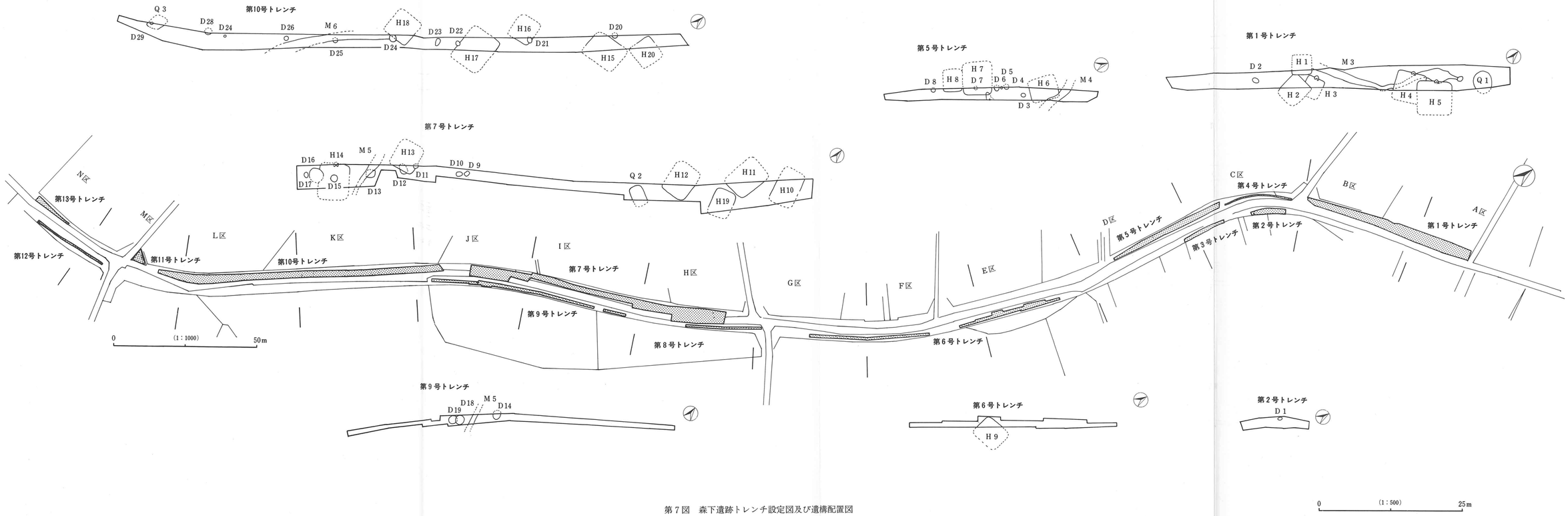
遺構

竪穴住居址	20棟	弥生時代後期前半	4棟
		古墳時代後期	4棟
		古墳時代終末～奈良時代初頭	1棟
		奈良時代	2棟
		奈良時代終末～平安時代初頭	2棟
		平安時代前葉	4棟
		時期不明	3棟
特殊遺構	3基		
土　　坑	29基		
溝状遺構	6基		

遺物

土　　器	縄文土器	深鉢
	弥生土器	壺・甕・高坏・鉢・甑・器台（？）
	土師器	壺・甕・高坏・坏・高台付坏・鉢・甑
	須恵器	壺・甕・坏・高台付坏・蓋
	灰釉陶器	椀（？）
鉄製品	鉄鏃・鉄釘・刀子（？）・不明鉄製品	
石製品	五輪塔	
自然遺物	馬歯・馬骨	

第６図　森下遺跡発掘調査対象地

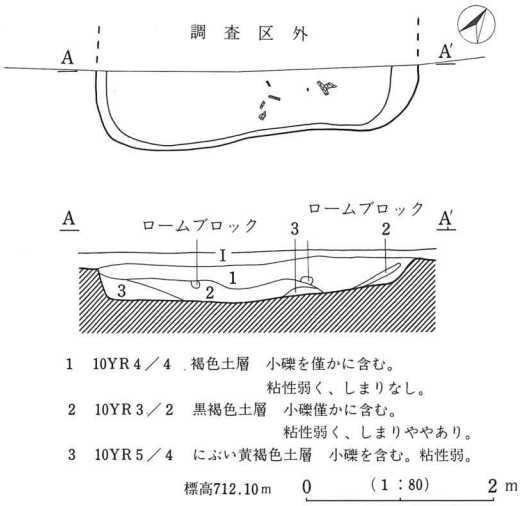


第７図　森下遺跡トレンチ設定図及び遺構配置図

第IV章　遺構と遺物

第１節　竪穴住居址

１）　第１号住居址



第８図　第１号住居址実測図

遺構・遺物（第８図、図版三・四）

本住居址はＢ区内、第１号トレンチ北方調査区際に位置し、全体層序第IV層上において確認された。第２号住居址と重複関係をもち、第２号住居址北西隅を破壊して構築されている。確認されたプランは、南部の一部であり、大部分が北方の調査区外へと続いている。そのため平面プランの全容は知り得ないが、南壁長276cmを測る。

覆土は三層に分割され、第１層褐色土層が大部分を占め、第３層は崩落層と考えられる。確認面からの壁高は27.5～35.0cmを測り、壁体は地山第IV層をそのまま利用する。壁面はほぼ平滑でややなだらかな立ち上がりとなる。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第IV層をそのまま利用しており、炭化材が存在した。その他、柱穴等の付属施設も検出されなかった。

出土遺物は、弥生土器小片２点、土師器では所謂「武蔵甕」の胴部小片12点、その他小片４点、須恵器では坏口縁部小片３点、蓋小片１点、甕胴部片１点が出土している。これらの土器はいずれも小片であり、本址に共伴するものとは考えにくく、その所産期について明らかにできない。しかし、第２号住居址との重複関係から、第２号住居址より新しい時代のものであるということができる。

（高村）

2）　第２号住居址

遺構（第９図、図版三・四）

本住居址はＢ区、第１号トレンチ内、第１号住居址の南方に位置し、全体層序第Ⅳ層上において確認された。第１・３号住居址と重複関係にあり、第１号住居址により北西隅を破壊されている。第３号住居址との重複関係は、木の根などの撹乱があり明確に確認できなかった。

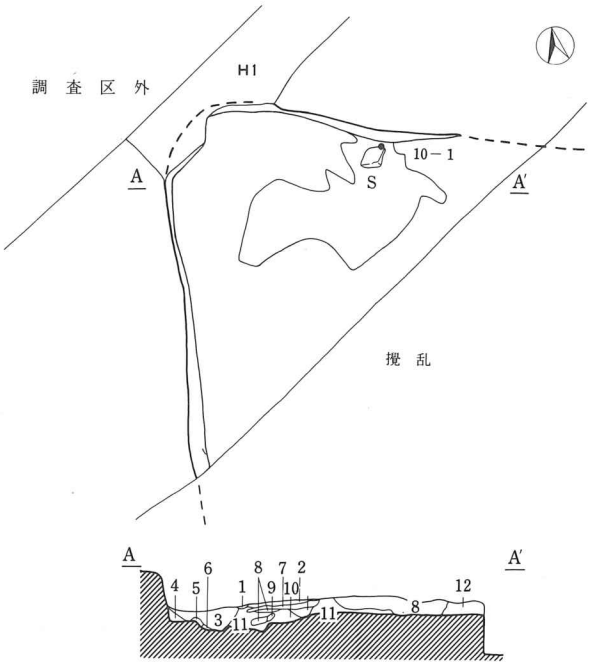
平面プランは北東の大半を道路により破壊されており、北西部分のみしか検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層の20cm上面に黒色粘土を含んだ堅い貼床が存在し、中央部分に顕著に、壁際はあまり見られず軟弱であった。

確認面からの壁高は０～46cmを測り、壁体は地山第Ⅳ層をそのまま利用していた。壁面はほぼ平滑で、直に近い立ち上がりを見せている。

北壁の中央付近にカマドに使用されたと思われる焼石が１個存在するが、柱穴等の明確な付属施設は認められなかった。

遺物の出土状態は、住居址各所の覆土、床面、床面下に散在する程度である。



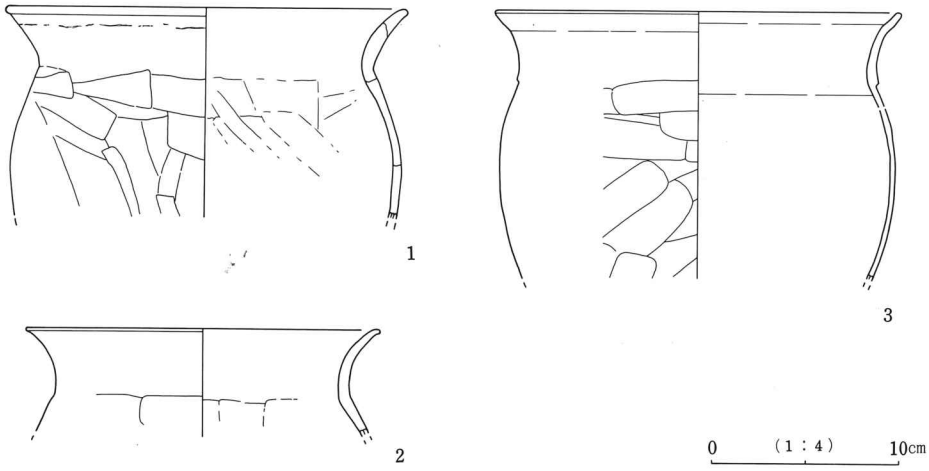
1　暗褐色土層　径１mm程度の黄色粒子を含む。粘性弱く、しまりあり。
2　黒褐色(灰褐色？)土層　径２～３mmの橙色粒子を含み、粘性弱く、しまりあり。
3　暗褐色土層　径１cm程度の炭化粒子を少量含み、径 2～3mの 橙色粒子を含む。粘性・しまりなし。
4　黄褐色土層　径１～２mm程度の橙色粒子を含む。粘性弱く、しまりあり。
5　褐色土層　径１～２mm程度の橙色粒子を含む。粒性弱く、しまりあり。
6　明褐色土層　径１mm程度の橙色粒子、黄色粒子を含む。粘性弱く、しまりあり。
7　黄褐色土層　径１mm程度の橙色粒子を含む。粘性弱く、しまりあり。
8　黄褐色土層　径２～３mm程度の橙色粒子、径１mm程度の黄色粒子少量含む。粘性弱く、しまりあり。
9　黄色土層　径２～３cm程度の黄色土ブロックを含む。粘性弱く、しまりあり。
10　明褐色土層　径１cm程度の炭化物を含む。径１mm程度の黄色粒子を含む。粘性弱く、しまりややあり。
11　黄色土層　径２mm程度の礫を多く含む。粘性弱く、しまりあり。

標高711.60m
0　（1：80）　2 m

第９図　第２号住居址実側図

遺物（第10図）

本住居址からは土師器・須恵器・弥生土器などが出土している。このうち弥生土器は混入と考えられる。土師器の器種には甕・台付甕・坏・鉢・羽釜があり、須恵器の器種には坏・甕・長頸



第10図　第２号住居址出土土器実測図

第３表　第２号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
10－１	甕	(21.4) 〈11.0〉 —	巻き上げ成形。 口縁部緩く外傾する。 胴部最大径20.8cm	内）口辺部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口辺部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／５残存 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　2.5ＹＲ６／６(橙色)
10－２	甕	(18.8) 〈5.5〉 —	巻き上げ成形。口縁部「コ」の字状を呈する。	内）口辺部ヨコナデ 外）口辺部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／４残存 胎土　白・赤色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　2.5ＹＲ７／６(橙色)
10－３	甕	(21.4) 〈14.2〉 —	巻き上げ成形。 口縁部「コ」の字状を呈する。 胴部最大径21cm。	内）口辺部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口辺部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／４残存 胎土　白色粒子・微砂多量含む。 焼成　良好 色調　2.5ＹＲ5／6(明赤褐色)

壺がある。このうち、図化できたものは３点である。

10－１～３は、いずれも所謂「武蔵型甕」の成形技法を用いた、非常に器壁の薄い土師器甕である。胴部から口縁部の立ち上がりが緩やかに外反することと、最大径が胴上部上位と口縁部との差があまりみられないことなどから堤編年（1987）の前田Ⅵ期に相当するものと思われる。

他に底部回転糸切り手法を用いた須恵器坏も存在するが、本址の所産期は一応、奈良時代後半としておきたい。

（高村）

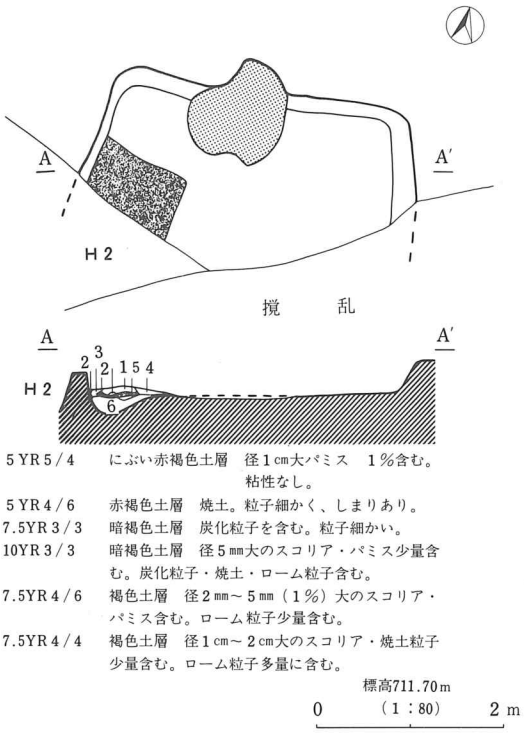
3）　第３号住居址

遺構（第11・12図、図版四）

本住居址はＢ区中央付近、第１号トレンチ内、第１号住居址の近接した南側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において確認された。第２号住居址と重複関係にあり、第２号住居址で触れたようにその新旧関係ははっきりしない。

平面プランは、道路により南部大半を破壊されており、僅かに北壁長279cmを測るのみであった。確認面からの壁高は31～41cmを測り、壁体は地山第Ⅳ層をそのまま利用てしいる。壁面はほぼ平滑で、ややなだらかな立ち上がりを見せている。

床面は中央付近に木の根などの撹乱があるがほぼ平坦で、地山第Ⅳ層をそのまま利用している。ただ西壁中央付近に焼土の分布が存在する。



第11図　第３号住居址実測図

カマドは北壁のほぼ中央に構築され、遺存状態は良くなかった。火床と思われる９層は木の根によりほとんどが破壊されており、両袖部も残っていない。ただ煙道は北壁中央部壁外を掘りこんで構築されていた。柱穴・壁溝は検出されなかった。

遺物の出土状態は、覆土内に散在する程度である。

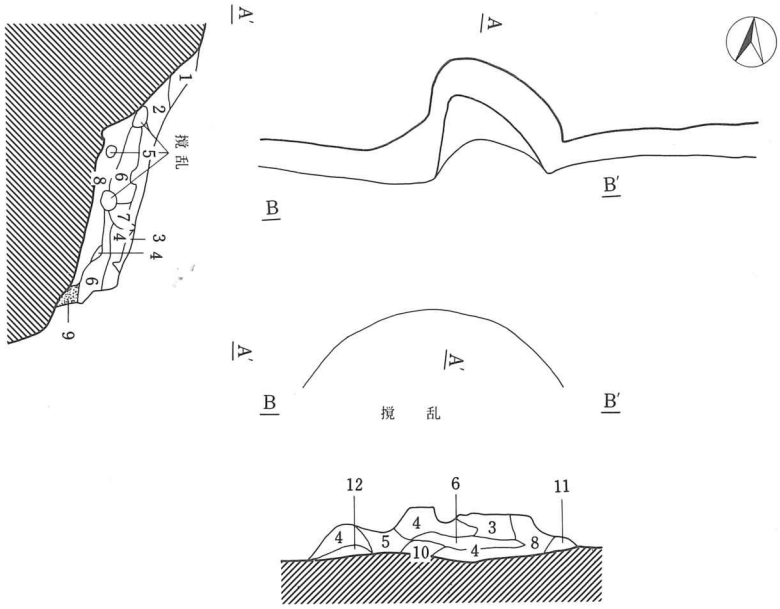
遺物（第13図）

本址からは、土師器・須恵器・弥生土器などが出土しているが、このうち弥生土器は混入と考えられる。土師器の器種には甕・坏などがあり、須恵器の器種には坏・小型広口壺などがある。このうち図示できたのは、土師器１点と須恵器１点がある。

13－１は、内面黒色処理された黒色土器坏でロクロヨコナデに調整される。

13－２は、須恵器高台付坏と考えられ器高の高いものである。その他、須恵器として７世紀から奈良時代を通じて見られる小型広口壺[(1)]などが出土している。

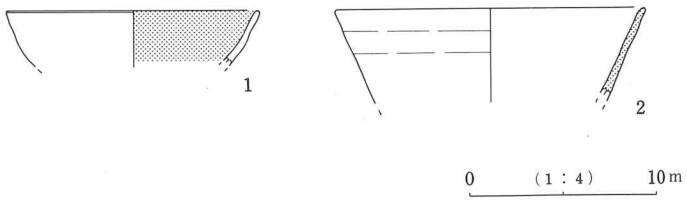
13－１・２の存在から本址を堤（1987）編年に当てはめてみると前田Ⅶ期と思われるが資料が



1	7.5YR7／3	にぶい橙色土層	ローム粒子含む。粘性・しまりなし。
2	7.5YR7／4	にぶい橙色土層	ローム粒子含む。粘性なし、しまりややあり。
3	5YR8／3	淡橙色土層	焼土粒子少量含む。粘性なし、しまりあり。
4	5YR8／1	灰白色土層	ローム粒子・炭化物少量含む。粘性なし、しまりあり。
5	7.5YR3／2	黒褐色土層	ローム粒子含む。粘性なし、しまりあり。
6	7.5YR8／1	灰白色土層	ローム粒子少量含む。粘性なし、しまりあり。
7	10YR6／4	にぶい黄橙色土層	焼土粒子含む。粘性なし、しまりあり。
8	10YR2／2	黒褐色土層	ローム粒子含む。
9	2.5YR6／6	橙色土層	焼土層。
10	5YR7／4	にぶい橙色土層	炭化物・焼土粒子含む。粘性・しまりなし。
11	7.5YR8／4	浅黄橙色土層	ローム粒子・灰含む。粘性・しまりなし。
12	7.5YR3／2	黒褐色土層	ローム粒子含む。粘性なし、しまりあり。

標高711.80m
0　（1：30）　1 m

第12図　第3号住居址カマド実測図



第13図　第3号住居址出土土器実測図

少なく、小破片であることから断定は避けたい。　（高村）

註(1)　竹原　学の鑑定による。

第4表　第3号住居址出土土器観察表

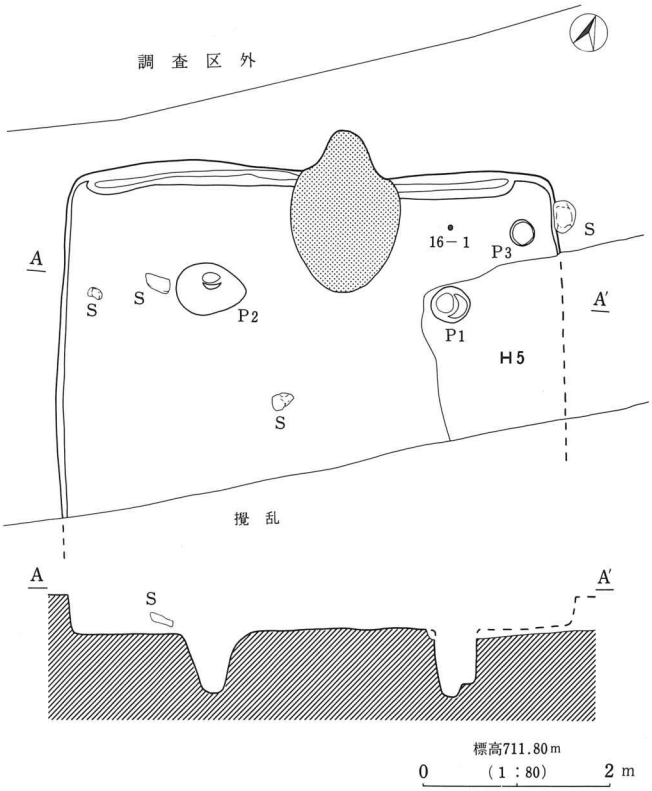
挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
13－1	坏	(13.4) 〈3.0〉 ――	体部内湾気味に開く。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／4残存 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　内）N3／0（暗灰色） 外）7.5YR5／6(明褐色)
13－2	坏	(16.4) 〈5.0〉 ――	体部直線的に外傾する。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／5残存 胎土　径1mm前後の黒色粒子 径1mm以下の白色粒子 多量に含む。 焼成　良好 色調　10YR4／1（褐灰色）

4）　第4号住居址

遺構（第14・15図、図版四・五・七）

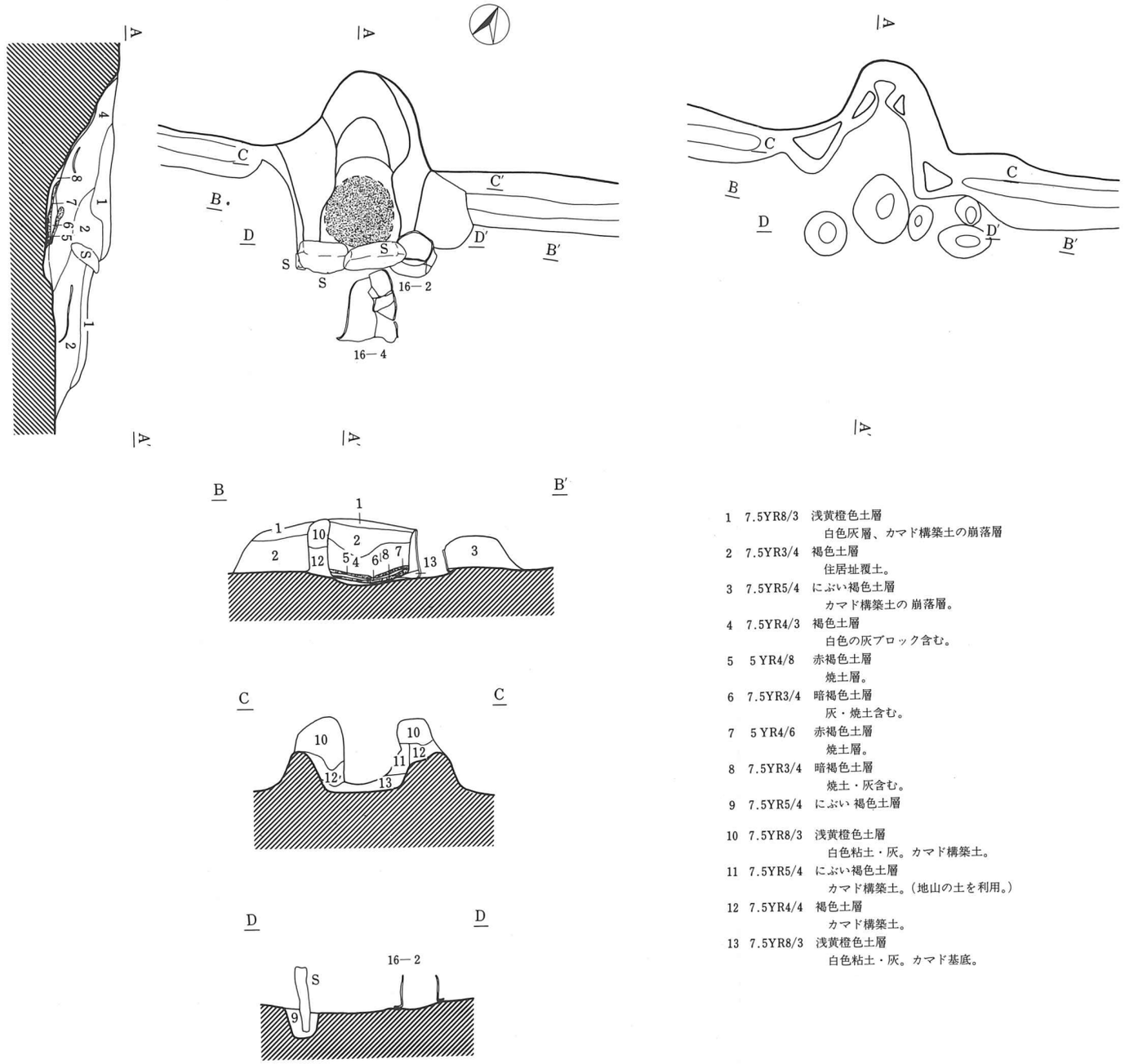
本住居址はA区中央付近、第1号トレンチ南部に位置し、全体層序Ⅳ層上において確認された。第5号住居址、第3号溝状遺構と重複関係にあり、第5号住居址に東部を破壊され、第3号溝状遺構を破壊して構築されている。

平面プランは、道路により南側部分が破壊されているため全容は明らかにできないが、北壁長493cmの角が角張ったやや大型の住居址と考えられる。確認面からの壁高は12～41.5cmを測り、壁体は地山第Ⅳ層をそのまま利用している。壁面はほぼ平滑で、直に近い立ち上がりを見せている。床面は地山第Ⅳ層をそのまま利用しており、ほぼ平坦である。壁溝はカマドの両側、北壁にのみ見られた。



第14図　第4号住居址実測図

柱穴は3個検出され、P_1が北東コーナー、P_2が北西コーナーに位置し、P_1の規模は40×39cmのほぼ円形で深さ70.5cmを測り、P_2は75×55cmの楕円形で深さ73.5cmを測る。このP_1・P_2は、



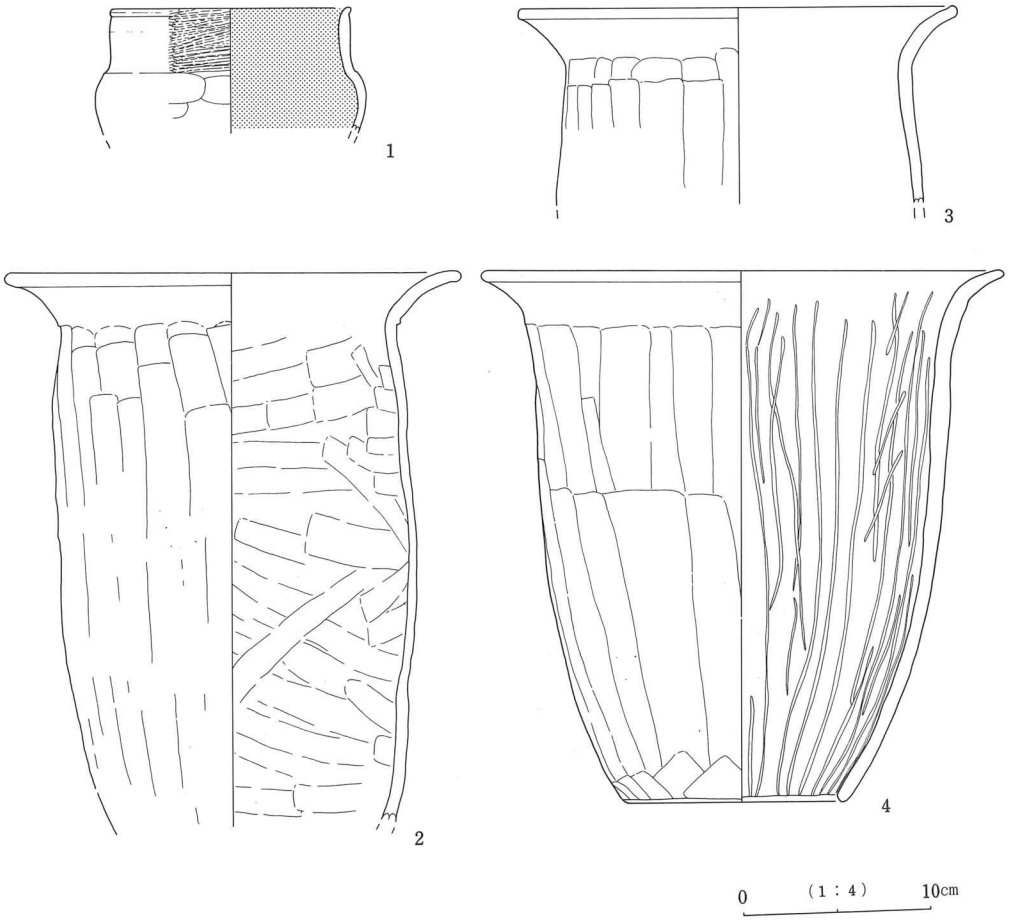
1　7.5YR8/3　浅黄橙色土層
　　白色灰層、カマド構築土の崩落層
2　7.5YR3/4　褐色土層
　　住居址覆土。
3　7.5YR5/4　にぶい褐色土層
　　カマド構築土の 崩落層。
4　7.5YR4/3　褐色土層
　　白色の灰ブロック含む。
5　5 YR4/8　赤褐色土層
　　焼土層。
6　7.5YR3/4　暗褐色土層
　　灰・焼土含む。
7　5 YR4/6　赤褐色土層
　　焼土層。
8　7.5YR3/4　暗褐色土層
　　焼土・灰含む。
9　7.5YR5/4　にぶい 褐色土層
10　7.5YR8/3　浅黄橙色土層
　　白色粘土・灰。カマド構築土。
11　7.5YR5/4　にぶい褐色土層
　　カマド構築土。(地山の土を利用。)
12　7.5YR4/4　褐色土層
　　カマド構築土。
13　7.5YR8/3　浅黄橙色土層
　　白色粘土・灰。カマド基底。

第15図　第４号住居址カマド実測図

その規模・形態・位置等から本址の主柱穴と考えて間違いないと思われる。P_3は北東隅に位置し、規模28×27cmのほぼ円形で深さ18cmを測るが、どのような性格をもつピットか不明である。

カマドは北壁中央付近に位置し、掛穴あるいは器設部の奥の天井は崩壊しているものの遺存状態は良好であった。袖部の構築材として、向って右袖部先端の芯として16－2の土師器甕が倒立の状態で、向って左袖部先端の芯として集塊岩が使用されており、まわりを粘土で補強してあった。袖部基部は地山第Ⅳ層をそのまま利用し、粘土で構築してある。また、框石は2つに割れているものの一枚の長方形の集塊岩が使用されていた。焚口から煙道の長さは99cm、袖部内のりは45cm、外のりは80cmを測る。火床部の規模は35×34cmで、煙道部は北壁の外側に掘り込んで構築されている。

遺物の出土状態は、前述したようにカマドの袖部に利用された16－2の長胴甕、カマド框石の前方に転倒した状態の16－4の甑、北東コーナー付近に16－1の壺が出土している。



第16図　第4号住居址出土土器実測図

第５表　第４号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
16－1	壺	13.2 〈 7.4〉 —	輪積成形。 口辺部と胴部の間に明瞭な稜を有し、口辺部直立気味に立ち上がる。 最大径14.4cm。	内）黒色処理 外）口縁部ヨコナデの後、横位のヘラミガキ 胴部ヘラケズリ	完全実測、口縁部1／2残存 胎土　白色粒子僅かに含む。 焼成　やや甘い 色調　内）5Y3／1（オリーブ黒色） 外）5Y5／2(灰オリーブ色)
16－2	甕	24.1 〈29.3〉 —	口辺部強く外傾外反する。 胴部は若干ふくらむが、長胴を呈する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデ 胴部縦位のヘラケズリ（下→上）	完全実測、No.2、カマド 胎土　白色粒(1mm)やや多い。 焼成　良好 色調　5YR7／4（にぶい橙色)二次火熱により下半荒れる。
16－3	甕	(23.3) 〈10.4〉 —	口唇部に面取りが施される。 胴部は長胴を呈する。	内）ナデ調整 外）口縁部ヨコナデ 胴部縦位のヘラケズリ	回転実測、口縁部1／4残存、カマド 胎土　白色及び砂粒を多く含む。粒の粗い砂粒を含む（鱗片状鉱物多量)。 焼成　不良 色調　7.5YR6／6（橙色)
16－4	甑	27.7 28.2 11	巻き上げ成形。 口縁部強く外反する。 底部は径の大きい単孔となる。	内）口縁部ヨコナデ、胴部縦位のヘラミガキ 外）口縁部ヨコナデ、胴部縦位のヘラケズリ	完全実測、口縁部1／2残存、No.1 胎土　4mm大の長石、赤色粒子、金雲母粒子を多く含む。 焼成　良好 色調　5YR7／3(にぶい橙色)

遺物（第16図、図版二十七）

本住居址からは土師器・須恵器・弥生土器・磁器が出土している。このうち弥生土器・磁器は流れ込みによるものと思われる。須恵器は小片のため器種は不明である。土師器の器種には長胴甕・大型甑・坏などがあるが、混入遺物と思われる古墳時代中期の坏も出土している。このうち図化したのは４点である。

16－１は胴部やや膨らみ、肩部に段を有し、口縁部は垂直気味に立ち上がる。内面黒色処理された鉢である。

16－２は胴部にほとんど膨らみを有さない肉厚の長胴甕である。最大径は口縁部にあり、胴部外面縦ヘラケズリがなされる。古墳時代後期中葉から出現する甕である。また、この長胴甕はカマドの袖芯に使用されており、本址に確実に共伴する土器といえる。16－３は、16－２と同様な形態をもつ長胴甕であろう。

16－４は内面縦ヘラミガキ、外面ヘラケズリのなされる大型の甑で、おそらく大型甑の伴出はこの次の段階では消滅する可能性が高い。図示できなかったが、所謂須恵器模倣坏の口辺部も伴出している。

以上のことから、本住居址の所産期は古墳時代後期中葉頃に求められると考える。

（高村）

5）　第５号住居址

遺構（第17・18図、図版六・七）

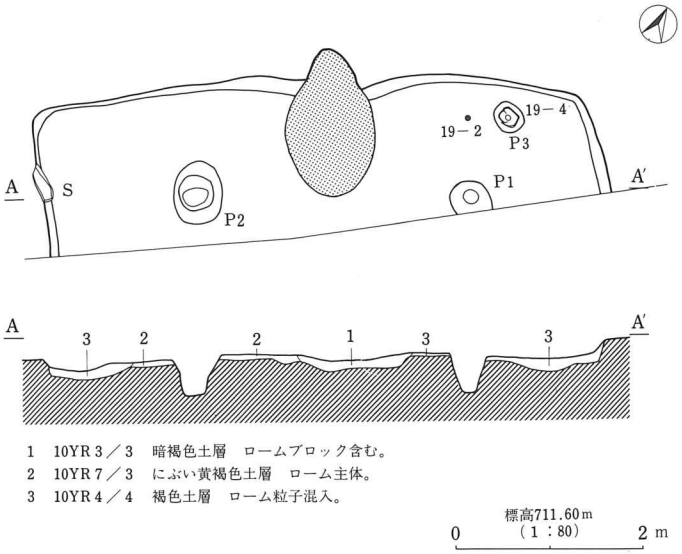
本住居址はＡ区中央付近、第１号トレンチ内、第４号住居址東側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第４号住居址、第３号溝状遺構と重複関係にあり、第４号住居址の東部、第３号溝状遺構を破壊して構築されている。

平面プランは、南部の大部分を道路により破壊されていて全容は不明であるが、北壁長562cmを測るやや角張った大型の住居址である。

確認面からの壁高は15～31cmを測り、壁体は地山第Ⅳ層をそのまま利用している。壁面はほぼ平滑で、ややなだらかな立ち上がりを見せている。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層の６cm上面に黒色粘土を含んだ堅い貼床が存在し、カマド周辺が特に顕著であった。柱穴は２個検出され、P_1は46×40cmの円形で深さ44cmを測り、P_2は68×51cmの東西に長軸をもつ楕円形で深さ33cmを測る。P_1は北東コーナー、P_2は北西コーナーに位置し、その形態及び位置などから本住居址の主柱穴と考えられる。

カマドは北壁中央に位置し、規模は焚口から煙道部までの長さ100cm、袖部は、断面図Ｂ－Ｂ′から火床の左右に袖石を埋め込んだと思われる落ち込みから、その幅を推定すると65cm程と考えられる。カマドの構築材に集塊岩・軽石・安山岩等の石が使用されていたことがはっきりしており、火床部は床面よりやや高く、50×38cmの範囲で認められる。煙道部は北壁外に掘り込んで構築される。

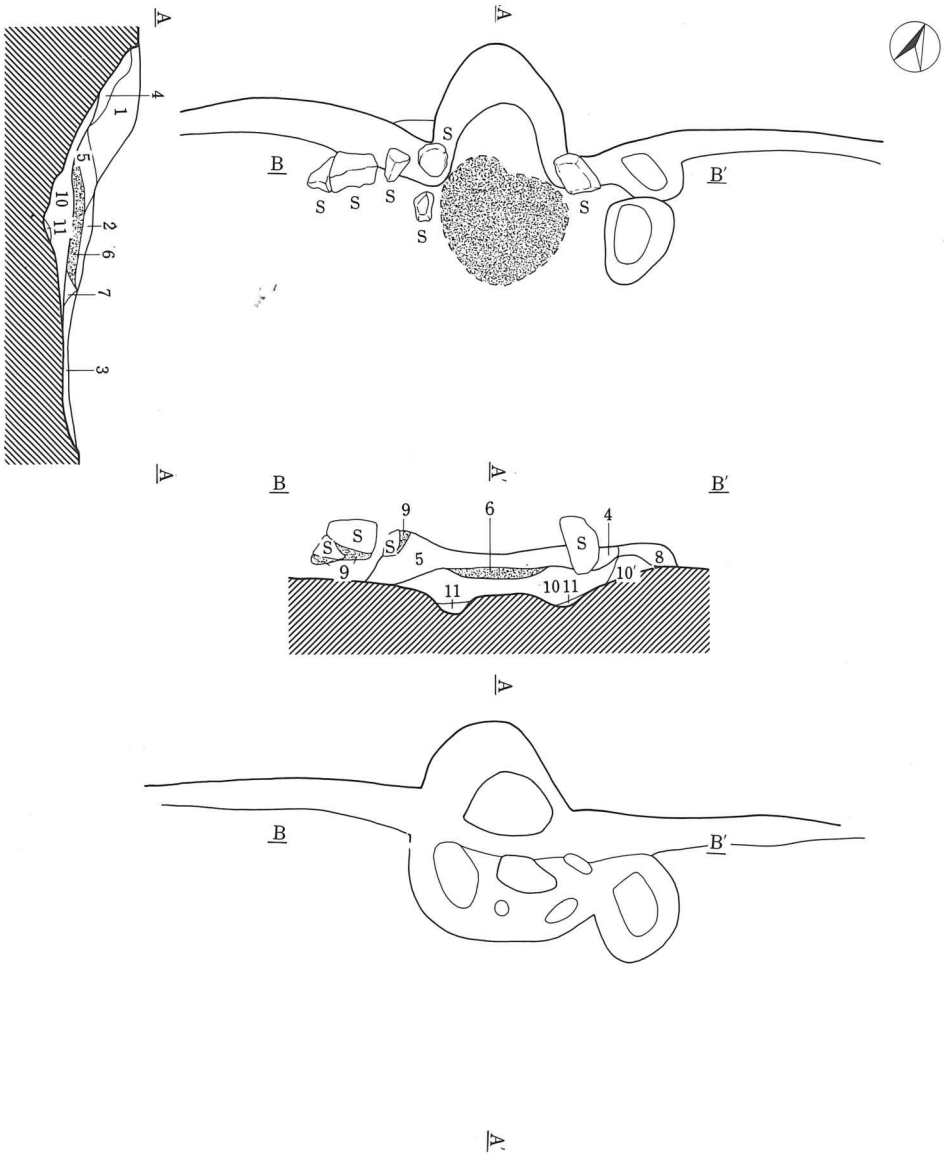


第17図　第５号住居址実測図

遺物の出土状態は北東コーナー、北壁よりに床面を掘り込んで正位に置かれていた19－４の長胴甕胴下半から底部が出土しているが、その他は覆土からの出土が多い。

遺物（第19図、図版二十十七・二十八）

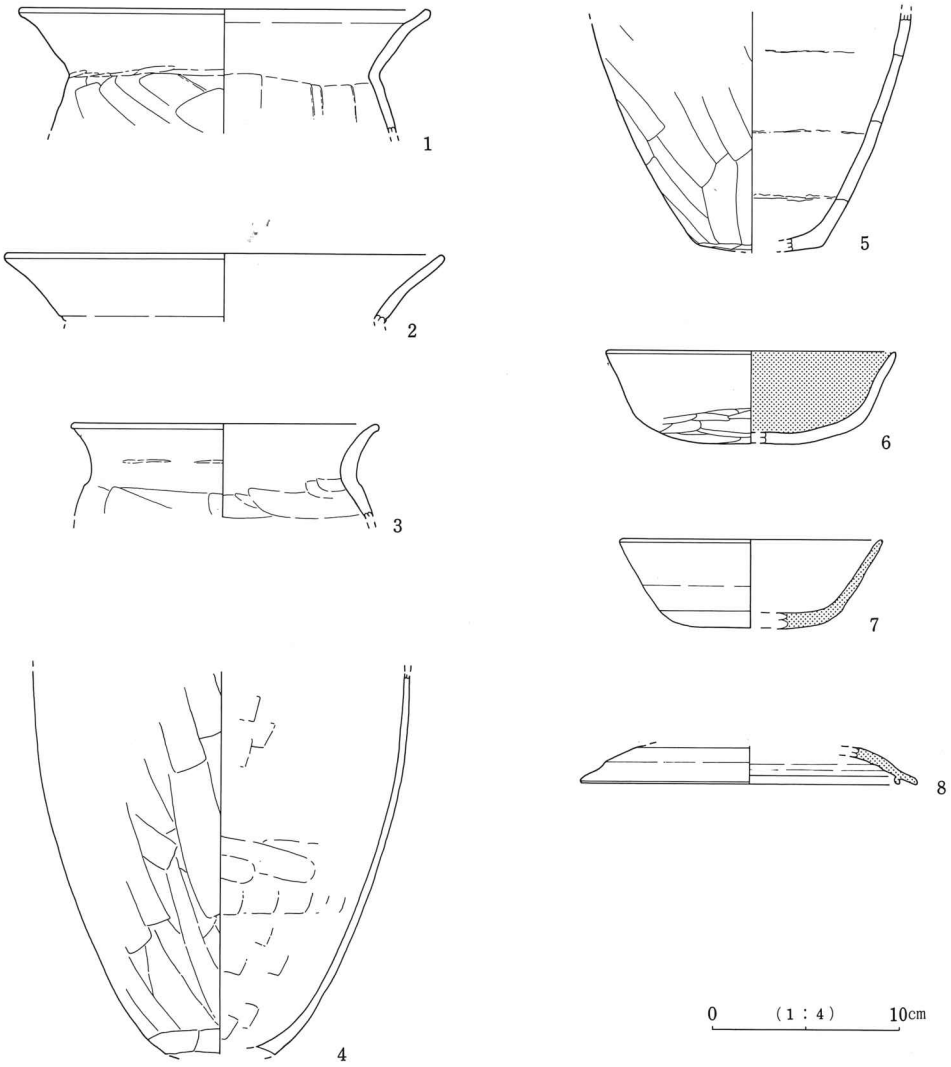
本住居址からは土師器・須恵器・弥生土器が出土している。このうち弥生土器は混入遺物と考えられる。



1	7.5YR 3/2	黒褐色土層	パミス僅かに含む。粘性なし。
2	7.5YR 3/1	黒褐色土層	粘土。
3	7.5YR 3/2	黒褐色土層	パミス小量含む。径0.5cm前後の小礫を含む。
4	2.5YR 2/1	赤黒色土層	
5	7.5YR 4/3	褐色土層	径0.5cm前後のパミス・スコリア含む。焼土粒子・灰少量含む。粘性なし。
6	7.5YR 4/4	褐色土層	焼土・灰主体。
7	7.5YR 3/3	暗褐色土層	径0.5cm前後の小礫含む。焼土粒子・灰含む。
8	7.5YR 4/1	褐灰色土層	粘土。
9	5YR 5/6	明赤褐色土層	焼土層。
10	7.5YR 4/2	灰褐色土層	ロームブロック・パミス・径1cm前後の小礫含む。
10′	7.5YR 4/2	灰褐色土層	10層に比べ、やや黒色が強い。
11	7.5YR 5/4	にぶい褐色土層	ローム主体。

標高711.70m
0 (1:30) 1m

第18図　第5号住居址カマド実測図



第19図　第５号住居址出土土器実測図

土師器の器種には長胴甕・小型甕・坏・鉢などがあり、須恵器には坏・蓋・甕などがある。そのうち図化できたのは土師器６点、須恵器２点である。

19－１・２は口縁部に最大径をもつ肉薄の長胴甕である。胴部下半の形態はおそらく19－４・５と同様と思われる。19－３は肉薄の小型甕である。口縁部から頸部まで肉厚であるが、胴部に至ると極端に肉薄となる。19－４・５も肉薄の長胴甕であるが、所謂「武蔵型甕」と比較すると器壁にやや厚みがあり、直前の土器といえよう。19－６は土師器坏で内面黒色処理されている。この坏はおそらく金属器碗からの影響により成立したものと思われ、古墳時代終末期に出現す

第6表　第5号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
19－1	甕	(22.0) 〈 6.5〉 —	巻き上げ成形。 口縁部「く」の字状に外反する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケナデ 外）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ	回転実測、口縁部1／2残存 胎土　茶色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　5YR6／6（橙色）
19－2	甕	(23.4) 〈 3.5〉 —	輪積成形。	内外面　ヨコナデ	回転実測、口縁部1／3残存、No.2 胎土　密 焼成　良好 色調　内）2.5YR4／6(赤褐色) 外）2.5YR5／6(明赤褐色)
19－3	甕	(16.2) 〈 4.9〉 —	口縁部「く」の字状に外反する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測、口縁部1／6残存 胎土　白色粒子・雲母多量含む。 焼成　良好 色調　5YR5／6（明赤褐色）
19－4	甕	— 〈20.2〉 (5.8)		内）ヘラナデ、胴下半接合部(?)付近に条痕をもつナデ（布＋指か） 外）縦のヘラケズリ（下→上）	回転実測 胎土　微砂多く含む。 焼成　良好 色調　10YR4／2(灰黄褐色) 外面下半に煤・灰付着。
19－5	甕	— 〈12.8〉 6.7		内）ヘラナデ 外）ヘラケズリ	完全実測、No.1・No.2、貼床 胎土　砂粒多く含む、良質。 焼成　良好 色調　10YR5／6（明褐色）
19－6	坏	(15.4) 4.9 ・	体部は直線的に外傾し、底部は偏平な丸底を呈する。	内）黒色処理 外）体部ロクロヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測、口縁部1／7残存 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　外）10YR7／3（にぶい黄橙色）
19－7	須恵器坏	(14.0) 4.7 ・	体部は直線的に外傾し、底部は偏平な丸底を呈する。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／3残存 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　不良 色調　5YR6／2（灰オリーブ色）
19—8	須恵器甕	(18.0) 〈 2.0〉 —	天井部は丸みをもち、かえりを有する。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／6残存 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR6／1（灰色）

る。

19－7は須恵器坏であり、底部ヘラ切り未調整で、食膳具に須恵器が普及する初源的なものと言えよう。

17－19は須恵器蓋で、内面にかえりを有する。

以上、須恵器坏（19－7）の出現時期、所謂「武蔵型甕」が成立する時期について8世紀以前に遡らせることができるかどうか問題は残るものの、古墳時代末から奈良時代初頭に本住居址の土器群を位置づけておきたい。　（高村）

6）　第６号住居址

遺構（第20図、図版九）

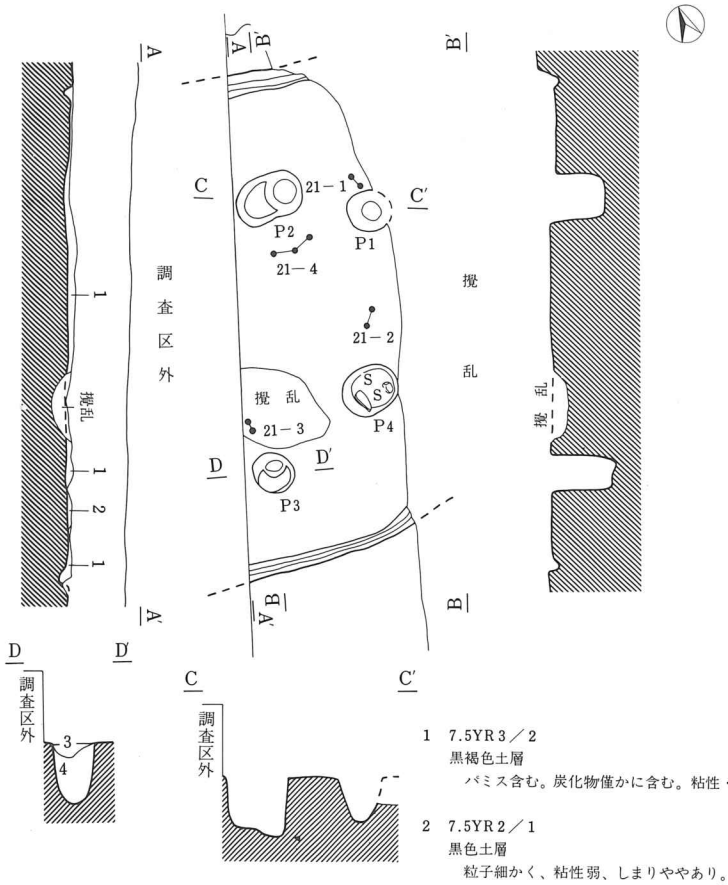
本住居址はＣ区、第５号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第４号溝状遺構と重複関係をもち、北壁の一部を破壊されている。また、道路により住居址の東側を破壊され、西側は調査区外のため未調査である。したがって、住居址の中央部分が検出されたのみであり、平面形態・規模は不明であるが南北長520cmを測る。

覆土は二層に分割されるが、耕作により、上面を破壊されているため、最も厚い部分で11cmを測るのみである。第１層はパミスと少量の炭化物を含む黒褐色土層で、床面上のほぼ全面に堆積している。第２層は粒子の細かい黒色土層で、南側に僅かに観察されるのみである。

確認面からの壁面は北壁で19～21cmと比較的良好であるが、南壁は０～６cmを測るのみである。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築され、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は北壁下・南壁下のいずれからも検出され、溝幅10～18cm、深さ４～８cmを測り、断面形は「U」字状を呈する。

床面は地山第Ⅳ層を踏み固めて構築され、ほぼ平坦で比較的堅固な状態である。また、南側に撹乱がみられる。

ピットは４個検出された。主柱穴はＰ₁が想定



1　7.5YR３／２
黒褐色土層
パミス含む。炭化物僅かに含む。粘性・しまりなし。

2　7.5YR２／１
黒色土層
粒子細かく、粘性弱、しまりややあり。

3　7.5YR３／４　暗褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。灰白色土をわずかに含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。

4　7.5YR２／３　極暗褐色土層　ローム粒子・パミスわずかに含む。粒子やや粗く、粘性・しまりなし。

標高710.90m
0　（1：80）　2 m

第20図　第６号住居址実測図

されるが、住居址の中央部分が検出されたのみであるため明確ではない。P_1は東側を道路によって破壊されるが、径45cm前後の円形を呈するものと考えられ、46cmの深度を有し、断面形は「U」字状を呈する。P_2は74×48cmの楕円形を呈し西側にテラスを有する。深さは最深部で64cmを測る。P_3は44×40cmの円形を呈する。南側にテラスを有し、深さは最深部で70cmを測る。覆土は灰白色土を僅かに含む暗褐色土層と極暗褐色土層の二層に分割された。P_4は60×50cmの楕円形を呈する。深さは14cmを測り、底面は凹凸が著しい状態である。

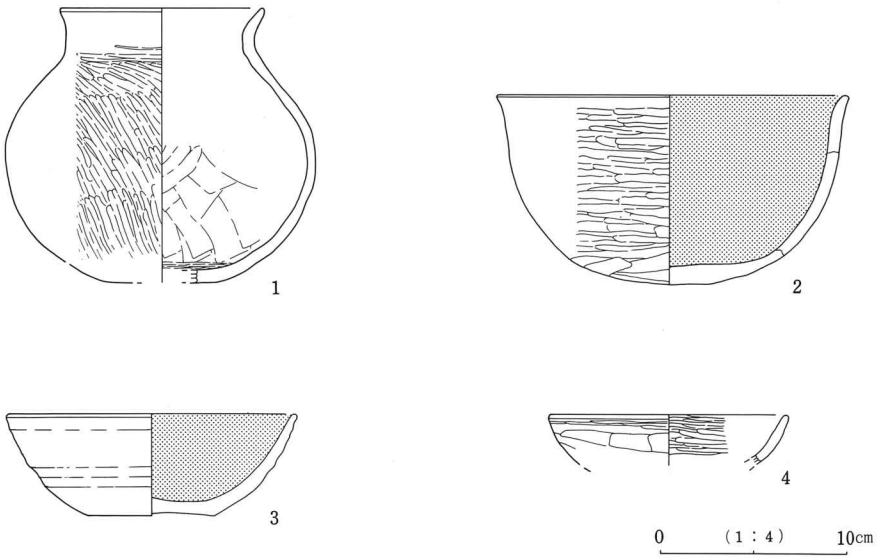
カマドは検出されなかった。

遺物の出土状況は特に集中する箇所はみられないが、21－1はP_1北側、21－2はP_1・P_4間の床面上より出土したものであり、これらの遺物は本住居址の共伴遺物と見做すことができるが、21－3は混入遺物と考える。

遺物（第21図、図版二十八）

本住居址からは弥生土器・土師器・須恵器が出土している。このうち弥生土器は混入遺物である。図示し得たのは土師器4点で、器種には壺・鉢・坏がある。

21－1は口縁部短かく外反し、底部は丸底気味となる壺で、口縁部ヨコナデ、胴部外面にヘラミガキが施される。21－2は丸底で口縁端部でわずかに外反する鉢である。内面に黒色処理、外面に横位のヘラミガキが施される。坏には21－3・4があるが、3の底部は回転糸切りによるものであり、混入品と考えられる。4は内面に丁寧なヘラミガキ、体部にヘラケズリが施される。この他小片のため図示し得なかったが、外面にヘラケズリの施される長胴甕、内面に黒色処理の



第21図　第6号住居址出土土器実測図

第７表　第６号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
21－1	壺	10.8 14.5 5.5	口縁部短く外傾し、最大径（16.4cm）は胴中位に位置する。底部丸底気味。	内）口縁部～頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラミガキ	完全実測、№24・25 胎土　白色粒子多く含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ８／３（浅黄橙色）
21－2	鉢	18.8 10.0 ・	体部内湾して立ち上がり、端部で外反する。 底部丸底。	内）黒色処理 外）底部ヘラケズリの後、体部横位のヘラミガキ	完全実測、口縁部１／２残存、 №18・20～22 胎土　３mm大の砂粒少量含む。 白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　５ＹＲ６／６（橙色）
21－3	坏	14.4 5.4 6.6	体部内湾して立ち上がる。 底部回転糸切り。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	完全実測、口縁部１／２残存 №３・４ 胎土　白色粒子多量含む。透明粒子僅かに含む。 焼成　良好 色調　内）10Ｇ２／１（緑黒色） 外）５ＹＲ５／６（明褐色）
21－4	坏	12.8 2.7 ――	体部内湾して立ち上がり、端部でわずかに外反する。	内）丁寧な横位ヘラミガキ 外）口縁部ヨコナデの後、横位ヘラミガキ 体部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／３残存 №10・11・27 Ｄ区５トレ 胎土　白色粒子多く含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ５／４ （にぶい黄褐色）

施される坏、須恵器坏がある。

以上、本住居址の所産期は21－１・２などの特徴から古墳時代後期中葉に求められると考える。

（三石）

７）　第７号住居址

遺構（第22図、図版十）

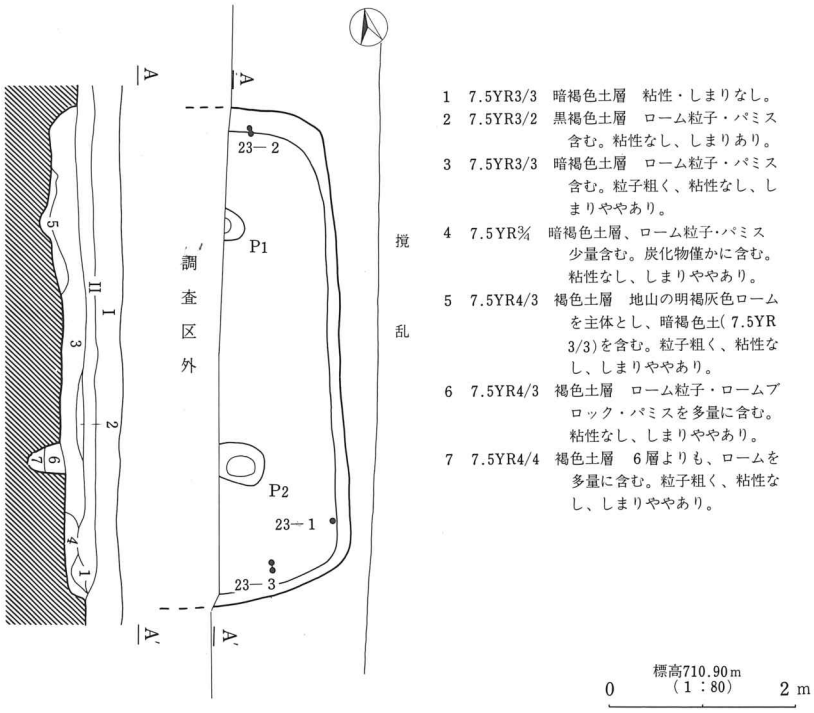
本住居址はＤ区、第５号トレンチ中央付近に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出されたが、北側床面とＰ$_2$部分は全体層序第Ⅴ層まで達している。西側大半が調査区外であるため、東壁付近が調査できたのみである。また、第７号土坑と重複関係をもち、上面を破壊して構築されている。

平面形態・規模については、東壁付近のみの調査のため不明であり、東壁長425cmを計測し得るのみである。

覆土は五層に分割されたが、第１・２層は上面に僅かに観察されるのみである。第３層は覆土の大半を占める暗褐色土層である。第４層は南壁下にみられ、炭化物を僅かに含む暗褐色土層である。第５層は地山第Ⅴ層を主体とした褐色土層である。

確認面からの壁高は７～27cmを測り、床面から比較的穏やかな傾斜で立ち上がる。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築されるが軟弱である。壁溝は検出されなかった。

床面は中央部及び南側は地山第Ⅳ層、北側は第Ⅴ層により構築されるが、凹凸が著しく軟弱な



第22図　第7号住居址実測図

状態である。

ピットは2個検出された。主柱穴と考えられるが、P_1は深さが12cmと浅いため明確ではない。P_1は径33cm前後の円形を呈すると考えられる。P_2は58（推定値）×44cmの楕円形を呈しており、48cmの深度を有し、地山第Ⅴ層まで達している。覆土は二層に分割された。

カマドは検出されなかった。

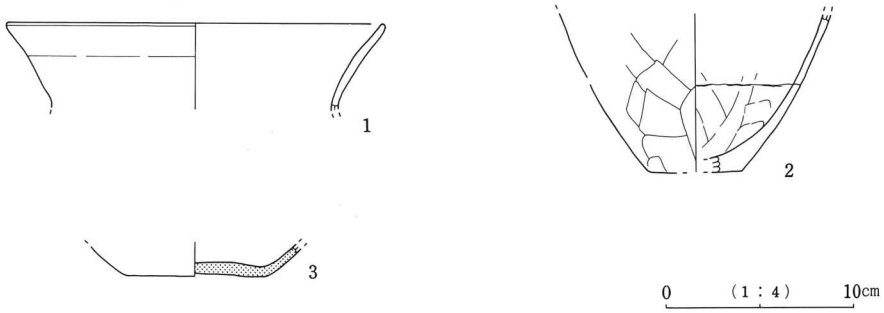
遺物の出土状況は、散漫な状態で集中する箇所は認められない。23－1は南東コーナー付近、23－2は北壁直下、23－3は南壁直下より出土し、いずれも床面より10cm前後浮いた状態で出土している。

遺物（第23図、図版二十八）

本住居址からは土師器・須恵器が出土している。そのうち図示し得たのは土師器甕2点、須恵器坏1点の3点である。

23－1・2は肉薄の長胴甕であるが、いずれも破片資料のため全体の形状は不明である。1は内外面ともヨコナデ、2は外面にヘラケズリが施される。

23－3は須恵器坏で、底部は回転糸切りのまま未調整である。この他小片のため図示し得なかったが、1・2と同様な肉薄の長胴甕の胴部片が出土している。



第23図　第７号住居址出土土器実測図

第８表　第７号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
23－1	甕	(20.2) 〈4.5〉 —		内外面　ヨコナデ	回転実測、口縁部１／５残存 No.6 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　内）5ＹＲ5／6(明褐色) 外）7.5ＹＲ5／4（にぶい褐色）
23－2	甕	—— 〈8.5〉 (5.0)		内）ヘラナデ 外）ヘラケズリ	回転実測、底部１／２残存 No.9・10 胎土　微砂多量含む、径１mm前後の白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　5ＹＲ4／2（灰褐色）
23－3	須恵器坏	—— 〈1.7〉 (7.6)	底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、底部１／２残存 No.1・2・ 胎土　径１mm前後の白色粒子多量含む。密 焼成　良好 色調　10Ｙ5／1（灰色）

以上、本住居址の出土遺物は、堤編年（1987）の前田Ⅶ期に該当すると考えられるが、資料数が極めて少なく、小片であることから断定は避けたい。

（三石）

8）　第８号住居址

遺構（第24図、図版十）

本住居址はＣ区内、第５号トレンチ中央南寄りに位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、東壁部分が検出されたのみであり、西側大半は調査区外のため未調査である。さらに南壁から東壁中央部分にかけて撹乱によって破壊される。平面形態及び規模等は不明であるが、推定で南北長310cm前後を測る小型の住居址である。

南半部が撹乱により破壊されているため、覆土は北半部が残存しているのみであり、ローム粒

子・パミスを含む黒褐色土層一層である。

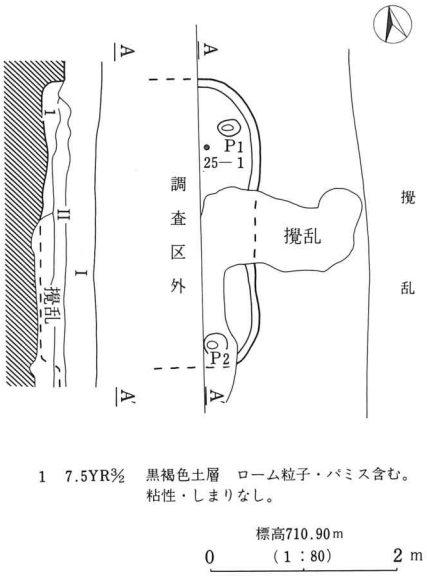
確認面からの壁高は4～25cmを測り、床面から比較的穏やかな傾斜で立ち上がる。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築されるが堅固な状態ではない。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を踏み固めてほぼ平坦であるがやや軟弱な状態である。

ピットは北東コーナー、南東コーナーより2個検出され、主柱穴と考えられる。P_1は25×19cmの楕円形を呈する。P_2は撹乱により上面を破壊されているが、残存部で径25cmの円形を呈し、13cmの深度を有する。

カマドは検出されなかった。

遺物の出土状況は出土量が極めて少なく、25－1がP_1の南西、床面直下より正位の状態で直立して出土したのみである。（三石）

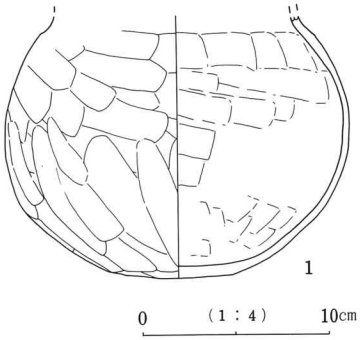


第24図　第8号住居址実測図

遺物（第25図、図版二十八）

本住居址からは土師器小型甕が出土している。肉薄の甕で、成形技法に所謂「武蔵型甕」の影響を受けて成立したもので、奈良時代に伴出するものであろう。

本住居址の出土土器は、この甕1点のみで、形態的時期変遷がはっきりしていない段階での時期決定は困難である。（高村）



第25図　第8号住居址出土土器実測図

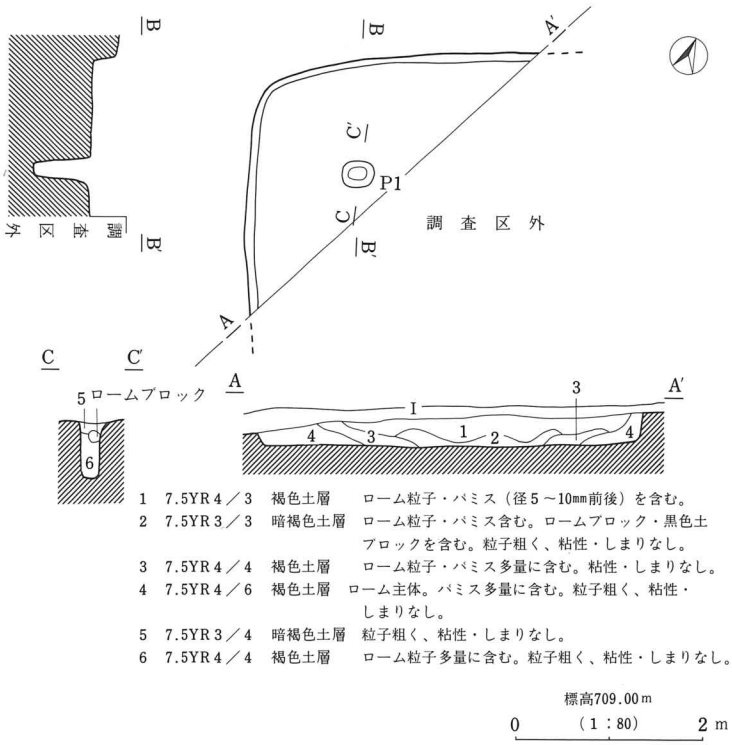
第9表　第8号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
25－1	甕	―― <13.8> 6.8	器肉薄く、胴部は球胴形を呈する。胴部最大径（18.2cm）は胴中位に位置する。	内）頸部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）頸部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	完全実測、No.1 胎土　砂粒多量含む。密 焼成　良好 色調　10YR8／3（浅黄橙色） 内外面煤状炭化物付着。

9）第９号住居址

遺構（第26図、図版十一・十二）

本住居址はＥ区内、第６号トレンチ中央付近に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、北西コーナー付近が検出されたのみで大半は調査区外である。平面形態・規模については全く不明である。



第26図　第９号住居址実測図

覆土は四層に分割され自然堆積の状況を示している。第１層は径５～10㎜前後のパミスを含む褐色土層で、第２層は住居址中央部の床面上に堆積する暗褐色土層である。第４層はロームを主体とする褐色土層で、北壁下・西壁下における第１次堆積土であり壁体の崩落層と考える。

確認面からの壁高は15～29㎝を測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、平坦で比較的堅固な状態である。ピットは１個検出され、北西部に配される主柱穴と考える。覆土は暗褐色土層（第５層）と褐色土層（第６層）の二層に分割された。炉址は北西コーナー付近のみの調査であるため検出されなかった。

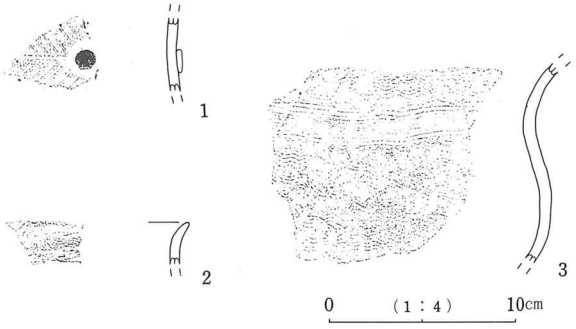
遺物の出土状況は弥生土器・土師器が散漫な状態で出土しており、土師器は混入遺物である。北壁直下の床面上より赤色塗彩された壺、P_1内より櫛描波状文の施された甕が出土している。

遺物（第27図）

本住居址から出土した弥生土器で図化し得たものは拓影図３点（27－１～３）のみであり、器種は壺・甕である。27－１は壺の頸部片で、篦描横走文で区画された中に、篦描羽状沈線文が施文され、さらに円形浮文が貼付される。甕には27－２・３がある。２は口縁部片で櫛描波状文が施文される。３は頸部から胴上半部に位置する破片で、10本一組の振幅の小さい櫛描波状文を施

文した後、頸部に同単位の櫛描簾状文(3連止め)が右回りに施される。この他図示し得なかったが、外面に赤色塗彩の施される壺の胴部片が出土している。

以上の出土遺物から、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考える。　(三石)



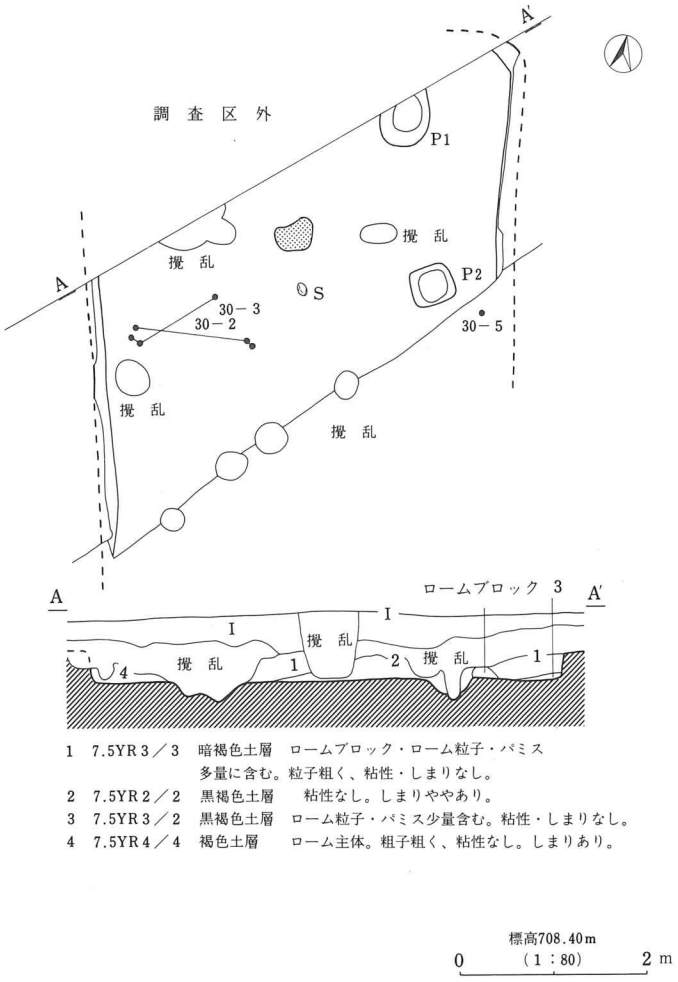
第27図　第9号住居址出土土器拓影図

10) 第10号住居址

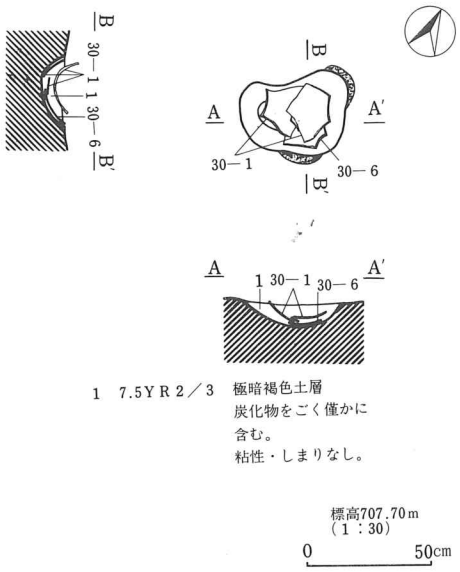
遺構(第28・29図、図版十二)

本住居址はH区内、第7号トレンチ北端部に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、南側は道路により削平されており、西壁上面は撹乱によって破壊されている。さらに北西部分が調査区外であるため未調査である。このため東壁北側と西壁の一部が検出されたのみであり、平面形態・規模は不明であるが、東西長は推定で約450cmを測る。

覆土は撹乱層がみられ、全体を観察するには至らなかったが四層に分割された。第1層はローム粒子・ロームブロックを多量に含む暗褐色土層、第2層は黒褐色土層で、中央部床面上に堆積している。第3層は黒褐



第28図　第10号住居址実測図



第29図　第10号住居址炉址実測図

色土層で、東壁直下の床面上に薄く堆積している。第4層は西壁下にみられるロームを主体とする褐色土層で、壁体の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は0～42cmを測り、上面を撹乱によって破壊されているものの、西壁の残存状態は比較敵良好である。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築され、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、平坦で堅固な状態であるが、各所に径30～40cm前後のピット状の撹乱がみられる。

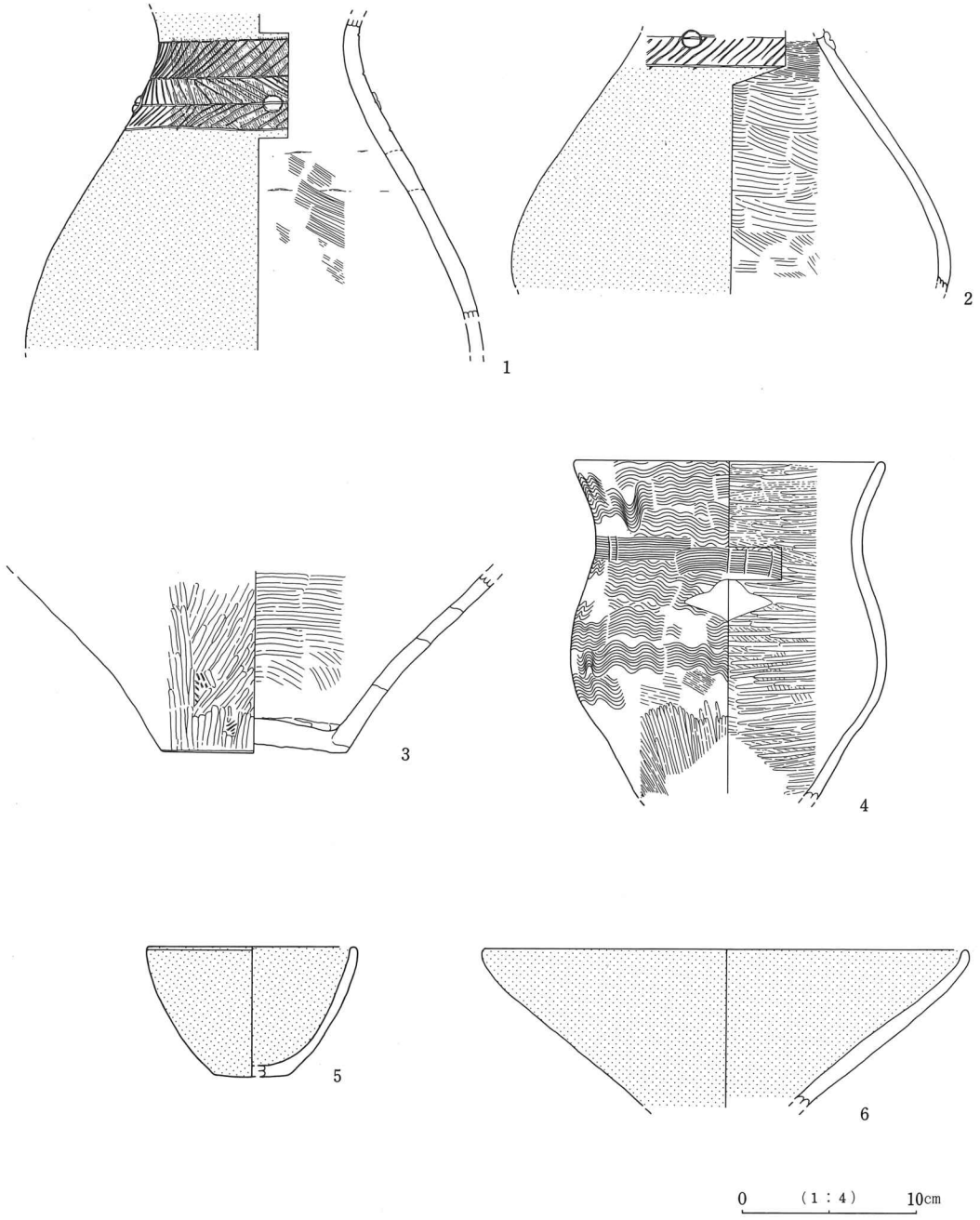
ピットは東側より2個検出された。P_1は70(推定値)×54cmの楕円形を呈すると考えられ、22cmの深度を有する。P_2はは46×42cmの隅丸方形を呈し、深さは21cmを測る。

炉址は住居址中央北側に位置すると考えられ、85×56cmの不整形を呈し、床面からの掘り込みは最深部で22cmを測る。覆土は炭化物を僅かに含む極暗褐色土層一層である。また炉址の北東及び南側の床面に赤く焼け込んだ範囲が認められる。炉址内より壺の頸部から胴上半部（30－1）と高坏の坏部（30－6）が炉内に敷かれた状態で出土した。

遺物の出土状況は、特に集中する箇所は認められないが、住居址西半部より比較的多くの遺物が出土した。30－1・6が炉内より出土し、30－5が東壁下撹乱内より出土した。30－2・3は西側の床面より若干浮いた状態で出土している。また、30－4は覆土中からの出土である。

遺物（第30・31、図版二十九）

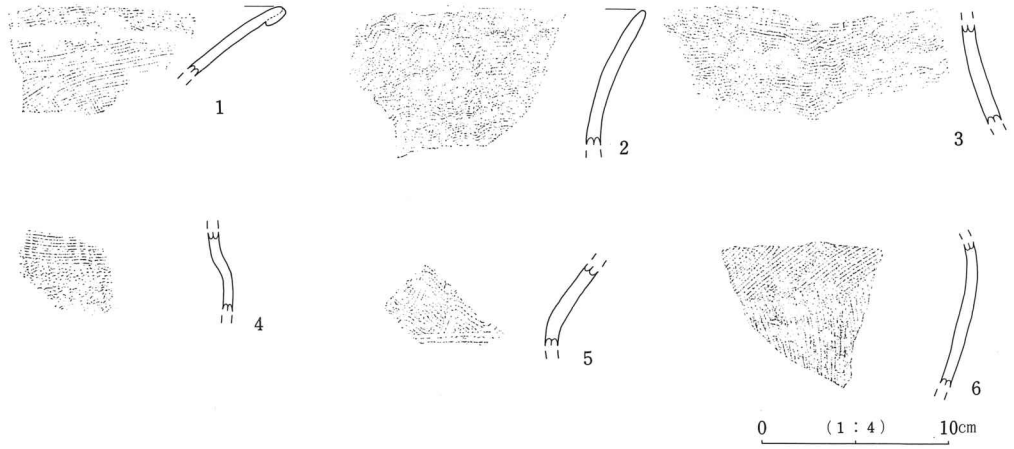
本住居址の出土遺物には弥生土器があり、器種には壺・甕・鉢・高坏がある。壺には30－1～3があり、1・2は頸部から胴上半部に位置する資料で、いずれも頸部に箆描横走文で区画した中に箆描羽状沈線文が施文される。さらに沈線を有する円形浮文が貼付され、1は等間隔に4個みられる。甕には30－4と破片資料の31－1～6がある。30－4は底部を欠損するがほぼ全容を知ることができた。口辺部は綾やかに外反し、最大径（18.0cm）は胴中位に位置するが口径とほぼ等しい。文様は口縁部から胴上半部に10本一組の櫛描波状文を施した後、頸部に同単位の櫛描簾状文（3連止め）を右回りに施文する。31－1は貼付口縁で櫛描斜走文が施文される。他に櫛描斜走文の施文されるものに31－6がある。31－2～5はいずれも櫛描波状文が施文されるが、5の櫛描波状文が振幅の大きいものであるのに対し、4は幅・振幅とも非常に細かいものである。



第30図　第10号住居址出土土器実測図

第10表　第10号住居出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
30－1	壺	—— 〈19.1〉 ——		内）斜位のハケメ調整、（磨滅・剥離著しい） 外）赤色塗彩、口縁部縦位、胴部横位のヘラミガキ 文）ハケメ調整の後、頸部に４本の箆描横走文で区画した中に箆描羽状沈線文を施す。また、等間隔で４ヶ所に沈線をもつ円形浮文が貼付される。	完全実測、№31・33・35・炉 胎土　白色砂粒多量含む。密。 焼成　良好 色調　内）10ＹＲ８／３（浅黄橙色） 外）10Ｒ３／６（暗赤色） 外面煤状炭化物付着。
30－2	壺	—— 〈14.7〉 ——		内）ハケメ調整 外）赤色塗彩、ヘラミガキ 文）頸部に箆描横走文で区画した中に箆描羽状沈線文を施す。また、沈線をもつ円形浮文が貼付される。	回転実測、№3・16・17 胎土　砂粒少量含む。 焼成　良好 色調　内）５ＹＲ７／６（橙色）
30－3	壺	—— 〈10.3〉 (10.6)		内）横位のハケメ調整 外）縦位のヘラミガキ	回転実測、底部１／２残存、№4・5・11 胎土　砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　５ＹＲ７／８（橙色）
30—4	甕	17.8 〈19.3〉 ——	口縁部穏やかに外反する。 最大径（18.0）は胴中位に位置し、口径とほぼ等しい。	内）ハケメ調整の後、横位・斜位のヘラミガキ 外）口縁部～胴部斜位のハケメ調整の後、口縁部ヨコナデ、胴下半部縦位のヘラミガキ 文）口縁部～胴上半部に10本一組の櫛描波状文を右回りに施文した後、頸部に同単位の櫛描簾状文（３連止め）を施す。	完全実測 胎土　白色微砂粒少量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ８／４（浅黄橙色） 二次加熱のためもろい。
30—5	鉢	(12.0) 7.4 (4.1)	体部内湾気味に立ち上がる。	内外面とも赤色塗彩、内面・外面上部は横位、外面下部は縦位のヘラミガキ	回転実測、口縁部１／５残存 №29・37 胎土　白色粒子少量、砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　内外面10Ｒ４／８（赤色） 胎土色調　10ＹＲ７／６（明黄褐色）
30－6	高坏	(27.4) 〈9.0〉 ——	坏部のみ。直線的に立ち上がり、端部で内湾する。	内外面とも赤色塗彩、横位のヘラミガキ	回転実測、口縁部１／２残存・炉。 胎土　白色粒子密に含む。 焼成　良好 色調　内外面10Ｒ４／８（赤色） 胎土色調　10ＹＲ７／６（明黄褐色）

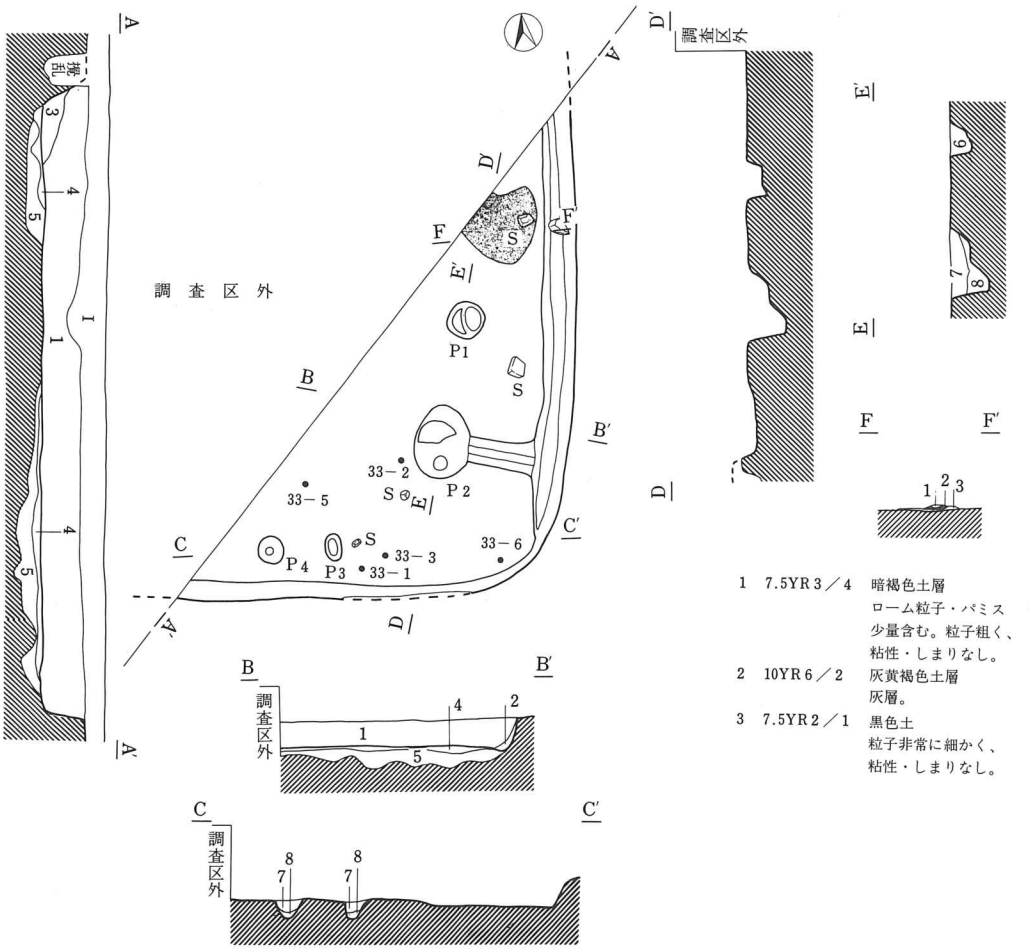


第31図　第10号住居址出土土器拓影図

30－5は鉢で、体部は内弯気味に立ち上がる。30－6は高坏の坏部で口径は推定で27.4cmを測る大型品であり、直線的に立ち上がり端部で内弯する。5・6はいずれも内外面に赤色塗彩が施される。この他小片のため図示し得なかったが、外面に赤色塗彩された壺・高坏の脚部がある。

以上、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考えられる。（三石）

11）第11号住居址



1　7.5YR3／4　暗褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
2　10YR6／2　灰黄褐色土層　灰層。
3　7.5YR2／1　黒色土　粒子非常に細かく、粘性・しまりなし。

1	7.5YR3／3	暗褐色土層	ローム粒子・パミス僅かに含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
2	7.5YR3／4	暗褐色土層	ローム粒子多量に含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
3	7.5YR2／3	極暗褐色土層	ローム粒子・パミス含む。粘性なし。しまりあり。
4	7.5YR2／3	極暗褐色土層	ローム粒子・パミス含む。粒子やや粗く、粘性なし。
5	7.5YR4／4	褐色土層	ローム粒子・パミスを多量に含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
6	7.5YR3／3	暗褐色土層	炭化物わずかに含む。粘性・しまりなし。
7	7.5YR3／4	暗褐色土層	パミスわずかに含む。粘性・しまりなし。
8	7.5YR4／4	褐色土層	ローム主体。パミス含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高708.40m
0　（1：80）　2 m

第32図　第11号住居址実測図

遺構（第32図、図版十三）

本住居址はＨ区内、第７号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上面において検出された。他遺構との重複関係はないものの、東壁及び南壁の一部上面を撹乱によって破壊される。また、北西部大半が調査区外である。平面形態及び規模は東壁の南側と南壁の東側が検出されたのみであるため不明であるが、隅丸長方形を呈すると考えられる。

覆土は三層に分割された。第１層は暗褐色土層で、覆土の大半を占める。第２・３層は東壁直下にのみ認められ、第２層が暗褐色土層、第３層が極暗褐色土層である。

確認面からの壁高は11～46cmを測り、遺存状態は良好である。床面からの立ち上がりは比較的緩やかである。壁体は地山第Ⅳ層を利用しており、堅固で平滑な状態である。壁溝は東壁下において検出された。また、P_2から東方に70cmの溝がのびており、東方は壁溝に交わる。溝幅は14～28cm、深さは５～８cmを測り、断面形は「Ｕ」字状を呈する。

床面は地山第Ⅳ層を掘り窪めた後、第４層極暗褐色土層、第５層褐色土層を埋め戻して叩きしめた貼床が施される。構築状況は平坦で非常に堅固な状態である。また、東壁下の中央北方寄りに径80cm前後の範囲で灰層が認められる。

ピットは４個検出された。P_1は42×40cmの円形を呈し、西側にテラスを有する。深さはテラス部で10cm、最深部で22cmを測る。P_2は主柱穴と考えられ、79×60cmの楕円形を呈し、北側にテラスを有する。深さはテラス部で23cm、最深部で41cmを測る。P_3・P_4は入口施設に関するピットと考えられ、P_3は28×18cm、P_4は30×26cmの楕円形を呈し、各々18cm・19cmの深度を有する。

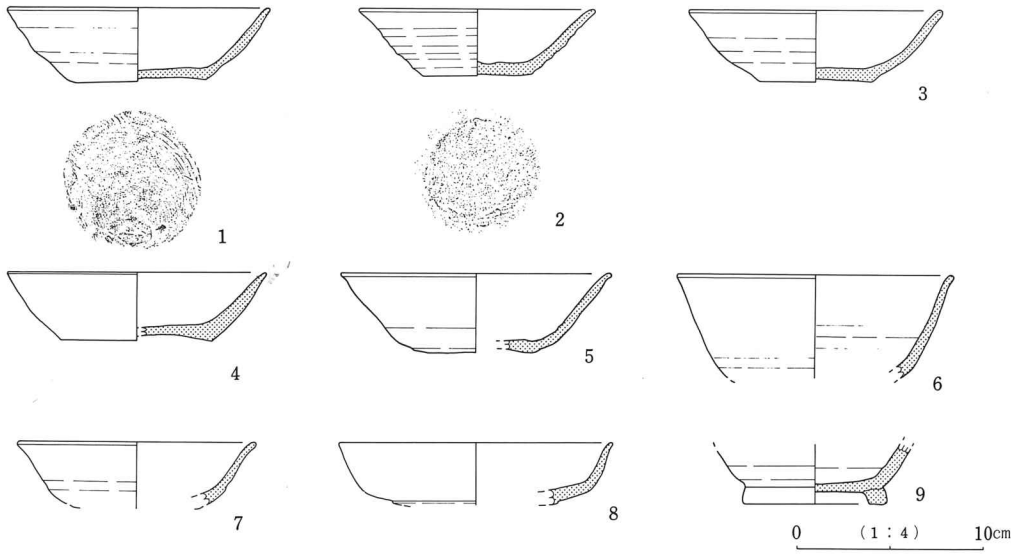
カマドは先述したように、住居址の南西部分のみの調査であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は特に集中する箇所はみられず、土師器・須恵器が散漫な状態で出土した。33－１・２・５は南壁直下及びP_2西側の貼床内より出土した。33－３は南壁下の床面付近より出土し、33－６は南東コーナー直下の床面より14cm浮いた状態で出土した。

遺物（第33図、図版二十九・三十）

本住居址の出土遺物には土師器・須恵器があるが須恵器がその主体を占める。図示し得たものは全て須恵器で坏８点（33－１～８）、長頸瓶１点（33－９）の９点である。

33－１～５はいずれも底部の切り離しは回転糸切りのまま未調整である。また、体部が直線的に外傾しており、特に２は体部の外傾化、底部の縮小化の傾向が認められる。33－６は他と比較して器高が高く高台付坏であると思われる。33－８は器高が低く、体部は屈曲して立ち上がる。高台が貼付されることも考えられるが明確ではない。33－１・３・４・５・７には火襷がみられる。33－９は長頸瓶の底部と考えられ、回転ヘラケズリの後、高台が貼付される。また、破片資料であるが、坏には底部に手持ちヘラケズリの施されるもの、回転ヘラケズリの後、高台が貼付されるものがある。この他、外面に平行叩きの施される甕、内面にかえりを有さずロクロヨコナ



第33図　第11号住居址出土土器実測図

第11表　第11号住居址出土土器観察表〈1〉

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
33—1	須恵器坏	14.0 4.0 6.8	体部直線的に外傾する。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測、No.3 胎土　白色、その他砂粒多量含む。 焼成　不良 色調　2.5Y 5／1（黄灰色） 内面に火襷あり。
33－2	須恵器坏	12.6 3.6 5.4	体部直線的に外傾し、端部で外反気味になる。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測、No.4 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　やや甘い。 色調　7.5GY 4／1（暗緑灰色）
33－3	須恵器坏	(13.5) 3.7 6.0	体部内弯して立ち上がり、端部で外反する。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　底部2／3残存、No.2、Q2 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　5Y 5／1（灰色） 火襷あり。
33－4	須恵器坏	(13.8) 3.6 (8.0)	体部器肉厚く、直線的に外傾する。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　底部1／3残存、II区 胎土　白色砂粒少量含む。粒子のやや粗い砂粒微量含む。 焼成　良好 色調　10Y 4／1（灰色）
33－5	須恵器坏	(14.2) 4.1 (6.0)	体部直線的に外傾し、端部でわずかに外反する。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　口縁部1／3残存、No.6 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　7.5Y 5／2（灰オリーブ色） 内外面に火襷あり。
33－6	須恵器坏	(14.8) (5.5) ——	体部わずかに内弯し、端部で外反する。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　口縁部1／3残存、No.1 胎土　砂粒子小量含む。 焼成　良好 色調　5Y 4／1（灰色）
33－7	須恵器坏	(12.8) 〈3.3〉 ——	体部わずかに内弯し、端部で外反する。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　口縁部1／4残存、I区 胎土　茶色粒子多く含む。 焼成　良好 色調　5Y 6／2（灰オリーブ色） 内外面に火襷あり。

第12表　第11号住居址出土土器観察表〈2〉

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
33－8	須恵器坏	(14.4) 〈3.3〉 ――	底部ヘラ切りか？	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　口縁部1／6残存、Ⅰ区 胎土　白色粒子微量含む。やや粗い。 焼成　良好 色調　10Y 2／1（黒色）
33－9	須恵器長頸瓶	―― 〈2.9〉 7.6	底部回転ヘラケズリの後、高台貼付。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測　底部1／2残存、Ⅰ区 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　2.5Y 6／2（灰黄色）

デの施される蓋がある。つまみ部は欠損のため不明である。土師器は図示し得たものはないが、器種には甕・坏がある。甕は器肉が薄く、口辺部ヨコナデ、胴部外面にヘラケズリが施される。坏はロクロ成形によるもので、内面に黒色処理が施される。

以上、本住居址の所産期は、出土土器の主体を占める須恵器坏より平安時代前葉と考える。

（三石）

12）第12号住居址

遺構（第34・35図、図版十三・十四）

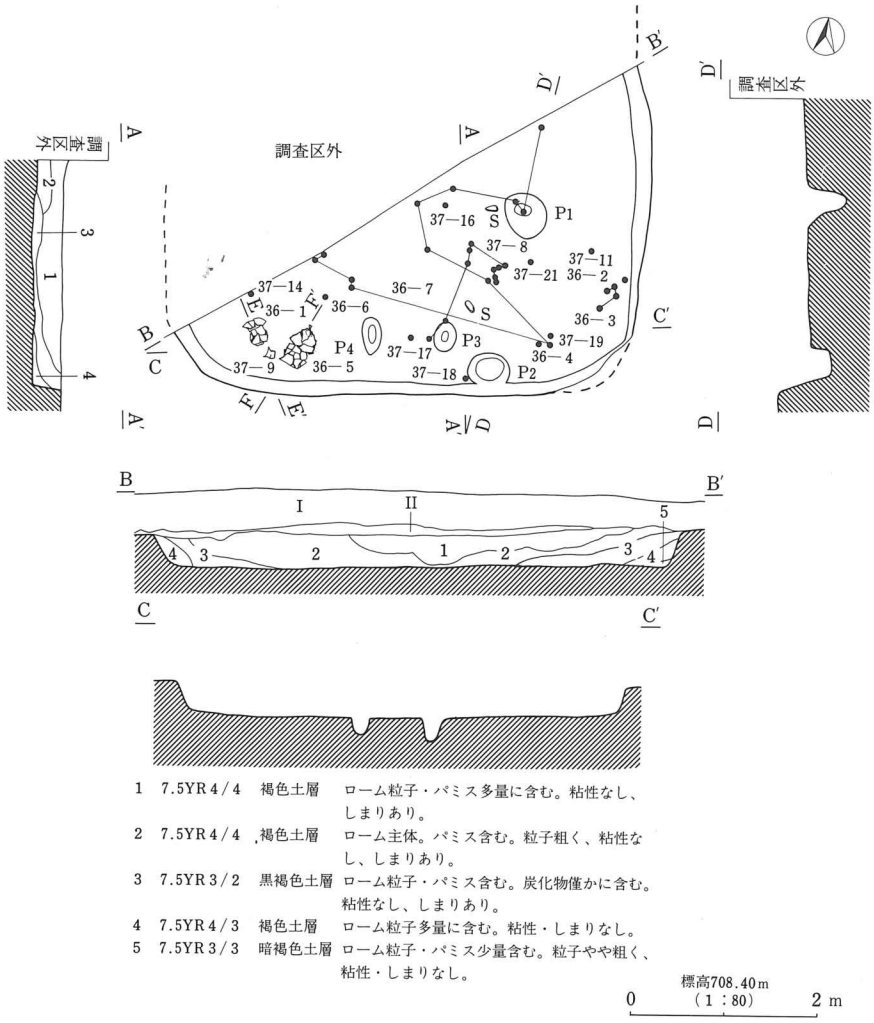
本住居址はH区内、第7号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、南東コーナー上面を撹乱により破壊される。また、北側大半が調査区外であり未調査である。平面形態及び規模は南壁と東壁の南側が検出されたのみであるため不明であるが、南壁長は427cmを測り、隅丸長方形を呈するものと考えられる。

覆土は五層に分割され、堆積状態は自然堆積の状況を示している。第1層は褐色土層で、中央付近に厚く堆積している。第2層はほぼ全面にみられ、ロームを主体とする褐色土層であり、第3層は炭化物を僅かに含む黒褐色土層である。第4・5層は壁直下にみられ、第4層は南壁下においては第1次堆積土、東壁下においては第2次堆積土である。ローム粒子を多量に含む褐色土層であり、壁体の崩落層と考えられる。

確認面からの壁高は27～40cmで、南東コーナーの撹乱内で8cmを測るが遺存状態は良好である。床面からの立ち上がりは比較的急傾斜で立ち上がり、壁体は平滑で堅固な状態である。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、平坦で堅固な状態である。

ピットは4個検出された。P_1は主柱穴と考えられ、東壁から92cm、南壁から154cmの位置に配される。平面形態は50×43cmの楕円形を呈し、41cmの深度を有する。覆土は褐色土層とローム粒子を主体とするにぶい褐色土層の二層に分割された。P_2は南壁直下、東寄りに位置し、44×36cmの楕円形を呈する。深さは23cmを測る。P_3・P_4は南壁下中央付近に位置し、入口施設に関わ



1	7.5YR4/4	褐色土層	ローム粒子・パミス多量に含む。粘性なし、しまりあり。
2	7.5YR4/4	褐色土層	ローム主体。パミス含む。粒子粗く、粘性なし、しまりあり。
3	7.5YR3/2	黒褐色土層	ローム粒子・パミス含む。炭化物僅かに含む。粘性なし、しまりあり。
4	7.5YR4/3	褐色土層	ローム粒子多量に含む。粘性・しまりなし。
5	7.5YR3/3	暗褐色土層	ローム粒子・パミス少量含む。粒子やや粗く、粘性・しまりなし。

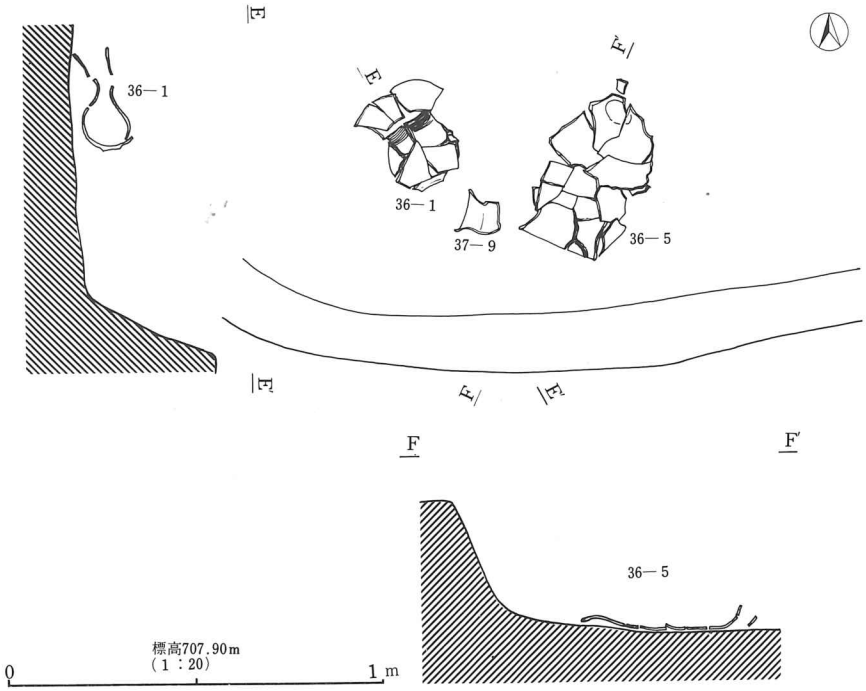
標高708.40m
0 (1：80) 2 m

第34図　第12号住居址実測図

る柱穴と考えられる。平面形態は32×23cm、40×21cmの楕円形を呈し、深さは各々24cm・18cmを測る。断面形は「U」字状を呈し、覆土は黒褐色土層が主体を占め、底面付近にローム粒子を主体とするにぶい褐色土層が4～6cmの厚さで認められた。

炉址は、住居址の中央部分から北側が調査区外であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は特に集中する箇所は認められず、検出された床面のほぼ全面から出土している。36－1・5、37－9は南西コーナー直下の床面上より出土しており、36－1・5は横転して土圧で潰れた状態で出土した。36－2・3は東壁直下、37－8はP_1・P_3間、37－16はP_1西側、37－17はP_3・P_4間、37－18はP_2西側、37－19はP_2の北東、37－21はP_1南側より出土し、い



第35図　第12号住居址遺物出土状況実測図

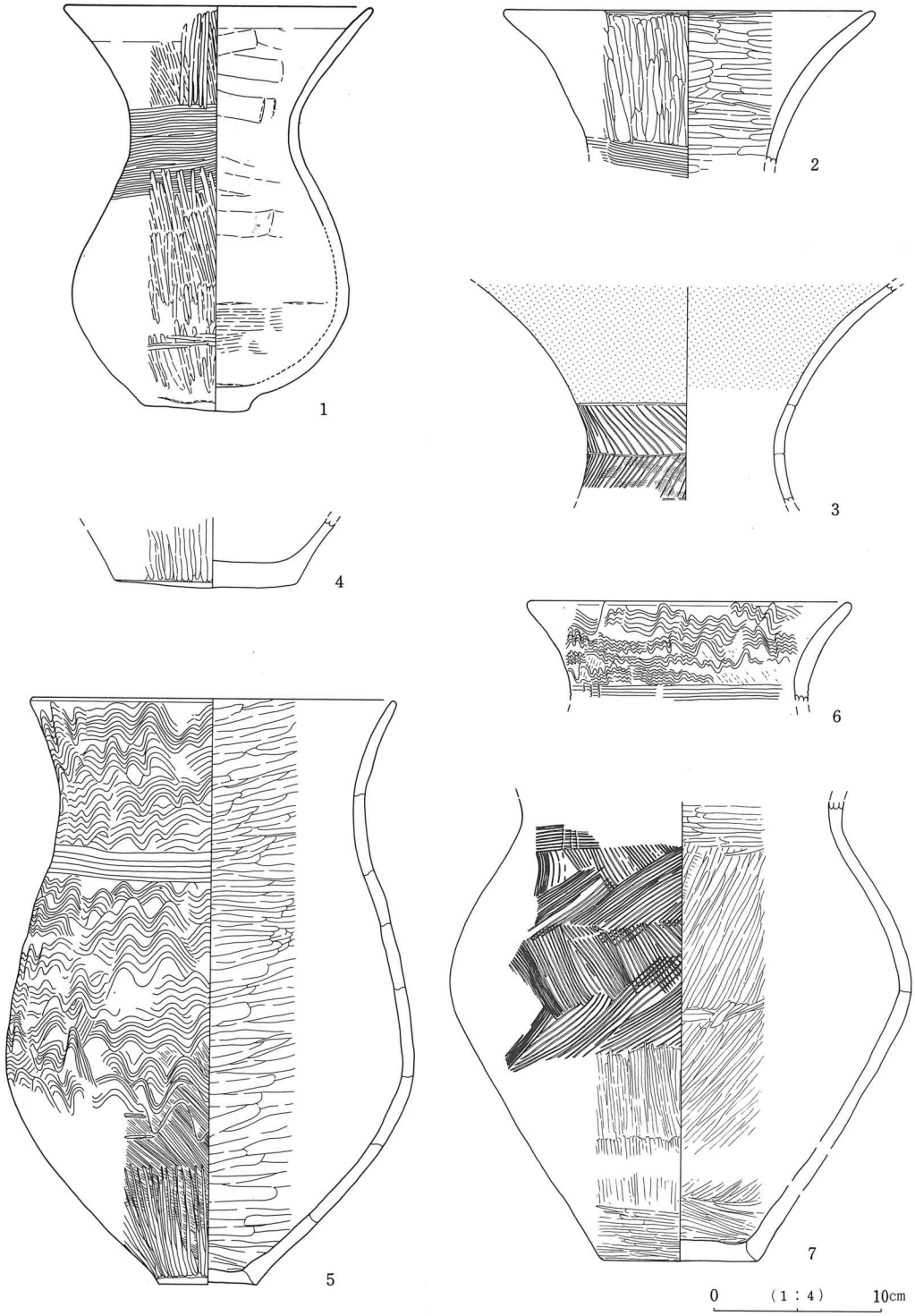
ずれも床面上あるいはその付近からの出土である。また、37－13はP_2内から出土している。この他、36－4、37－11は床面より約10cm浮いた状態で出土している。

遺物（第36～38図、図版三十～三十二）

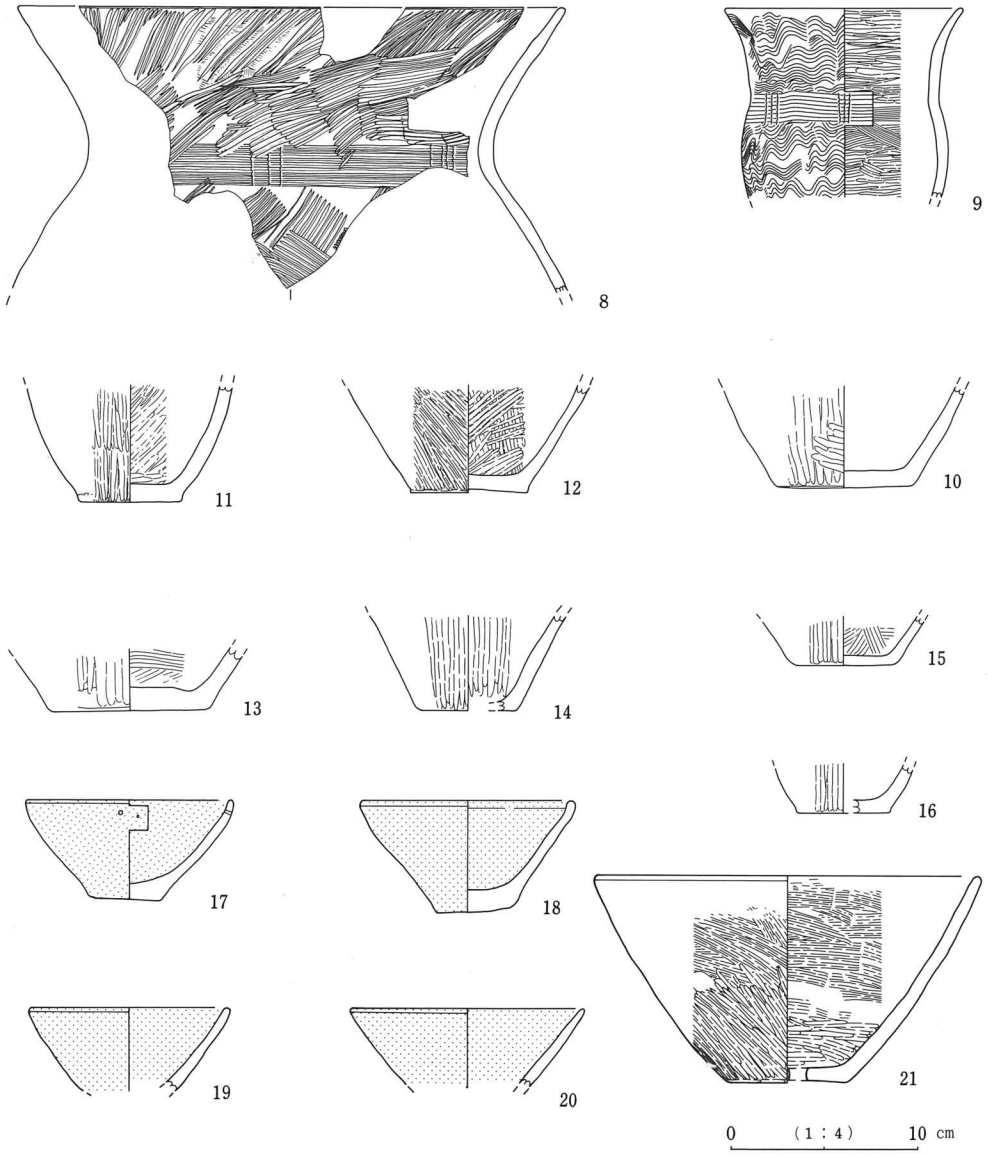
本住居址からは弥生土器が出土している。比較的まとまった資料が出土しており、器種には壺・甕・鉢・高坏・甑がある。そのうち図化し得たのは実測図21点（壺4点、甕12点、鉢4点、甑1点）、拓影図9点（壺3点、甕6点）である。

壺には無彩の36－1・2と赤色塗彩の施される36－3があり、38－1・2は後者に属するものである。この他内外面に赤色塗彩の施された口辺部片、内面にハケメ調整、外面に赤色塗彩の施された胴部片がある。無彩の36－1は口辺部が大きく外反し、口径が最大径となるが歪みが著しい。文様は頸部に櫛描横走文が3帯上から下へ右回りに施文される。36－2も1と同様に頸部に櫛描横走文が施文される。36－3は頸部に箆描横走文で区画した中に箆描羽状沈線文が施される。38－1～3は頸部片で、1は櫛描横走文に8本一組の櫛描文を垂下させた「T字文C」を形成し、文様帯区画をもたない。2・3は箆描横走文で文様帯区画され、区画内に各々箆描羽状沈線文・箆描格子目文が施文される。

甕には大型品と小型品の二形態があり、文様構成には櫛描波状文の施文されるもの（36－5・



第36図　第12号住居址出土土器実測図〈1〉



第37図　第12号住居址出土土器実測図〈2〉

6、37－9、38—4・6・7）と櫛描斜走文の施文されるもの（36－7、37－8、38－5・8・9）がある。37－8と38－9は同一個体であり、口径29.1cm（推定値）を測る大型品である。36－5は6本一組の粗い櫛描波状文を口縁部から胴上半部に施した後、頸部に櫛描簾状文ではなく櫛描横走文が施文されている点で稀有な資料である。

鉢には37－17～20の4点があり、いずれも内外面に赤色塗彩が施され、体部は直線的に立ち上がるが、17・18は端部でわずかに内弯気味となる。また、17は端部に2孔一対の穿孔を有する。

第13表　第12号住居址出土土器観察表〈1〉

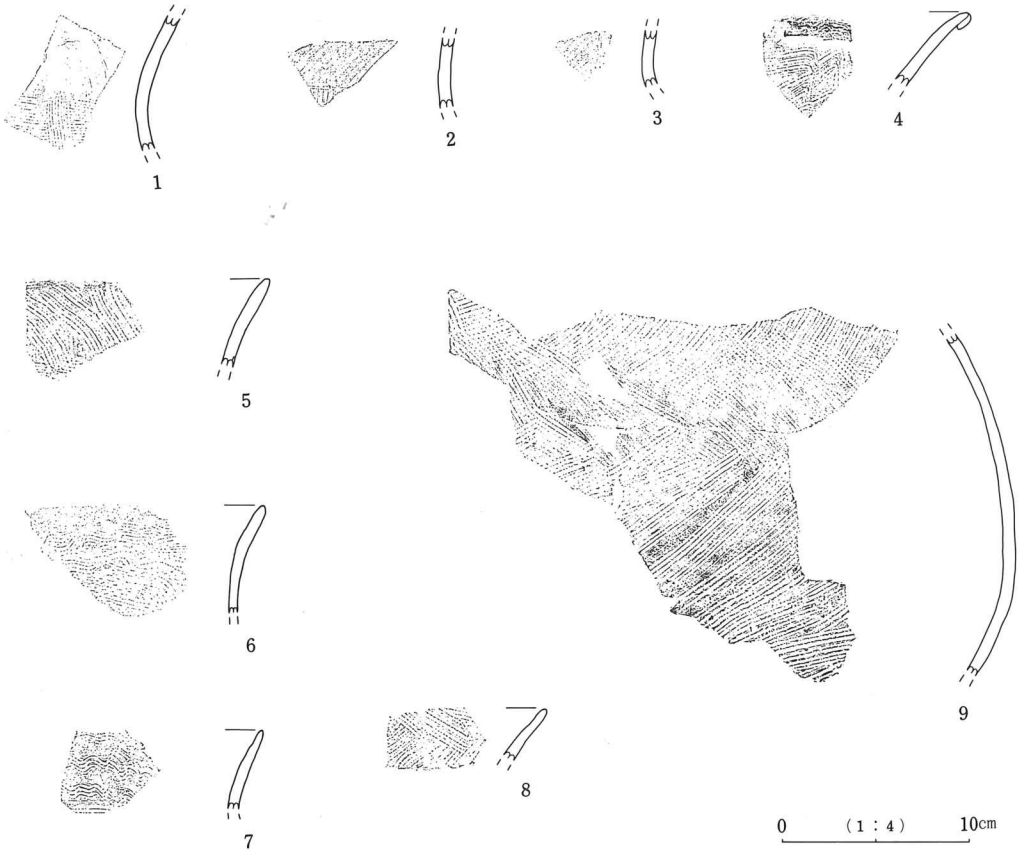
挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
36－1	壺	18.5 24.0 6.4	全般に成形・調整・文様が稚拙である。巻き上げ成形。下半は分割成形か？　下半部は特に雑で本来の形態と異なる。口辺部直線的に外傾し，胴部最大径（16.4cm）は胴部下位に位置する。	内）口縁部ヨコナデ、胴上半部ナデ調整、胴下半部粗いハケメ調整・ナデ調整 外）口縁部ヨコナデ、胴上半部ハケメ調整、胴下半部ナデ調整の後、口～胴上半部縦位のヘラミガキ、胴下半部横位縦位のヘラミガキ 文）頸部に櫛描横走文が3帯上から下へ右回りに粗雑に施文される。	完全実測　No.63 胎土　微砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ８／４（浅黄橙色） 外面に口～底まで長い黒斑あり。
36－2	壺	22.0 〈9.1〉 ――	口辺部曖く外反する。	内）横位のヘラミガキ 外）縦位のヘラミガキ 文）頸部に櫛描横走文が右回りに施文される。	完全実測　No.50 胎土　砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ８／３（浅黄橙色）
36－3	壺	―― 〈13.2〉 ――		内）赤色塗彩、横位のヘラミガキ、剝離著しい。 外）赤色塗彩、横位のヘラミガキ。 文）頸部に、箆描横走文で区画した中に、箆描羽状沈線文を施す。	回転実測　No.49 胎土　砂粒多量含む。石英粒少量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ７／４（にぶい黄橙色）
36－4	壺	―― 〈4.2〉 10.7		内）ナデ調整 外）縦位のヘラミガキ	完全実測　No.46 胎土　白色、その他砂粒を多量含む。 焼成　良好 色調　５ＹＲ５／６（明赤褐色）
36－5	甕	21.7 34.8 5.8	口辺部緩く外傾し、最大径（24.2cm）は胴部中位下方に位置する。	内）横位のヘラミガキ 外）ハケメ調整の後、胴部下半縦位のヘラミガキ 文）口～胴上半部に６本一組の粗い櫛描波状文を施文した後、頸部に同単位の櫛描横走文を施す。	完全実測　No.62 胎土　雲母、長石、白色粒子を多量含む。 焼成　良好 色調10ＹＲ８／４（浅黄橙色）
36－6	甕	(19.3) 〈5.9〉 ――	口辺部緩く外傾する。	内）横位のヘラミガキ 外）ハケメ調整、口縁部ヨコナデ 文）６本１組の櫛描波状文を右回りに継続的に施文した後、頸部に櫛描簾状文（３連止め）を右回りに施す。	回転実測　口縁部１／４残存、No.10 胎土　白色粒子多量含む 焼成　良好 色調　外）7.5ＹＲ４／３（褐色） 内）7.5ＹＲ６／４（にぶい橙色）
36－7	甕	―― 〈27.3〉 9.0	胴部中位上方で強く張り、胴部最大径（27.3cm）を有する。	内）ハケメ調整の後、横位・斜位のヘラミガキ 外）ハケメ調整の後、胴部下半縦位のヘラミガキ 文）胴上半部に櫛描斜走直線文を横位羽状に施文した後、頸部に櫛描簾状文（３連止め）を右回りに施す。	完全実測　No.5・8・11・12・29・32・37・43・48・54・64 胎土　雲母・石英・白色粒子を多量含む。 焼成　良好 色調　５Ｙ７／６（橙色）
36－8	甕	(29.1) 〈15.0〉 ――	口辺部「く」の字状に外傾する。	内）ハケメ調整の後、口辺部横位のヘラミガキ、胴部粗いヘラミガキ 外）ハケメ調整 文）頸部に11本１組の櫛描簾状文（４連止め）を右回りに施文した後、同単位の粗い櫛描斜走直線文を施す。	回転実測　口縁部１／４残存、No.23・40・60・Ⅰ区・Ⅱ区 胎土　微石英粒（？）多量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ７／６（明黄褐色）
36－9	甕	(12.6) 〈10.0〉 ――	器高に比して口辺部長く、緩く外反する。	内）横位のヘラミガキ 外）ハケメ調整の後、胴部下半縦位のヘラミガキ 文）口～胴上半部に櫛描波状文を施文した後、頸部に櫛描簾状文（３連止め）を右回りに施す。	回転実測　口縁部１／３残存・No.61 胎土　微石英粒少量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ６／２（灰黄褐色）
36－10	甕	―― 〈5.3〉 7.0	輪積成形。	内）ナデ調整 外）縦位・斜位のヘラミガキ 底部ヘラミガキ	回転実測　Ⅰ区 胎土　砂粒子少量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ６／６（明黄褐色） 内面に使用時の煤付着
36－11	甕	―― 〈6.2〉 5.5	輪積成形。	内）斜位のヘラミガキ 外）縦位のヘラミガキ 底部ヘラミガキ	回転実測　No.51・Ⅰ区 胎土　粒子の粗い砂粒多量含む。φ３ｍ／ｍ位の小礫を微量含む。 焼成　良好 色調　外）10ＹＲ６／１（褐灰色） 内）５ＹＲ５／４（にぶい赤褐色）

第14表　第12号住居址出土土器観察表〈2〉

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
37－12	甕	—— 〈5.7〉 (6.2)	輪積成形。	内）斜位のヘラミガキ 外）縦位・斜位のヘラミガキ	回転実測　Ⅰ区・Ⅱ区 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　外）7.5YR4／3（褐色） 内）10YR6／4（にぶい黄褐色）
37－13	甕	—— 〈5.3〉 7.3	輪積成形。	内）ハケメ調整・ナデ調整 外）縦位のヘラミガキ	回転実測　P2・7トレ 胎土　白色粒子・砂粒を少量含む。 焼成　良好 色調　外）10YR6／3（にぶい黄橙色） 内）7.5YR7／8（黄橙色）
37－14	甕	—— 〈5.0〉 (5.2)	輪積形成。	内）斜位のヘラミガキ 外）縦位のヘラミガキ	回転実測　底部1／3残存、No.4 胎土　φ1mm以下の白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10YR6／6（明黄褐色）
37－15	甕	—— 〈2.6〉 (7.2)	輪積成形。	内）粗いハケメ調整 外）縦位のヘラミガキ 底部ヘラミガキ	回転実測　Ⅰ区 胎土　白色粒子・砂粒を少量含む。 焼成　良好 色調　外）7.5YR5／4（にぶい褐色） 内）2.5YR5／6（明赤褐色）
37－16	甕	—— 〈2.6〉 (5.0)	輪積成形。	内）横位のヘラミガキ 外）縦位のヘラミガキ 底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ	回転実測　底部½残存、No.31 胎土　砂粒を多量含む。白色粒子微量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR6／6（橙色）
37－17	鉢	11.0 5.3 3.9	口縁部内弯し、端部に2孔1対穿孔を有する。口径に比して、底径が小さい。	内外面とも赤色塗彩、ヘラミガキ	完全実測　No.19・Ⅱ区 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　10YR4／4（赤褐色）
37－18	鉢	11.5 5.9 4.2	体部直線的に外傾し、端部で内弯気味に肥厚する。	内外面とも赤色塗彩、横位のヘラミガキ	完全実測　No.22 胎土　良好 色調　7.5R4／8（赤色）
37－19	鉢	10.6 〈4.4〉	体部直線的に外傾する。	内）赤色塗彩、横位のヘラミガキ 外）赤色塗彩、口縁部横位のヘラミガキ、体部縦位のヘラミガキ	回転実測　口縁部½残存、No.47・Ⅰ区 胎土　白色粒子多量含む。密。 焼成　良好 色調　10R5／6（赤色） 胎土色調　10YR7／4（にぶい黄橙色）
37－20	鉢	12.4 〈4.2〉 ——	体部直線的に外傾する。	内）赤色塗彩、横位のヘラミガキ 外）赤色塗彩、口縁部横位のヘラミガキ、体部縦位のヘラミガキ	回転実測　口縁部1／3残存、Ⅱ区 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10R4／8（赤色） 胎土　色調10YR7／6（明黄褐色）
37－21	甑	20.6 10.9 6.6	体部内弯気味に開き、底部中央付近に焼成前穿孔を一孔有する。	内）ハケメ調整後、口縁部ヨコナデ、下半部横位のヘラミガキ 外）底部ヘラミガキ	完全実測　口縁部1／2残存、No.45・Ⅰ区 胎土　微量砂含む。 焼成　良好 色調　2.5Y5／2（暗灰黄色）

この他、内外面とも赤色塗彩された片口土器がある。甑には37－21がある。体部は僅かに内弯気味に開き、底部に焼成前の穿孔を一孔有する。調整は内外面ハケメ調整の後、外面下半に縦位のヘラミガキが施される。

この他破片資料であるが、内弯気味に立ち上がり口縁部で短かく外反し、端部に三角形状の突



第38図　第12号住居址出土土器拓影図

起が貼付される高坏の坏部がある。この突起には内面に篦状の工具による刺突文の施されるものと施されないものとがある。

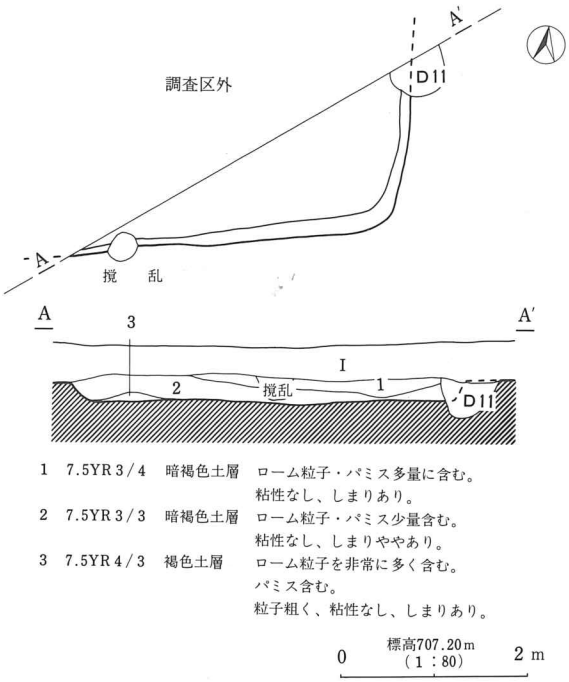
以上、本住居址の所産期は弥生時代後期前半と考えられるが、壺・甕の口辺部形態等に新しい様相が認められ、弥生時代後期前半でも新しい段階のものと考える。

（三石）

13）第13号住居址

遺構（第39図、図版十五）

本住居址はＩ・Ｊ区境界付近、第７号トレンチ南側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第11・12号土坑と重複関係にあり、第11号土坑に東壁の一部を破壊され、南壁の一部をピット状の撹乱により破壊されている。また、住居址の大半が調査区外であり南東コーナー付近が検出されたのみである。したがって、平面形態及び規模等については全く不明である。



第39図　第13号住居址実測図

覆土は三層に分割され、自然堆積の状況を示している。第1層は暗褐色土層で最終埋没土である。第2層は暗褐色土層で、ほぼ全面に広く厚く堆積している。第3層は褐色土層で、南壁下床面上に僅かに認められるのみである。

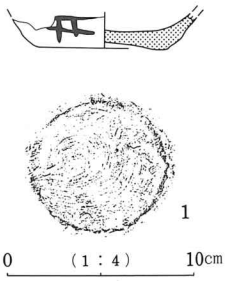
確認面からの壁高は7～17cmを測り床面からの立ち上がりは東壁は比較的急傾斜で立ち上がるが、南壁の立ち上がりは緩やかである。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を利用して構築され、全体にほぼ平坦であるが軟弱な状態である。

ピット・カマド等の付属施設は、先述したように南東コーナー付近の極く一部分の調査であるため検出されなかった。

遺物（第40図、図版三十二・三十五）

本住居址からは土師器・須恵器が少量出土している。器種には甕・坏がありそのうち図化し得たのは40－1の須恵器坏1点のみである。40－1はロクロ成形により、底部は回転糸切りのまま未調整である。また、体部下位には「井」の字の墨書がみられる。須恵器に墨書が施される例は、佐久地方では現在まで8遺跡11例[(1)]であり、土師器と比較して圧例的に少ない。また、11点中6点が



第40図　第13号住居址出土土器実測図

第15表　第13号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　整	備　考
40－1	須恵器坏	― 〈2.0〉 7.0	底部回転糸切り。 体部下位に「井」の字の墨書あり。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測 胎土　白色、その他砂粒を多量に含む。 焼成　良好 色調　2.5Y5／1（黄灰色） 火襷あり

坏形土器であり、野火付H13・十二H46例のみが蓋である。この他小片のため図示し得なかったが、須恵器には外面に平行叩きの施される甕、底部回転糸切りのまま未調整の坏があり、土師器には外面にヘラケズリされる甕、内面黒色処理される坏がある。

以上、本住居址の所産期は、出土遺物が非常に少なく明確ではないが、平安時代前葉と考えておきたい。（三石）

註(1)　上桜井北遺跡第６号住居址　佐久市教育委員会　1978『上桜井北』

鋳師屋遺跡第１号住居址　佐久市教育委員会　1985『鋳師屋遺跡』

野火付遺跡第13号住居址　御代田町教育委員会　1985『野火付遺跡』

前田遺跡第１・７号住居址　御代田町教育委員会　1987『前田遺跡』

十二遺跡第14・46号住居址　御代田町教育委員会　1988『十二遺跡』

宮の北遺跡第９号住居址　小諸市教育委員会　1981『宮の北』

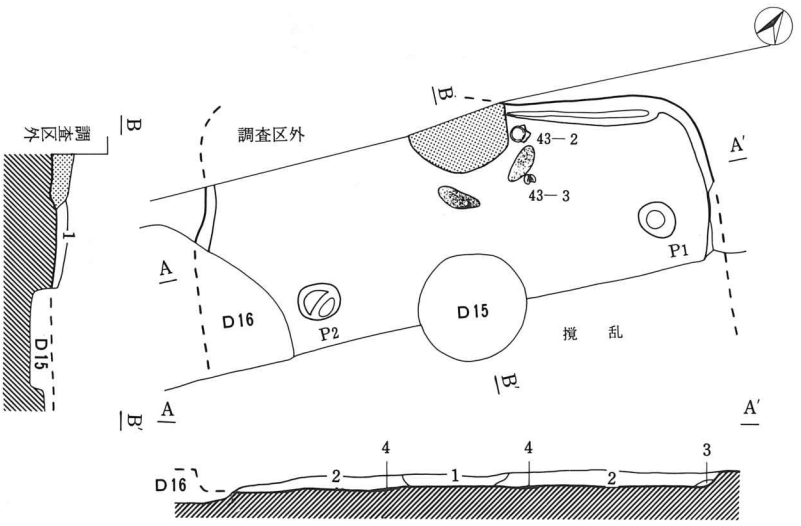
曽根城遺跡第５号住居址　小諸市教育委員会　1983『曽根城遺跡』

雨堤遺跡第１号住居址　小海町教育委員会　1986『雨堤遺跡』

14）第14号住居址

遺構（第41・42図、図版十五・十六）

本住居址はＪ区内、第７号トレンチ南端部に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第15・16号土坑と重複関係をもち、第15号土坑に中央部を、第16号土坑に西壁部分を破壊される。また、撹乱により東壁の一部と南側大半を破壊されている。さらに北西コーナー付近が調査区外である。平面形態及び規模は、北東コーナーと西壁の一部が検出されたのみであるため不明であるが、東西長550㎝前後を測る隅丸長方形を呈すると考えられる。



1　7.5YR３/２　黒褐色土層　ローム粒子・パミスを微量に含み、灰白色の灰を含む。
　　特に中央部附近に多く含む。粒子やや細かく、粘性・しまりなし。
2　7.5YR２/３　極暗褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。粒子細かく、粘性・しまりなし。
3　7.5YR３/３　暗褐色土層　ローム粒子多量、パミス中量含む。粒子 やや細かく、粘性・しまりなし。
4　7.5YR２/１　黒色土層　粒子細かく、粘性・しまりなし。

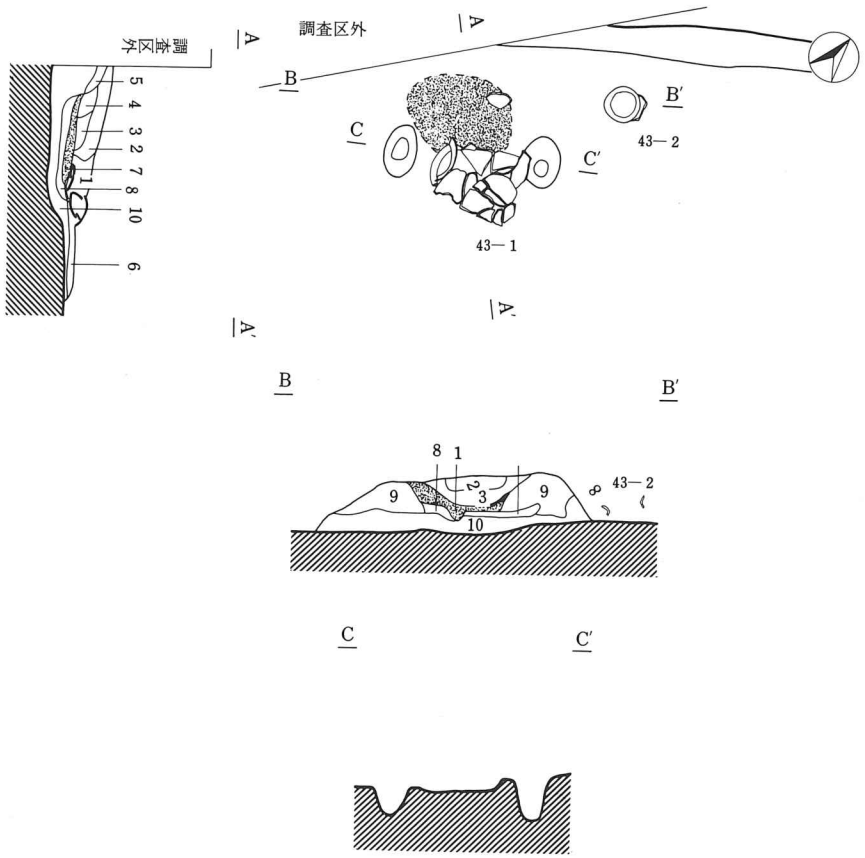
第41図　第14号住居址実測図

覆土は四層に分割された。第１層は中央部分のみに見られる黒褐色土層で灰を含む。第２層は極暗褐色土層で覆土の大半を占めるものである。第３層は暗褐色土層で東壁直下に僅かに認められるの

みであり、第４層は黒色土層で中央寄りの床面上に２～４cmの厚さで観察される。

確認面からの壁高は０～18cmを測り、床面からの立ち上がりは比較的緩やかである。壁溝は北壁下東側においてのみ検出され北東コーナーで断絶する。溝幅は８～14cm、深さは２～５cmを測り、断面形は「U」字状を呈する。

床面は地山第IV層を叩きしめて構築されており、平坦で堅固な状態である。カマドの南側・南東側の床面上に40～50×20cmの範囲で灰塊がみられる。



1	7.5YR３／２	黒褐色土層	灰を含む。粘性・しまりなし。
2	7.5YR４／２	灰褐色土層	灰・焼土多量に含む。
3	7.5YR３／３	暗褐色土層	灰・焼土含む。
4	7.5YR４／３	褐色土層	灰を多量に含む。
5	7.5YR３／２	黒褐色土層	灰を含む。
6	7.5YR４／４	褐色土層	灰・焼土含む。粒子細かく、粘性なし。
7	５YR４／６	赤褐色土層	焼土。灰・炭化物含む。
8	7.5YR４／２	灰褐色土層	灰層
9	7.5YR８／２	灰白色土層	灰層
10	7.5YR２／１	黒色土層	灰を含む。粒子細かく、粘性・しまりなし。

標高706.90m
（1：30）
0　1m

第42図　第14号住居址カマド実測図

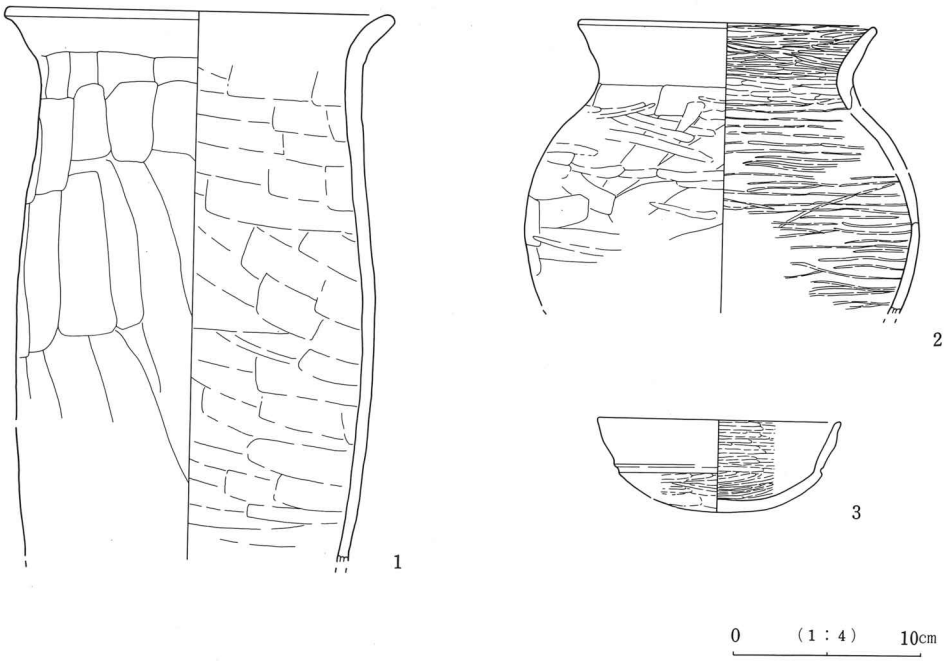
ピットは２個検出され、いずれも主柱穴と考えられるが整然とした配列とは言い難い。P_1は42×36cmの楕円形を呈し、25cmの深度を有する。P_2は径44cmの円形で北西側にテラスを有する。深さはテラス部で13cm、最深部で25cmを測る。覆土はP_1・P_2とも黒褐色土層一層からなる。

カマドは北壁西半部が調査区外であるため明確ではないが、北壁中央付近に位置すると考えられる。煙道部が調査区外であり、本体が既に崩落しているため旧状は知り得ない。火床部は床面を掘り込んだ後、灰褐色の灰層（第８層）・黒色土層（第10層）を埋め戻して設けられ、焼土が４～８cm堆積していた。天井部・袖部は既に崩落しているが、第２・３・９層によって構築されたと考えられる。なお、焼土範囲の両側に42×32cm、42×28cmの楕円形のピットが掘り込まれており、袖石を固定するためのものと考えられるが袖石は残存しない。また、このピット間より土師器甕（43－１）が横転して潰れた状態で出土した。

遺物の出土状況は散漫な状態であるが、カマド内及びカマド周辺に集中している。43－１はカマド内より出土し、43－２はカマド東側の床面より若干浮いた状態で出土した。43－３はカマドの南東床面上より出土している。

遺物（第43・44図、図版三十二・三十五）

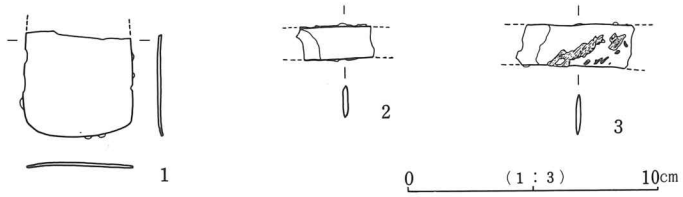
本住居址からは土師器・須恵器・鉄製品が出土している。土師器の器種には甕・坏があり、須恵器には坏がある。甕には口縁部が短かく外反し、長胴を呈する43－１と、口縁部が「く」の字状に外反し、球胴形の胴部を有する43－２がある。１は胴部外面縦位のヘラケズリ、２は斜位の



第43図　第14号住居址出土土器実測図

第16表　第14号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
43－1	甕	20.6 〈29.0〉 ——	巻き上げ成形。 口縁部短く外反する。 胴部中位でわずかにふくらみ、長胴を呈する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部横位・斜位のナデ調整 外）口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ	完全実測　No.4・カマド 胎土　1㎜大の白色・赤色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10YR7／4（にぶい黄橙色）
43－2	甕	15.9 〈15.3〉 ——	巻き上げ成形。 口辺部「く」の字状に外反する。 胴部は球胴形を呈し、最大径(21.0cm)は胴中位に位置する。	内）口縁部横位のヘラミガキ、胴部ナデ調整の後、粗い横位・斜位のヘラミガキ 外）胴部斜位のヘラケズリ、ヘラミガキの後、口縁部ヨコナデ	完全実測　No.4・5、I区・カマド 胎土　5㎜大の長砂含む。赤色白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10R5／8（赤色）
43－3	坏	12.8 4.9 ・	口辺部と底部の境に一条の沈線が巡らされ、稜がより明瞭となる。 口辺部は直線的に外傾し、底部は丸底を呈する。	内）口縁部横位ヘラミガキ、底部ナデ調整の後、ヘラミガキ 外）口辺部ヨコナデの後、ヘラミガキ。底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ	完全実測　No.2 胎土　微砂粒含む。密 焼成　良好 色調　5YR5／6（明赤褐色） 底面磨滅・口縁も使用に欠け磨耗が生じている。



第44図　第14号住居址出土鉄製品実測図

ヘラケズリの後、ヘラミガキが施される。43－3は土師器坏で、口辺部と底部との境に一条の沈線が巡り稜がより明瞭となる所謂須恵器模倣坏である。この他小片のため図示し得なかったが、坏には3と同様に口辺部と底部との境に明瞭な稜を有するもの、口縁部が内面に稜をもち屈曲して外反するもの、内面に黒色処理されるものがあり甕には1と同様な長胴甕がある。須恵器には坏がある。

鉄製品には44－1～3がある。1は幅4.2cmを測る板状の鉄製品であるが錆の付着が著しく用途は不明である。2・3も錆の付着が著しく明確ではないが同一の刀子と思われ、各々幅12㎜、16㎜、残存長29㎜、44㎜を測る。

以上、本住居址の所産期は土師器甕・坏の様相から古墳時代後期後葉と考えられる。

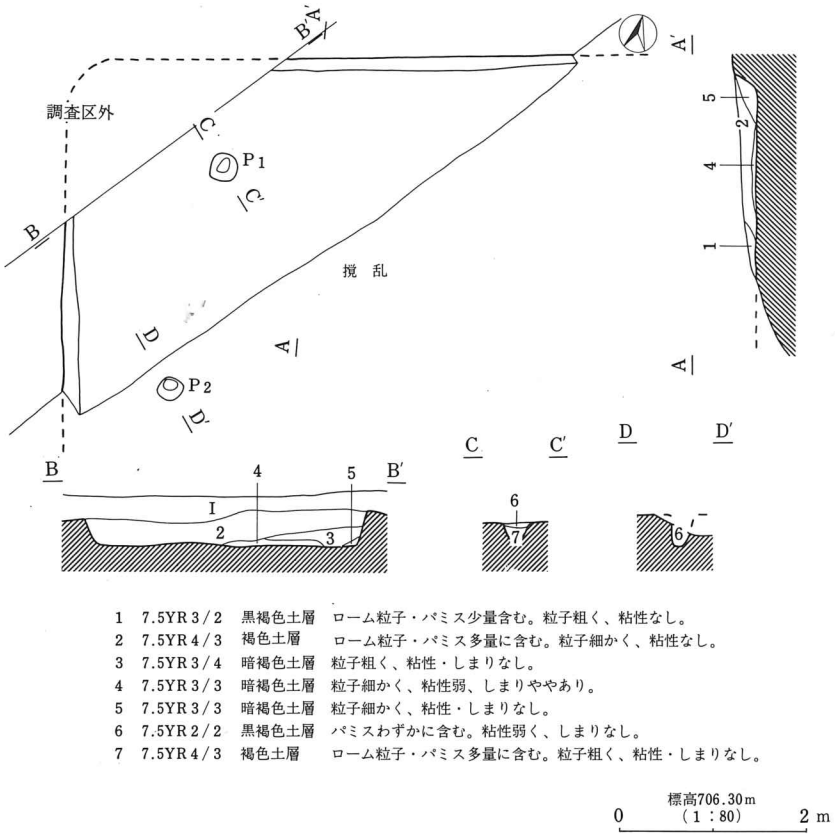
（三石）

15）第15号住居址

遺構（第45図、図版十七）

本住居址はK区内、第10号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、北東部及び南側が道路により削平を受けており、さらに北西コーナーが調査区外のため未調査である。平面形態及び規模は北壁・西壁の一部が検出されたのみであるため全く不明である。

覆土は五層に分割された。第1層は黒褐色土層で中央付近に僅かに観察される。第2層は褐色



1　7.5YR 3/2　黒褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。粒子粗く、粘性なし。
2　7.5YR 4/3　褐色土層　ローム粒子・パミス多量に含む。粒子細かく、粘性なし。
3　7.5YR 3/4　暗褐色土層　粒子粗く、粘性・しまりなし。
4　7.5YR 3/3　暗褐色土層　粒子細かく、粘性弱、しまりややあり。
5　7.5YR 3/3　暗褐色土層　粒子細かく、粘性・しまりなし。
6　7.5YR 2/2　黒褐色土層　パミスわずかに含む。粘性弱く、しまりなし。
7　7.5YR 4/3　褐色土層　ローム粒子・パミス多量に含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高706.30m
0　(1：80)　2 m

第45図　第15号住居址実測図

土層で覆土の大半を占める。第３・４・５層は暗褐色土層で、第４層は床面上に６～８cm堆積しており、第５層は北壁下にのみみられる第１次堆積土である。

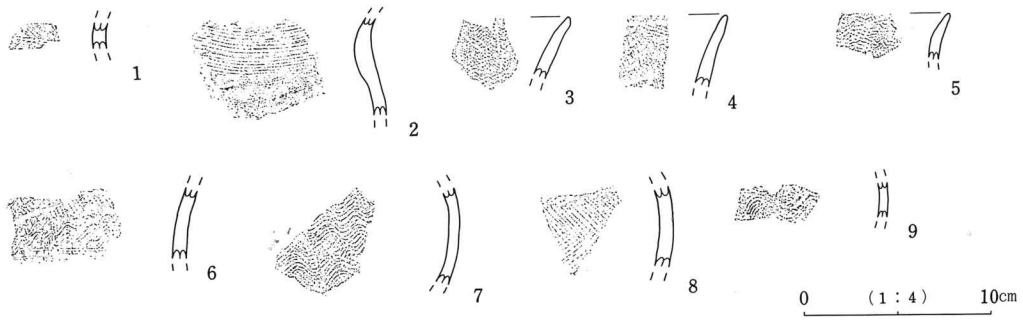
確認面からの壁高は12～26cmを測り、床面から急傾斜で立ち上がる。壁体の構築状況は平滑であるが堅固な状態ではない。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、全体に平坦であるが堅固な状態とは言い難い。

ピットは２個検出された。P_1は32×31cmの円形を呈し、21cmの深度を有する。P_2は30×26cmの楕円形を呈し、25cmの深度を有するが、撹乱により上面を破壊されているためいずれも残存値であり、旧状は35cm前後の深度を有するものと考えられる。覆土は、P_1は第６・７層の二層からなり、P_2は第６層一層のみからなる。

炉址は、先述したように住居址の北西部付近が調査し得たのみであるため検出されなかった。

遺物の出土状況は弥生土器・土師器が混在して出土しているが、その量は極めて少ない。このうち土師器は混入遺物と考える。遺物の分布状況は極めて散漫であり、集中する箇所は認められない。46－１～９はいずれも覆土中からの出土である。



第46図　第15号住居址出土土器拓影図

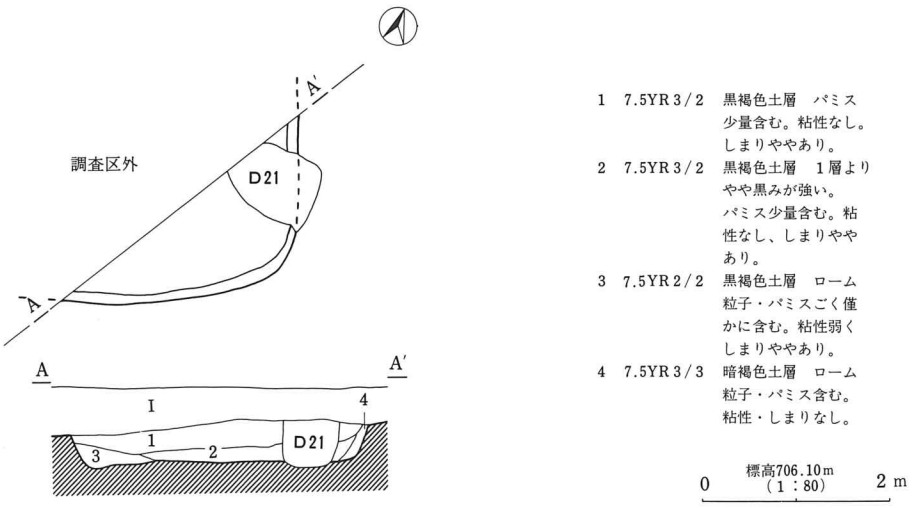
遺物（第46図）

本住居址の出土土器には弥生土器と少量の土師器があり、土師器は混入遺物と考えられる。弥生土器の器種には壺・甕があり、このうち図示し得たのは拓影図９点である。

壺には46－１・２があり、１は箆描横走文で区画された中に箆描羽状沈線文が施文され、２は櫛描横走文が施文される。甕には46－３～９があり、８の櫛描斜走文以外は櫛描波状文が施文されるが、６の櫛描波状文は櫛描簾状文の後に施される。この他、赤色塗彩される壺の胴部片、内外面に赤色塗彩される高坏の坏部と思われる小片などがある。

以上、本住居址の出土遺物は非常に少なく、小片のみであるため明確ではないが、これらの土器は弥生時代後期的様相を示しており、これをもって本住居址の所産期としたい。　（三石）

16）第16号住居址



第47図　第16号住居址実測図

遺構（第47図、図版十八）

本住居址はＫ区内、第10号トレンチ中央北寄りに位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第21号土坑と重複関係をもち、東壁の一部及び床面を破壊されている。また、南東コーナー付近が検出されたのみであり大半が調査区外である。したがって平面形態及び規模については全く不明である。

覆土は四層に分割された。第１・２層は黒褐色土層で覆土の大半を占める。第３層は黒褐色土層で南壁のみにみられ、第４層は暗褐色土層で東壁においてみられるのみである。

確認面からの壁高は22～43cmを測る。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築されており、床面からの立ち上がりは比較的急傾斜である。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層をそのまま利用して構築されるが堅固な状態とは言い難い。

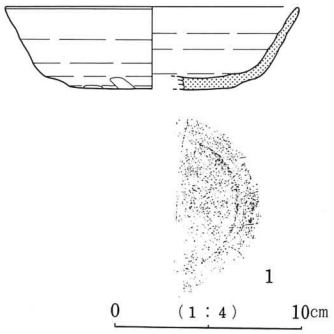
ピット及びカマド等の付属施設は前述したように大半が調査区外であり、南東コーナー付近が調査し得たのみであるため検出されなかった。

遺物の出土状況は土師器・須恵器が覆土中から僅かに出土したのみである。

遺物（第48図、図版三十二）

本住居址からは土師器・須恵器が極く少量出土したのみである。土師器の器種には甕・坏があり、須恵器の器種には坏がある。そのうち須恵器坏（48－１）１点が図化できたのみである。

48－１はロクロ成形による須恵器坏で、底部は全面に手持ちヘラケズリが施される。体部は直線的に立ち上がり底部は平底であるが、体部と底部との変換点は丸味をおびており不明瞭である。この他小片のため図示し得なかったが、外面にヘラケズリの施される甕の胴部片、ロクロヨコナデの施される土師器坏の小片などがある。



第48図　第16号住居址出土土器実測図

第17表　第16号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
48－1	坏	(15.6) 4.4 (8.8)	底部手持ちヘラケズリ。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測　底部１／２残存 胎土　白色粒子密に少量含む。 焼成　良好 色調　10Ｙ５／１（灰色）

以上、本住居址の出土遺物は僅かであり、所産期を決定する資料に欠けるが、46－１の須恵器坏を本住居址の共伴遺物と判断するならば、本住居址の所産期は奈良時代中葉、堤編年（1987）による前田Ⅴ～Ⅵ期に該当すると考える。

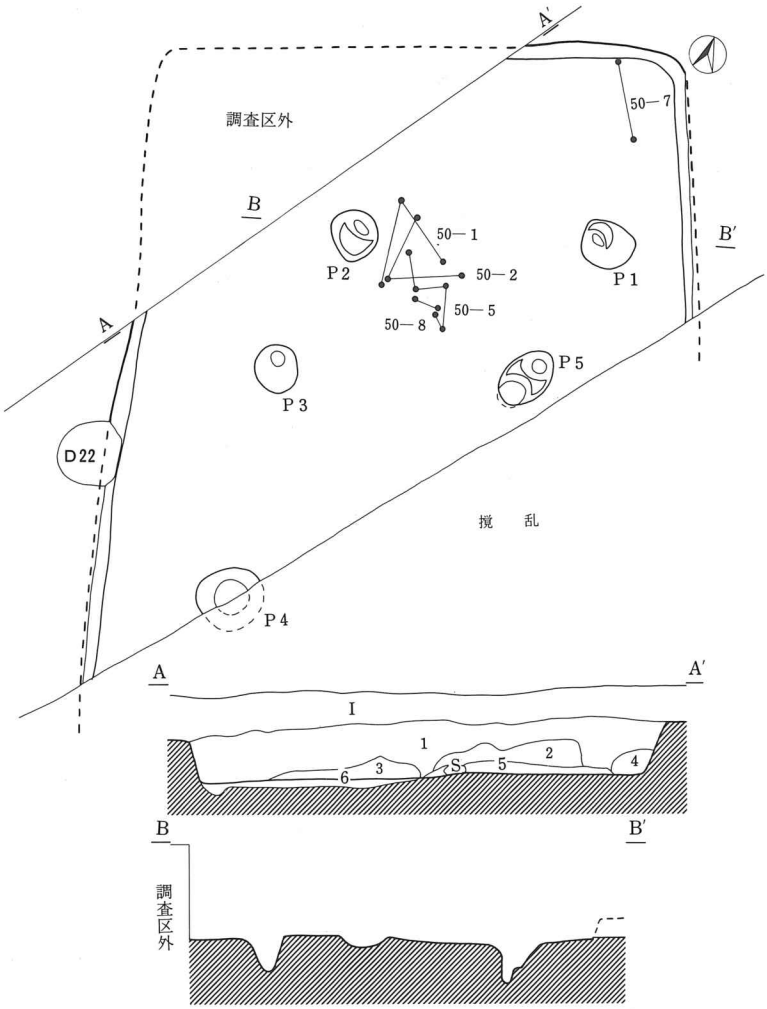
（三石）

17）第17号住居址

遺構（第49図、図版十八）

本住居址はK区内、第10号トレンチ中央付近に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第22号土坑と重複関係をもち西壁の一部を破壊される。また、南側は撹乱によって破壊されており、さらに北西コーナー付近は調査区外のため未調査である。平面形態及び規模は東西長は推定で6m前後を測るが南北長・長軸方位等は不明である。

覆土は五層に分割された。第1～3層は黒褐色土層で覆土の主体を占めるものである。第4層は炭化物・灰を含む極暗褐色土層で北壁下に見られるのみである。第5層は床面上に約10cmの厚さで堆積している灰褐色土層で炭化物・灰を含む。確認面からの壁高は北壁で45～52cmと良好な残存状態を示すが、東壁及び西壁は撹乱によって上面を破壊されているため、東壁で4～44cm、西壁で9～48cmを測り、南方に向かって低



1　7.5YR 2/2　黒褐色土層　ローム粒子・パミス含む。炭化物僅かに含む。粘性なし。しまりあり。
2　7.5YR 2/2　黒褐色土層　黒褐色を基調とし、ロームブロック・ローム粒子・パミスを多量に含む。炭化物・灰ブロックを少量含む。
3　7.5YR 3/1　黒褐色土層　1・2層より黒色が強い。ローム粒子・パミスを少量含む。粘性・しまりなし。
4　7.5YR 2/3　極暗褐色土層　ローム粒子・パミス・炭化物・灰粒子を含む。粘性・しまりなし。
5　7.5YR 4/2　灰褐色土層　灰粒子・炭化物　僅かに含む。灰ブロックを含む。粘性なし。しまりあり。
6　7.5YR 2/2　黒褐色土層　ローム粒子・パミス多量に含む。炭化物を僅かに含む。粘性なし。しまりあり。

0　標高705.90m（1：80）　2m

第49図　第17号住居址実測図

くなる。壁体は地山第Ⅳ層を利用して構築されており、床面から急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面は、北東コーナー付近は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、平坦で非常に堅固な状態である。他の部分は第6層黒褐色土層を10cm前後埋め戻して貼床が施されるが堅固な状態とは言い難い。

ピットは5個検出された。P_1は56×46cmの楕円形で北側にテラスを有する。深さはテラス部で30cm、最深部で47cmを測る。P_2は56×52cmの円形を呈し南側にテラスを有する。深さはテラス部で30cm、最深部で42cmを測る。P_3は52×50cmの円形を呈し64cmの深度を有する。P_4は撹乱により南半部を破壊されるが、推定で径70cmの円形を呈すると考えられ、深さは58cmを測る。P_5は70×46cmの楕円形を呈する。中央にテラスを有し、63cm・67cmの深度を有する。

カマドは前述したように、北東コーナー付近と西壁の一部が検出されたのみであるため検出されなかった。

遺物の出土状況は弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品が出土しており、住居址中央付近に集中する傾向が認められる。50－1・2・5・8は住居址中央北側、P_1・P_2間の床面上あるいは床面より若干浮いた状態で出土した。50－3はP_1から北西に10～100cm離れ、床面よりやや浮いた状態で出土した。50－7は北東コーナー下の床面上より出土した。この他、50－4・6、51－1・2が覆土中より出土している。

遺物（第50・51図、図版三十二・三十三・三十五）

本住居址から出土した土師器には甕・坏・高坏があり、須恵器の器種には蓋がある。

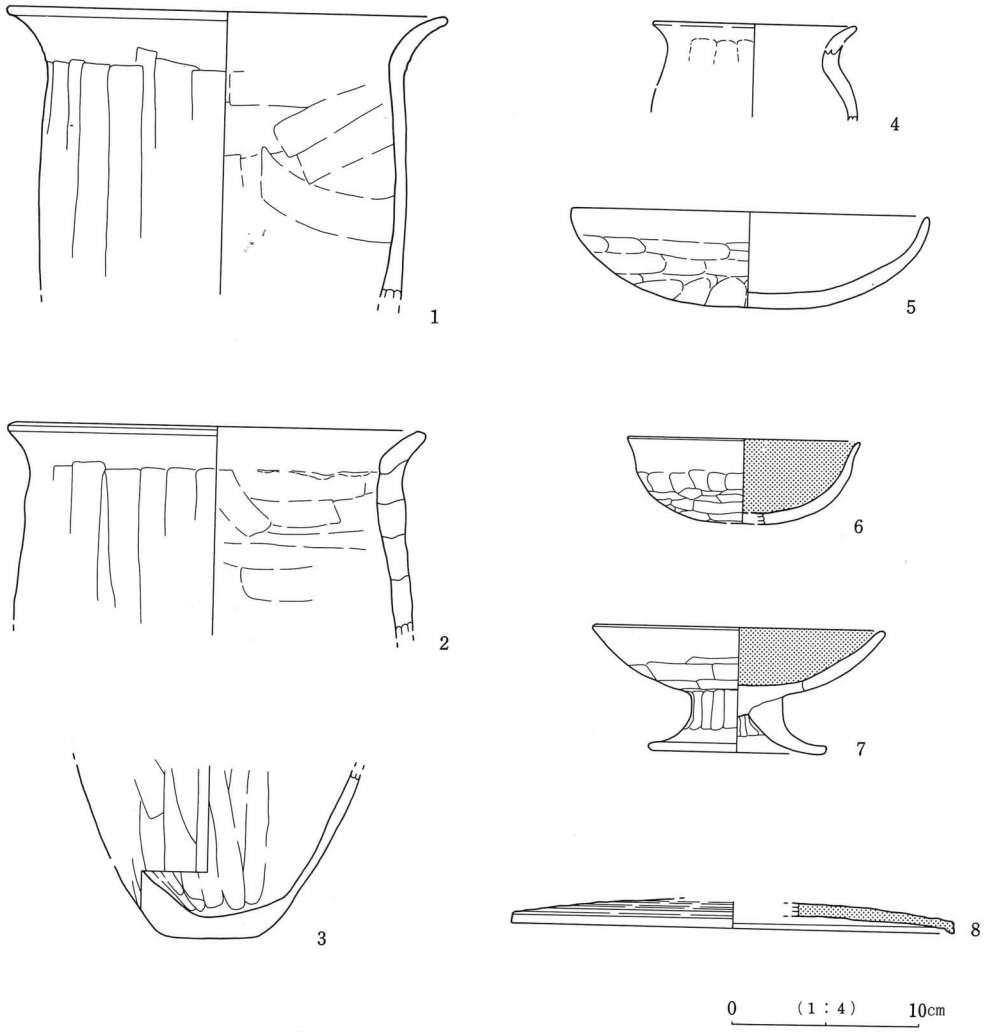
甕には50－1～4があるが全て欠損品である。1・2は口縁部が短かく外反し、胴部は長胴を呈する。調整は口縁部内外面ヨコナデ、胴部は外面に縦位のヘラケズリが施される。3は底部片で、器肉厚いが厚さが一定しない。4は小型甕で口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面はヘラケズリが施される。

坏には50－5・6がある。5は体部が内弯して立ち上がり、底部は偏平な丸底を呈する。調整は内面丁寧なナデ調整、外面は体部ヘラケズリの後、口縁部にヨコナデが施される。6は口縁端部で外反し、底部は丸底となる。内面は黒色処理され、外面は口縁部ヨコナデの後、底部にヘラケズリが施される。

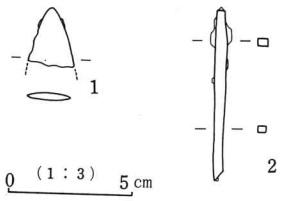
高坏には50－7がある。坏部は丸味をおび、柱状部は短く、裾部で大きく広がる。坏部内面は黒色処理され、坏部上半と裾部にヨコナデ、坏部下半と柱状部にヘラケズリが施される。

須恵器には蓋（50－8）がある。天井部は偏平な盤状を呈し端部で屈曲する。つまみ部の形状は欠損のため不明である。

この他小片のため図示し得なかったが、土師器坏には5と同様に偏平で外面にヘラケズリの施



第50図　第17号住居址出土土器実測図



第51図　第17号住居址出土鉄製品実測図

されるもの、内面に黒色処理されるものがあり、高坏には7と同様な裾部で大きく広がり、外面に縦位のヘラケズリの施される脚部がある。須恵器には底部に手持ちヘラケズリされる坏がある。

鉄製品には51－1・2の2点があり、1は鉄鏃の鏃身部と考えられるが先端部のみであり全体の形状は不明である。2は鉄釘で残存長6.8cmを測る。

以上、本住居址の所産期は、土師器甕・坏などから古墳時代終末と考えておきたい。

（三石）

第18表　第17号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
50－1	甕	(23.4) 〈15.0〉 ――	口縁部短く外反する。 胴部はわずかにふくらむが、長胴を呈する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ	回転実測　口縁部1／3残存、No.12・56・79 胎土　長石・赤・白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR7／4(にぶい橙色)
50－2	甕	(22.2) 〈10.9〉 ――	巻き上げ成形。 口縁部短く外反する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ	回転実測　口縁部1／5残存、No.13・47・55 胎土　砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR7／4(にぶい橙色)
50－3	甕	―― 〈9.1〉 5.0	底部器肉厚く、厚さが一定しない。	内）縦位のナデ調整 外）縦位のヘラケズリ	完全実測　No.4・6・9 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR5／3(にぶい褐色) 内面に赤色顔料付着。
50－4	甕	(10.8) 〈4.3〉 ――	口縁部短く「く」の字状に外反し、頸部で肥厚する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ 外）口縁部ヨコナデの後、胴部ヘラケズリ	回転実測　口縁部1／4残存 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　やや甘い。 色調　内面5YR1.7／1（黒色） 外面5YR3／1(黒褐色)
50－5	坏	19.0 5.1 0	体部は内弯して立ち上がり、底部は偏平な丸底を呈する。	内）底部ナデ調整、口縁部ヨコナデ 外）体部ヘラケズリの後、口縁部ヨコナデ	完全実測　No.34・42・50・52・87 胎土　砂粒含まず非常に緻密 焼成　良好堅緻 色調　7.5YR7／4(にぶい橙色)
50－6	坏	(12.4) 4.5 0	体部内弯し、端部で外反する。底部丸底。	内）黒色処理 外）口縁部ヨコナデの後、体部ヘラケズリ	回転実測　口縁部1／6残存 胎土　雲母少量含む。 焼成　良好 色調　10YR7／3(にぶい橙色)
50－7	高杯	(15.6) 6.6 9.5	坏部わずかに内弯して広がる。脚部柱状部は短く、裾部で大きく広がる。	内）坏部黒色処理、脚部ヨコナデ 外）坏部上半ヨコナデ、下半ヘラケズリ 脚部柱状部縦位のヘラケズリ、裾部ヨコナデ	完全実測　No.2・3 胎土　雲母1mm大の石粒・白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR7／6（橙色）
50－8	須恵器蓋	(23.6) 〈1.5〉 ――		内）ロクロヨコナデの後、天井部ナデ調整 外）ロクロヨコナデ（右回転）	回転実測　口縁部1／3残存、No.43・51 胎土　密 焼成　やや甘い 色調　2.5Y6／2（灰黄色）

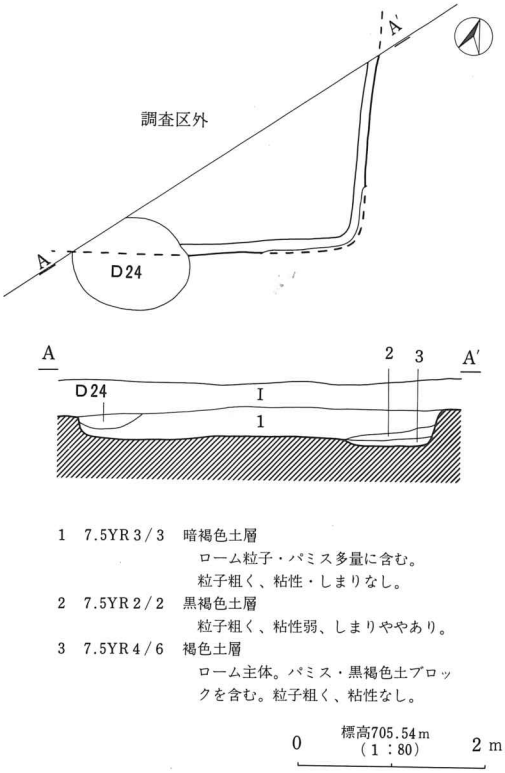
18）第18号住居址

遺構（第52図、図版十九）

本住居址はK区・L区境界付近、第10号トレンチ中央付近に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第24号土坑と重複関係をもち南壁の一部を破壊され、さらに、南東コーナー上面を撹乱によって破壊される。また、南東コーナー付近を除き大半が調査区外であるため未調査である。したがって、平面形態及び規模等については全く不明である。

覆土は三層に分割された。第1層はローム粒子、パミスを多量に含む暗褐色土層で、本住居址覆土の主体を占める。第2層は黒褐色土層、第3層はローム粒子を主体とする褐色土層で、いずれも東壁下に僅かにみられるのみである。

確認面からの壁高は8～22cmを測り、床面から比較的急傾斜で立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

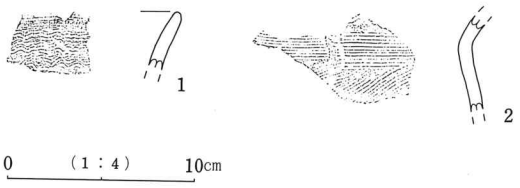


第52図　第18号住居址実測図

床面は地山第Ⅳ層を叩きしめて構築されており、平坦で堅固な状態である。

火拠及びピット等の付属施設は前述したように、南東コーナー付近を除き住居址の大半が調査区外であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は弥生土器・土師器・須恵器が混在して、覆土中より極く少量出土したのみである。



第53図　第18号住居址出土土器拓影図

遺物（第53図）

本住居址からは弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土しており、その出土量は極めて少ない。そのうち図示し得たものは拓影図２点のみである。

53－１は口辺部に櫛描波状文、53－２は口辺部に櫛描波状文、胴部に櫛描斜走文が施文された後、頸部に櫛描簾状文（２連止め）が施文される。この他弥生土器には内面にハケメ調整、外面に赤色塗彩の施される壺の胴部片と考えられる小片がある。土師器には甕・坏がある。甕には外面にヘラケズリの施されるものとロクロ成形によるものとがある。須恵器にはクロク成形による壺の胴部片と思われる小片がある。

以上、本住居址は南東コーナー付近を僅かに調査したのみであり、出土遺物も弥生土器・土師器・須恵器が極く僅かに出土したのみであるため本址の所産期を決定する資料とはなり得ない。したがって、53－１・２に弥生時代後期的様相が認められるものの判然としない。　（三石）

19）第19号住居址

遺構（第54図、図版十六）

本住居址はＨ区内、第７号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他

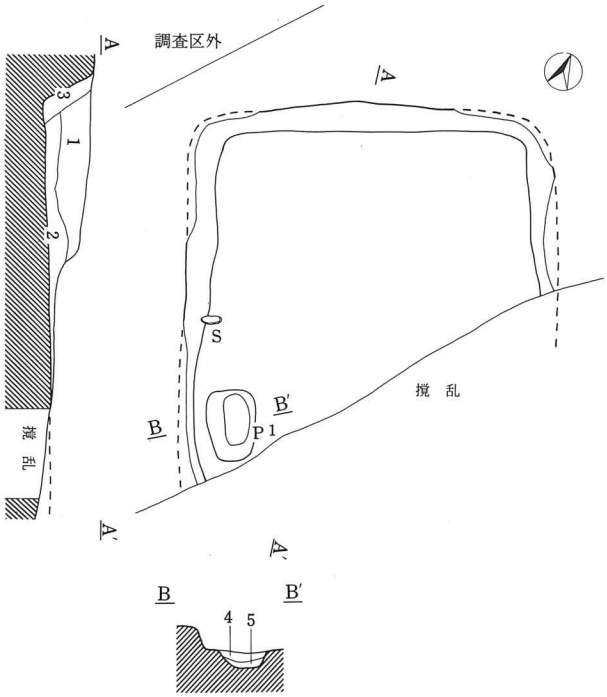
遺構との重複関係はないものの、南半部を撹乱により破壊され、さらに壁体の上面各所を撹乱によって破壊される。平面形態及び規模は北半部が残存しているのみであるため不明であるが、北壁長312cmを測り、隅丸長方形を呈するものと考えられる。

覆土は北壁付近に残存しているのみであるが三層に分割された。

確認面からの壁高は2～52cmを測る。床面から比較的緩やかな傾斜で立ち上がり、平滑であるが堅固な状態とは言い難い。壁溝は検出されなかった。

床面は地山第Ⅳ層上にローム粒子を主体とする褐色土を薄く埋め戻して構築されるが軟弱な状態である。

ピットは西壁南側直下より1個検出された。75×52cmを測る南北に長い楕円形を呈し、深さは22cmを計測する。覆土は炭化物を少量含む褐色土層（第4層）と灰・焼土を含む黒色土層（第5層）の二層に分割された。カマドは検出されなかった。



1　7.5YR4/3　褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。　褐色土層
2　7.5YR4/4　褐色土層　ローム粒子・パミス少量含む。粒子やや粗く、粘性・しまりなし。
3　7.5YR4/3　褐色土層　ローム粒子・パミス含む。粒子やや粗く、粘性・しまりなし。
4　7.5YR4/3　褐色土層　ローム粒子・パミス含む。炭化物少量含む。粒子粗く、粘性なし。しまりあり。
5　7.5YR2/1　黒色土層　7.5YR5/2(灰褐色)の灰をブロック状に含み、焼土を少量含む。粘性・しまりなし。

標高707.00m
(1：80)
0　2m

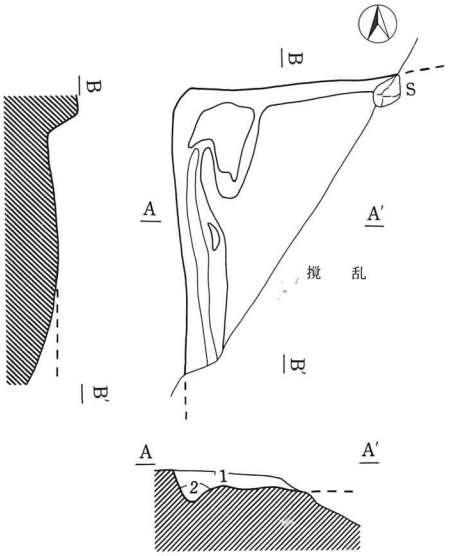
第54図　第19号住居址実測図

遺物の出土状況は極めて散漫であり、出土量は少ない。

遺物

本住居址からは土師器・須恵器・灰紬陶器が少量出土しているが、いずれも小片のため図示し得たものはない。土師器には甕・坏があり、甕には肉薄で外面にヘラケズリの施されるものとロクロ成形による小型品がある。坏は内面に黒色処理されるものが主体を占める。須恵器には甕・坏・蓋があり、坏は底部回転糸切りのまま未調整のものと回転糸切りの後、高台が貼付される高台付坏がある。蓋はかえりを有さず端部で屈曲する。灰紬陶器は口縁端部でわずかに外反し、碗と思われるが小片のため明確ではない。

以上、本住居址の所産期は平安時代前葉と考えておきたい。　（三石）



1　7.5YR 3/2　黒褐色土層　ローム粒子・パミス僅かに含む。粘性なし、しまりあり。
2　7.5YR 3/3　暗褐色土層　ローム粒子多量に含む。パミス少量含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高706.00m
0　(1：80)　2 m

第55図　第20号住居址実測図

20）第20号住居址

遺構（第55図、図版十九）

本住居址はK区内、第10号トレンチ北端部に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、大半が撹乱によって破壊されており、北西コーナー付近が検出されたのみである。したがって平面形態及び規模は全く不明である。

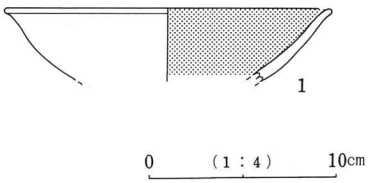
覆土は二層に分割された。第1層は黒褐色土層で覆土の大半を占める。第2層は暗褐色土層で西壁下の壁溝内に充填される。

確認面からの壁高は19～28cmを測り、床面から比較的緩やかな傾斜で立ち上がる。壁溝は西壁下より検出された。溝幅14～36cm、深さ12～18cmを測る。また北西コーナー下には68×102cmの不整形を呈し、深さ5～17cmの落ち込みが存在し、壁溝はこの落ち込みに至る。

床面は地山第Ⅳ層を利用して構築されており、比較的堅固で平坦な状態である。

カマド・ピット等の付属施設は先述したように、北西コーナー付近のみの調査であるため検出されなかった。

遺物の出土状況は弥生土器・土師器・須恵器が極く少量覆土中から出土したのみである。



第56図　第20号住居址出土土器実測図

遺物（第56図）

本住居址からは土師器・須恵器が極く少量出土している。土師器の器種には甕・坏があり、須恵器には坏・蓋がある。そのうち土師器坏（56－1）が1点図化できたのみである。56－1は口縁端部で僅か

第19表　第20号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
56－1	坏	(17.4) 〈3.8〉 —	体部わずかに内弯し、端部で外反する。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／5残存 胎土　茶色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　内面5Y4／1（灰色） 外面10YR7／4（にぶい黄橙色）

に外反し、内面に黒色処理が施される。その他の土師器坏も内面に黒色処理されるものが主体となる。甕は肉薄で外面にヘラケズリが施される。須恵器坏の底部は回転糸切りのまま未調整である。蓋は細片のため全体の形状は不明であるが、内面にかえりを有さず端部で屈曲する。

以上、本住居址の出土遺物は全て破片資料であり、出土量も極めて少ないため明確ではないが、平安時代前葉の様相を呈しており、これをもって本住居址の所産期としたい。

（三石）

第２節　特殊遺構

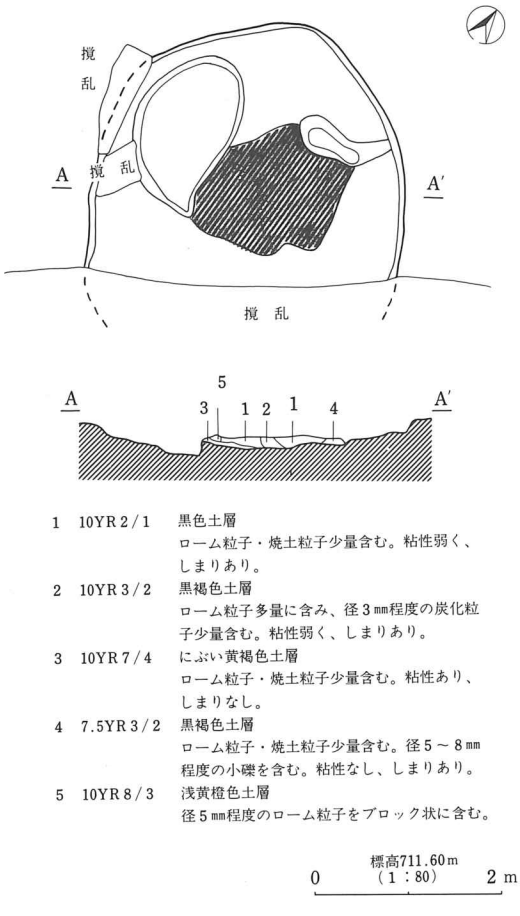
１）第１号特殊遺構

遺構・遺物（第57図、図版二十一）

本址はＡ区内、第１号トレンチ東寄りの調査区南部に位置し、全体層序第Ⅳ層上で確認された。他遺構との重複関係はないが、南部を道路により撹乱されている。

平面プランは径330cmの南北にやや長い円形を呈すると思われ、断面形は浅い皿状に落ち込んでおり、確認面からの最深度は31cmを測る。

出土遺物には弥生土器・土師器・須恵器の小片があるが、これらは流れ込みの可能性が高く、平面プラン中央付近に炭化物が多量に検出され、現代の炭焼き用の掘り込みの可能性が高い。（高村）

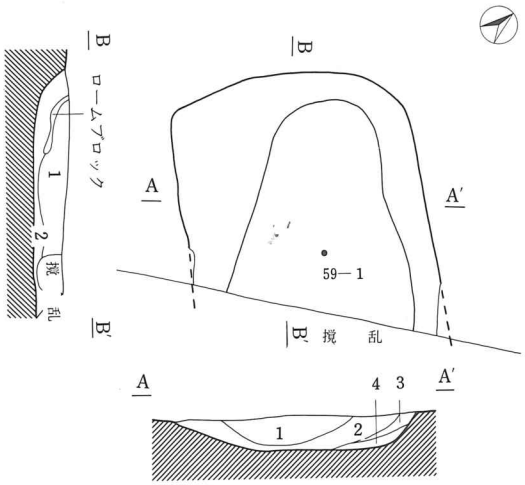


第57図　第１号特殊遺構実測図

２）第２号特殊遺構

遺構（第58図、図版二十一）

本址はＨ・Ｉ区境界付近、第７号トレンチ北側に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。他遺構との重複関係はないものの、東側上面を撹乱によって破壊され、さらに東壁は現道下のため未調査である。したがって平面形態及び規模は南北長258cmが計測されるのみで、



1	7.5YR 3/3	暗褐色土層	ローム粒子・パミス僅かに含む。粒性・しまりなし。
2	7.5YR 3/2	暗褐色土層	ローム粒子・パミスを少量含むが、1層より少ない。粘性・しまりなし。
3	7.5YR 4/3	褐色土層	ローム粒子 多量に含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。
4	7.5YR 3/2	暗褐色土層	ローム粒子・パミス含む。粘性なし、しまりあり。

0　標高707.93m（1：80）　2 m

第58図　第２号特殊遺構実測図

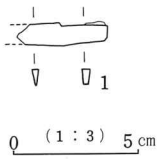
隅丸長方形を呈すると考えられる。

覆土は四層に分割され、自然堆積の状況を示している。第１・２層は暗褐色土層で、中央付近にレンズ状に堆積している。第３・４層は北壁下においてのみ認められ、第３層が褐色土層、第４層が暗褐色土層である。

確認面からの壁高は12～37cmを測り、底面から50°前後の緩やかな傾斜で立ち上がり、南西コーナー付近は約20°と特に顕著である。

底面は地山第Ⅳ層をそのまま利用して構築されるが軟弱な状態である。ピット等の付属施設は検出されなかった。

遺物の出土状況は土師器・須恵器が覆土中より散漫な状態で出土している。鉄製品59－１は中央底面より出土した。



第59図　第２号特殊遺構出土土鉄製品実測図

遺物（第59図、図版三十五）

本址からは弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品が極めて少量出土しており、このうち図示し得たのは鉄製品（59－１）１点のみである。59－１は刀子の茎部と思われる。背関がみられるが刃関のない片関の刀子である。残存長3.6cm、茎部長1.9cm、茎部幅0.6cmを測る。

土師器・須恵器とも細片が多く、器形のわかるものは存在しない。土師器の器種には甕・坏があり、甕は外面にヘラケズリが施される。坏は全て内面に黒色処理され、底部の調整は回転ヘラケズリによるものが１点である。その他、高台付坏が１点存在する。須恵器には甕・坏があり、甕には外面に平行叩きが施され、内面に同心円弧文のみられるものもある。坏には底部回転糸切りのまま未調整のものと、回転ヘラケズリの施されるものとがある。

これらの出土遺物はいずれも細片で、本址の時期決定の根拠とはなり得ず、性格及び所産期は判然としない。

（三石）

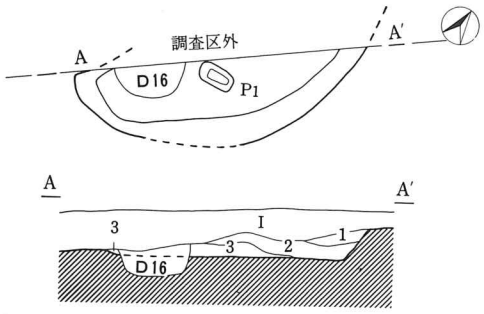
3）第３号特殊遺構

遺構（第60図、図版二十二）

本址はＬ区内、第10号トレンチ南端部に位置し、全体層序第Ⅳ層上において検出された。第29号土坑と重複関係をもち、底面の一部を破壊される。また、西半部は撹乱により底面近くまで破壊されている。さらに、南端部の極く一部が検出されたのみであるため、平面形態及び規模は全く不明である。

覆土は三層に分割された。第１・２層は黒褐色土層で、第３層はローム粒子を主体とする明褐色土層である。

確認面からの壁高は０～32cmを測り、底面からの立ち上がりは緩やかである。



1　7.5YR２/２　黒褐色土層　径１cmの小礫を含む。粘性なし。しまりややあり。
2　7.5YR３/２　黒褐色土層　ローム粒子・ロームブロック・パミスを含む。粘性なし。しまりややあり。
3　7.5YR５/６　明褐色土層　明褐色のロームを主体とし、7.5YR３/３の明褐色土が少量混入。粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高704.45m
0　（１：80）　２m

第60図　第３号特殊遺構実測図

底面は地山第Ⅳ層をそのまま利用し、おおむね平坦であるが軟弱な状態である。ピットは１個検出された。40×21cmの長方形を呈し、31cmの深度を有する。

遺物の出土状況は弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器が極めて少量出土したのみである。

遺物

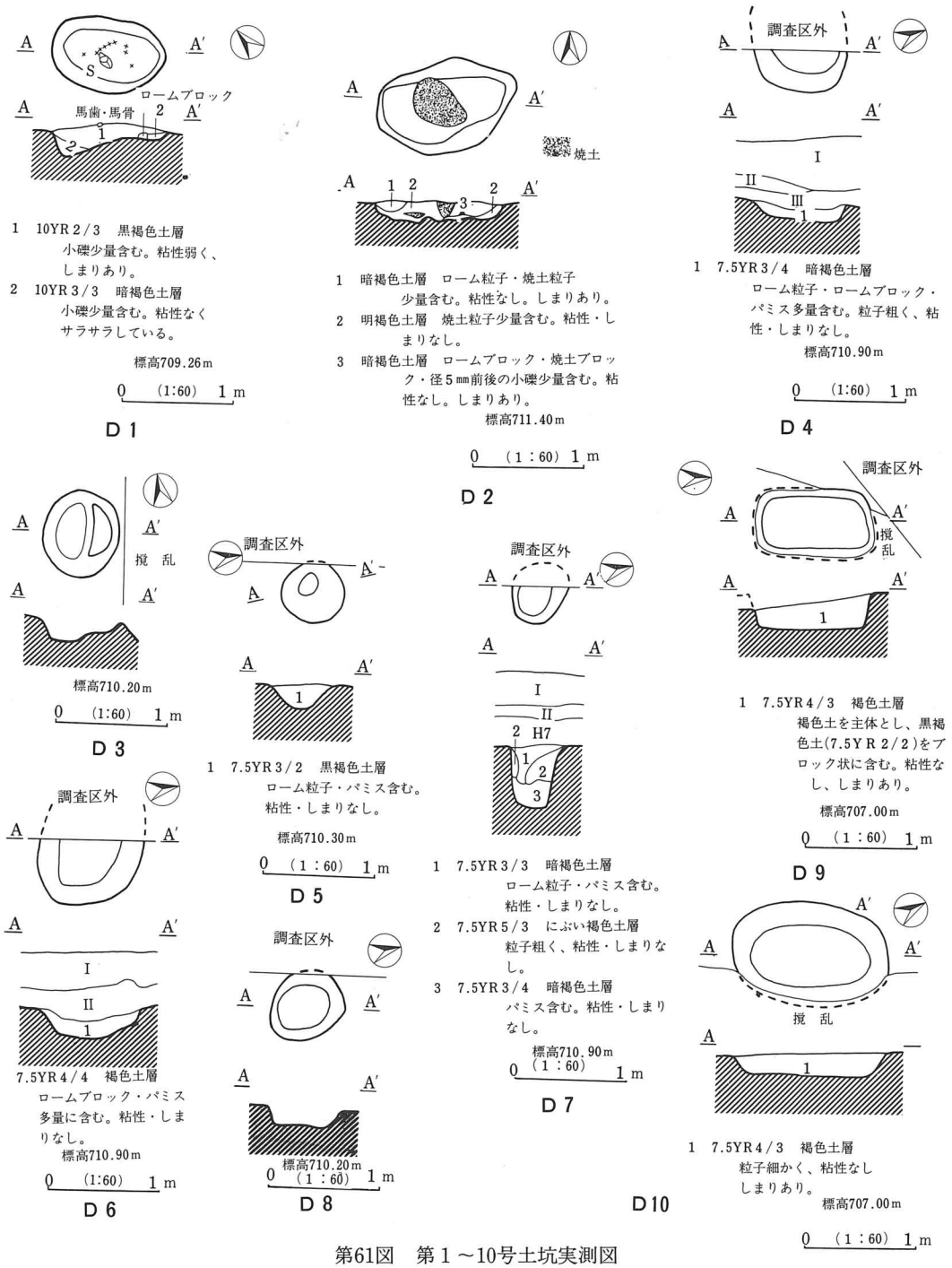
本址からは弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器が少量出土しているが、いずれも細片であり図示し得たものはない。弥生土器には壺があり、外面に赤色塗彩されたものと頸部に櫛描横走文の施文されたものがある。土師器にはロクロ成形による坏があり、須恵器には外面に平行叩き目文の見られる甕とロクロ成形による坏がある。灰釉陶器は１片のみである。

これらの出土土器はいずれも細片で、本址の時期決定の資料とはなり得ず、また、遺構の全容を把握することができないため、性格及び所産期は不明である。　（三石）

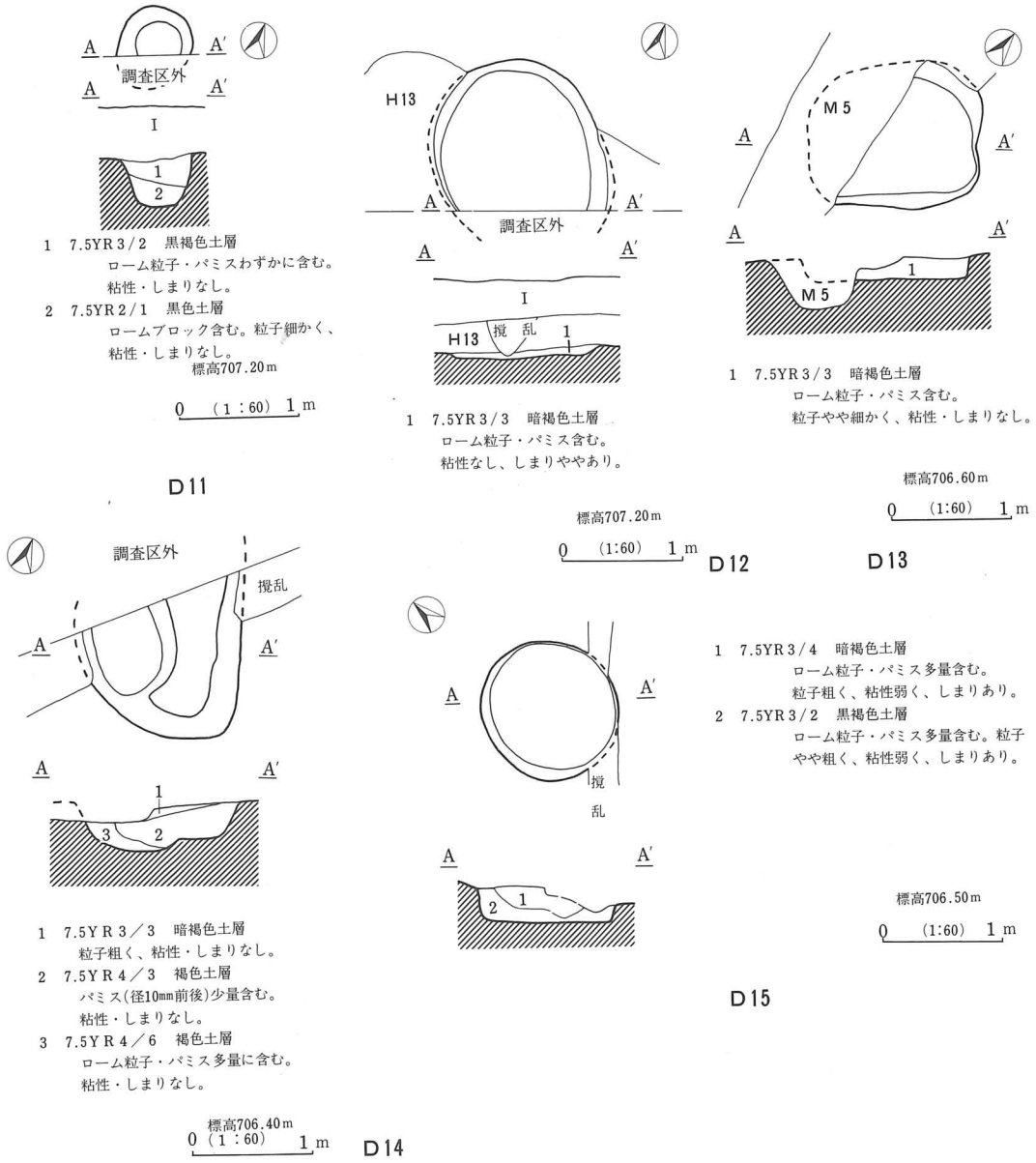
第３節　土坑

本遺跡からは総計29基の土坑が検出されているが、出土遺物等からその性格及び所産期を推定し得るものは少ない。各土坑の規模・形態等については第21表森下遺跡土坑一覧表に記した。調査区内での土坑の分布はＣ・Ｄ区、Ｉ～Ｌ区の二か所に集中する傾向が認められる。平面形態は

円形または楕円形を基本とするが長方形のものも存在する。断面形は逆台形状・「U」字状・皿状等を呈し、テラスを有するものも存在する。ここでは、そのうち主なものについて簡単にふれておくことにする。



第61図 第1～10号土坑実測図

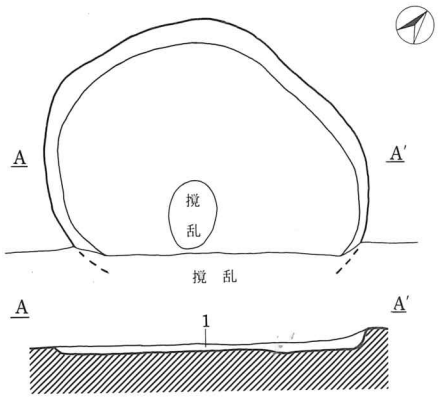


第62図　第11～15号土坑実測図

遺構（第61～65図、図版二十三～二十五）

第１号土坑はＣ区内、第２号トレンチ中央付近に位置する。田切り地形（第１号溝状遺構）が落ち込む北方において検出された。平面プランは長軸長100cm、短軸長65cmの楕円形を呈し、長軸方位はＮ－40°－Ｗを示す。

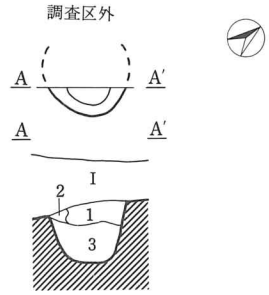
第２号土坑はＢ区内、第１号トレンチ北西部に位置する。129×80cmの楕円形を呈し、18cmの深度を有する。長軸方位はＮ－74°－Ｅを示す。覆土は三層に分割され、第１層は暗褐色土層、第２層は明褐色土層、第３層は暗褐色土層で焼土がブロック状に混入している。遺物は第２・３



1　7.5YR3／2　黒褐色土層
ローム粒子・パミス多量含む。
粒子細かく、粘性・しまりなし。

標高706.30m
0（1：60）　1m

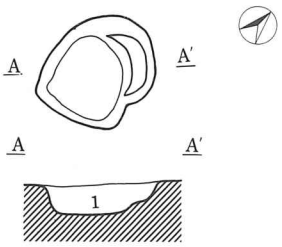
D16



1　7.5YR2／2　黒褐色土層
ローム粒子、パミス少量含む。粒子細かく、粘性なし。しまりややあり。
2　7.5YR3／4　暗褐色土層
ローム粒子、ロームブロック含む。粘性、しまりなし。
3　7.5YR2／1　黒色土層
ロームブロック含む。粒子細かく、粘性弱く、しまりなし。

標高706.50m
0（1：60）　1m

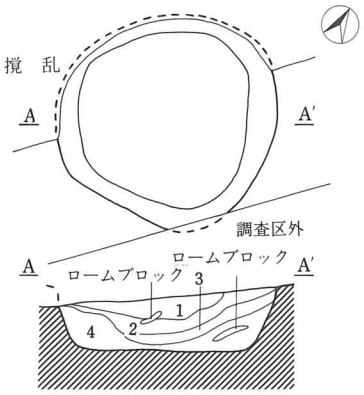
D20



1　7.5YR2／2　黒褐色土層
ローム粒子・パミス少量含む。
黒色土ブロック含む。粒子細かく、粘性・しまりなし。

標高707.30m
0（1：60）　1m

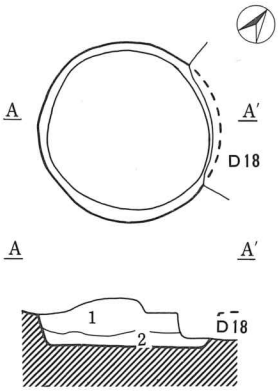
D17



1　7.5YR3／3　暗褐色土層
パミス少量含む。粘性・しまりなし。
2　7.5YR3／3　暗褐色土層
ローム粒子・パミス・炭化物多量に含む。粘性・しまりなし。
3　7.5YR4／4　褐色土層
ローム主体。粒子粗く、粘性なし。
4　7.5YR3／3　暗褐色土層
ロームブロック・パミス少量含む。
粘性・しまりなし。

標高706.40m
0（1：60）　1m

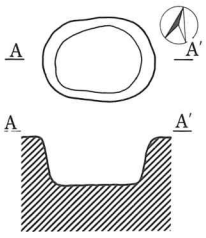
D18



1　7.5YR3／4　暗褐色土層
ローム粒子・パミス少量含む。
粒子粗く、粘性、しまりなし。
2　7.5YR3／3　暗褐色土層
ローム粒子・パミス多量含む。
粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高706.40m
0（1：60）　1m

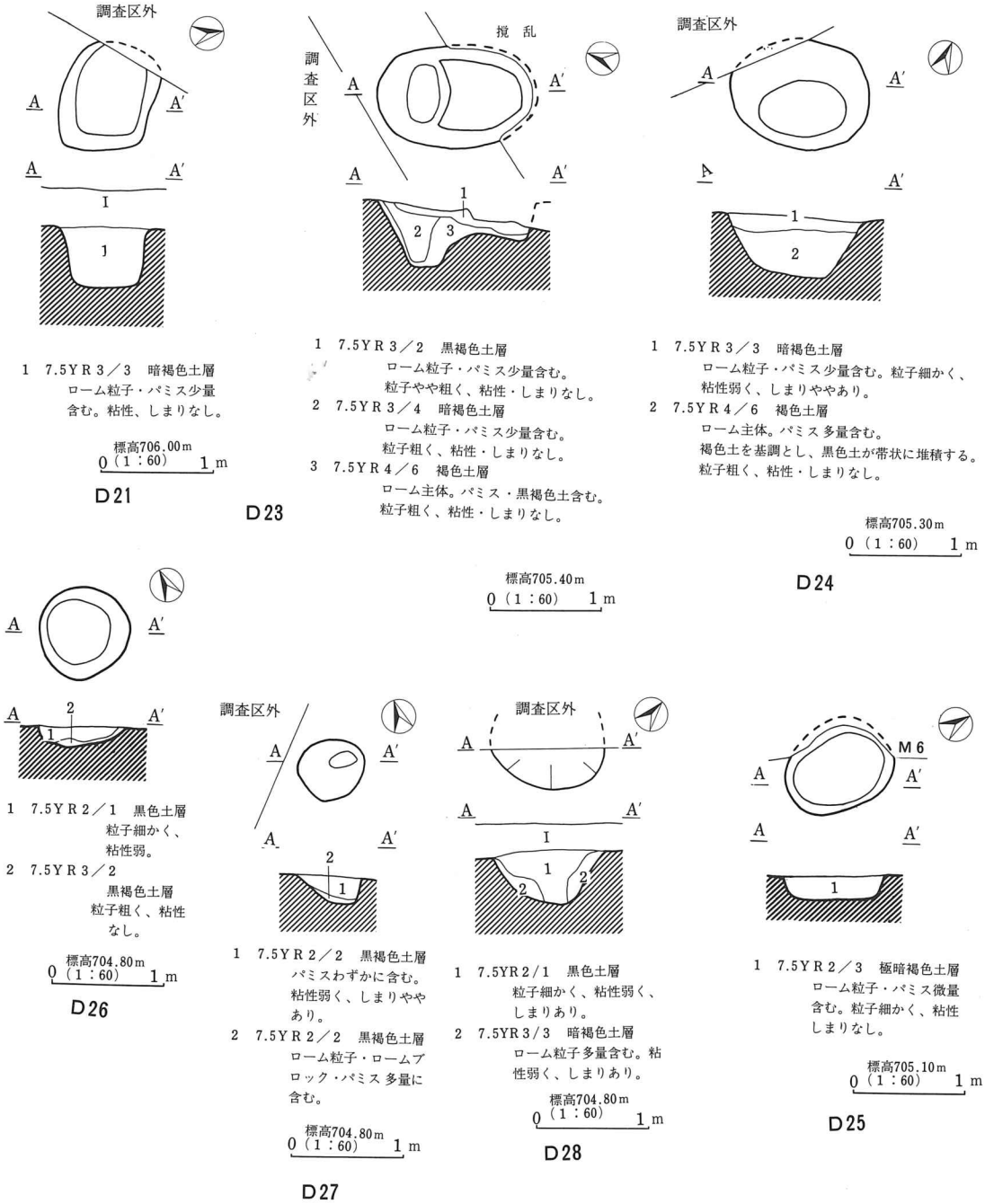
D19



標高705.24m
0（1：60）　1m

D22

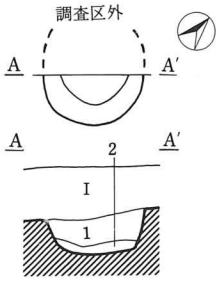
第63図　第16～20・22号土坑実測図



第64図　第21・23～28号土坑実測図

層、焼土中より出土している。出土土器の内外面には粘土の付着が著しく、また焼土が混入していることから住居址のカマドの可能性も考えられるが断定はできない。

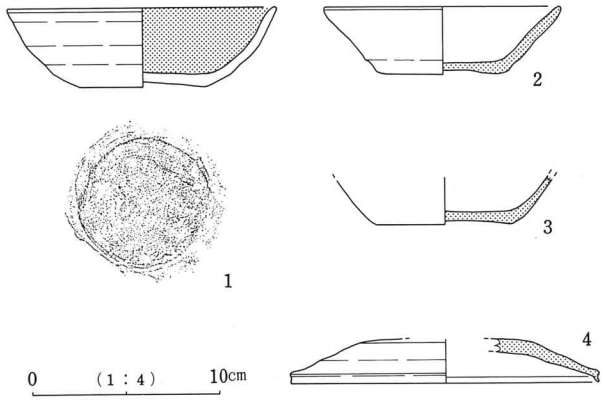
第７号土坑はＤ区内、第５号トレンチ中央付近に位置し、西半部は調査区外のため未調査である。上面を第７号住居址によって破壊されており、残存値で50×60cmの円形を呈し、56cmの深度を有する。今回、土坑としたが柱穴址と考えられる。



1　7.5YR 2／2　黒褐色土層
　　径0.5～1cm大の小礫を含む。
　　粘性なし、しまりあり。
2　7.5YR 3／3　暗褐色土層
　　ローム粒子多量含む。粒子粗く、粘性なし、しまりあり。

標高704.45m
0（1：60）　1 m

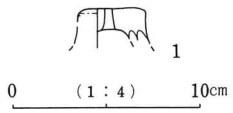
第65図　第29号土坑
実測図



第66図　第２号土坑出土土器実測図

第20表　第２号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
66－1	坏	14.4 4.2 6.6	体部内弯して立ち上がる。 底部回転糸切り後、周縁手持ちヘラケズリ。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	完全実測、口縁部１／２残存、No.３・４ 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　やや良好 色調　10ＹＲ７／４（にぶい黄橙色）
66－2	須恵器坏	(12.6) 3.6 (6.2)	体部直線的に外傾する。 底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部１／３残存、No.１・２ 胎土　白色粒子僅かに含む。 焼成　良好 内外面火襷あり 色調　7.5Ｙ５／2(オリーブ灰色)
66－3	須恵器坏	—— 〈2.6〉 (7.2)	底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	回転実測、底部２／３残存、No.５ 胎土　黒・白色粒子少量含む。 焼成　良好 内外面火襷あり 色調　10Ｙ６／１（灰色）
66－4	須恵器蓋	(16.4) 〈2.3〉 ——		内外面ともロクロヨコナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／５残存、No.６ 胎土　白色砂粒微量含む。密 焼成　良好 色調　５Ｙ５／１（灰色）



第67図　第19号土坑
出土土器実測図

遺物（第66～68図、図版三十三）

第１号土坑からは馬骨・馬歯・土師器・須恵器があるが、土器は小片で流れ込みの可能性が高い。馬骨・馬歯が出土しており、土坑の断面形などから馬の骨を埋めるために掘ったものではないかと考えられるが、その所産期については言及できない。

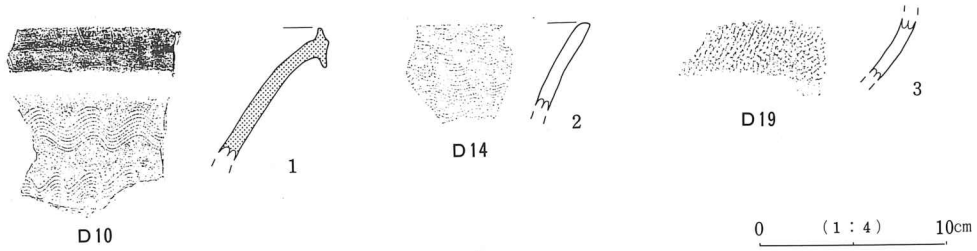
第２号土坑からは土師器坏（66－１）、須恵器坏（66－２・３）、蓋（66－４）が出土している。１は底部回転糸切りの後、周縁部手持ちヘラケズリ、２・３は回転糸切りのまま未調整である。４はかえりを有さず、天井部に回転ヘラケズリが施される。これらの土器から本土坑の所産期は

第21表　森下遺跡　土坑一覧表

遺構名	検出位置	平面プラン			長軸方位	深さ	備考
		形態	長軸長	短軸長			
D 1	C区2トレ	楕円形	100cm	65cm	N－40°－W	23cm	馬歯・馬骨出土
D 2	B区1トレ	楕円形	129	80	N－74°－E	18	
D 3	D区5トレ	円形	76	68	—	21	
D 4	D区5トレ	—	—	—	—	17	西半部調査区外
D 5	D区5トレ	円形	56	54	—	20	
D 6	D区5トレ	—	—	—	—	28	西半部調査区外
D 7	D区5トレ	—	—	—	—	56	西半部調査区外、柱穴？H 7に上面を切られる。
D 8	D区5トレ	楕円形	68	57	N－18°－W	19	
D 9	I区7トレ	隅丸長方形	〈104〉	〈59〉	N－1°－E	37	
D10	I区7トレ	楕円形	137	〈86〉	N－27°－E	22	
D11	I区7トレ	—	—	—	—	44	南半部調査区外
D12	J区7トレ	(楕円形)	—	〈136〉	—	22	南側調査区外H13に上面を切られる。
D13	J区7トレ	—	—	—	—	18	M 5に西半部を切られる。
D14	J区9トレ	—	—	—	—	42	北側調査区外
D15	J区7トレ	円形	116	113	—	30	
D16	J区7トレ	(楕円形)	—	—	—	22	
D17	J区7トレ	不整形	98	76	—	30	
D18	J区9トレ	円形	〈178〉	〈165〉	—	50	
D19	J区9トレ	円形	144	〈136〉	—	50	D18に切られる。
D20	K区10トレ	—	—	—	—	48	北側大半調査区外。
D21	K区10トレ	(楕円形)	—	80	—	53	
D22	K区10トレ	楕円形	88	68	N－68°－E	38	
D23	K区10トレ	楕円形	〈136〉	〈90〉	N－16°－W	62	
D24	L区10トレ	楕円形	124	98	N－69°－E	59	
D25	L区10トレ	楕円形	〈93〉	〈70〉	N－4°－E	22	M 6に切られる。
D26	L区10トレ	円形	84	80	—	26	
D27	L区10トレ	円形	60	56	—	26	
D28	L区10トレ	—	—	—	—	43	北側調査区外
D29	L区10トレ	—	—	—	—	36	北側調査区外

第22表　第19号土坑出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
67－1	蓋	つまみ部 3.6 〈1.9〉 ――	焼成前の穿孔が一孔有り。	内）ナデ調整 外）ナデ調整の後、ヘラミガキ	完全実測 胎土　白色粒子、砂粒を多量含む。 焼成　良好 色調　5ＹＲ4／4（にぶい赤褐色）



第68図　第10・14・19号土坑出土土器拓影図

奈良時代末から平安時代初頭と考える。

第19号土坑からは弥生土器が出土しており、蓋（67－1）の他、赤色塗彩の施された壺・櫛描波状文の施文された甕がある。67－1は蓋のつまみ部で、中央に焼成前の一孔を有する。また、68－3は縄文を地文とする弥生時代中期の壺の胴部片と考えられる。本土坑からはこの他、土師器・須恵器が混在して出土しており、所産期を決定する資料とはなり得ない。

この他、第9・10・14・15・16・17・18・22・24号土坑より縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、いずれも所産期を決定し得る資料とはなり得ず、性格・所産期とも不明である。

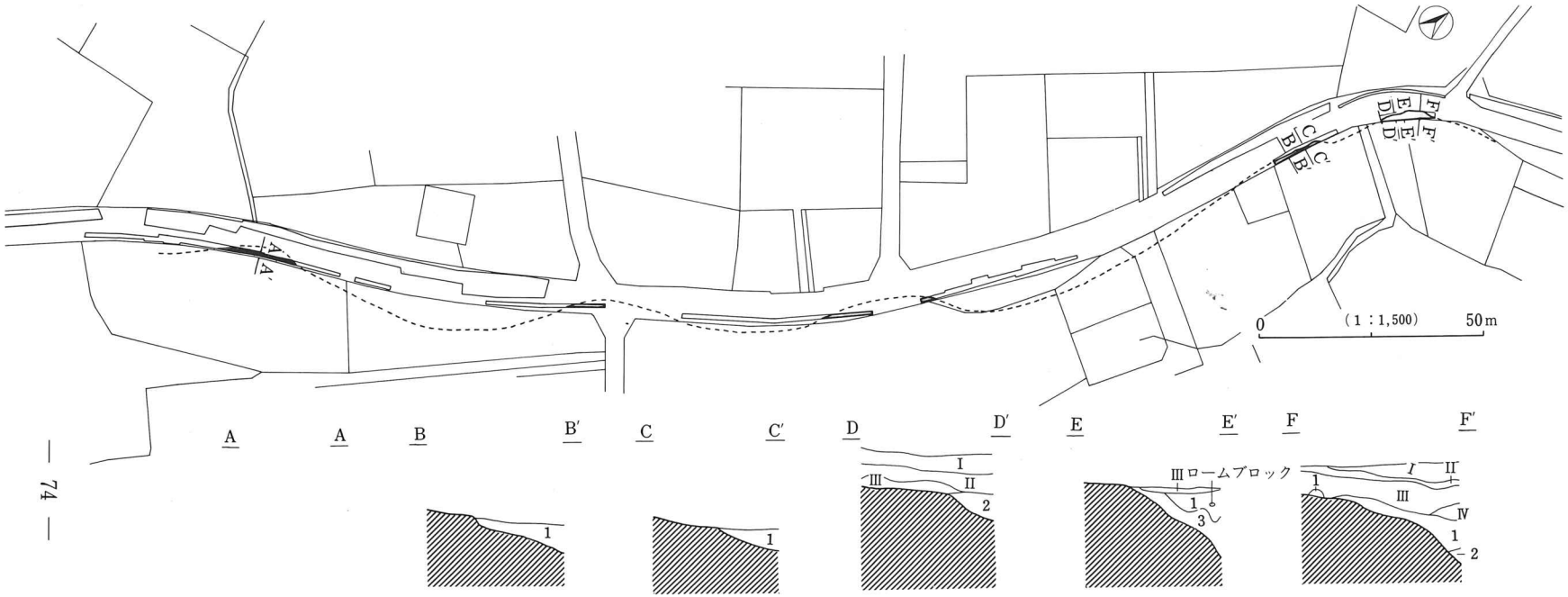
（高村・三石・助川）

第4節　溝状遺構

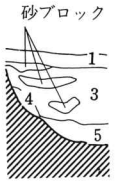
遺構（第69～74図、図版二十五・二十六）

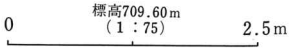
本遺跡からは総数で6条の溝状遺構が検出された。このうち第1～3号溝状遺構は自然流路であり、特に第1号溝状遺構は北東方向からのびる田切り地形の末端部分である。また今回行った調査が道路拡幅に伴うものであり、調査区の幅が非常に狭少であるため、極く一部が検出されたのみであり、遺構の全容を把握できたものはない。

第1号溝状遺構は、第1・2・6・8・9号トレンチ内において検出され、ほぼ今回の調査区

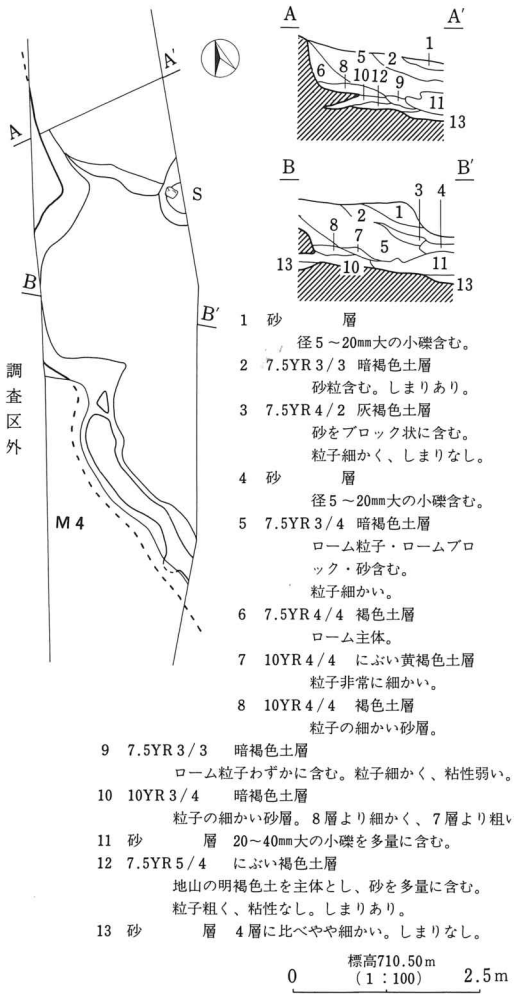


1	7.5YR3／4	暗褐色土層	径1～5㎜前後の小礫・砂を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
2	7.5YR3／2	黒褐色土層	径1～3㎜前後の小礫を多量に含む。粘性・しまりあり
3	7.5YR4／3	褐色土層	パミス・径5～10㎜前後の小礫を少量含む。砂質で粒子細かく、粘性なし。しまりあり。
4	7.5YR5／4	にぶい褐色土層	ローム粒子多量に含む。砂質で粒子細かく、粘性・しまりなし。
5		砂　層	砂粒～径40㎜前後の小礫を多量に含む。

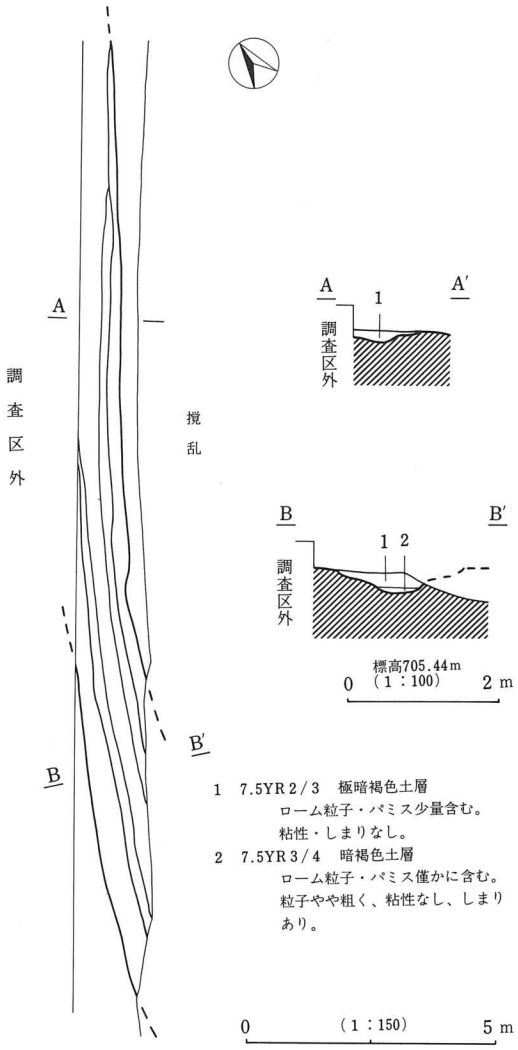




第69図　第1号溝状遺構実測図



第70図　第2号溝状遺構実測図

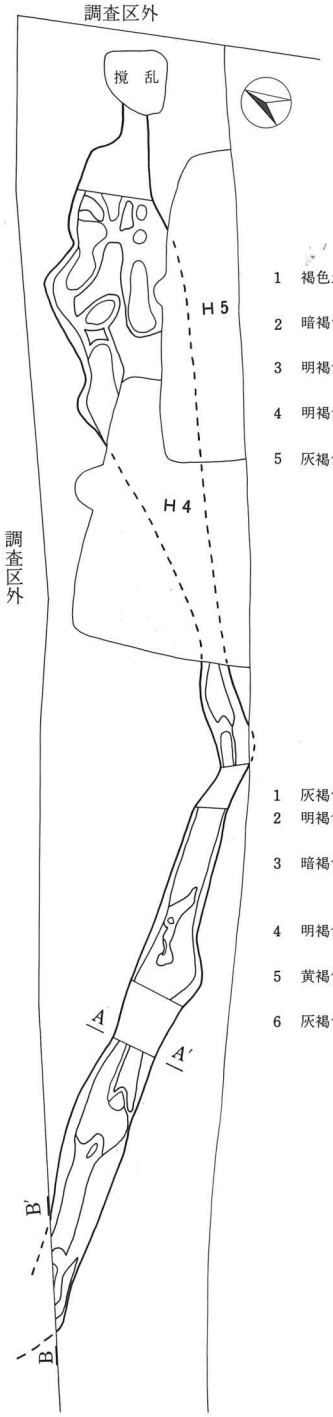


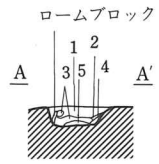
第71図　第6号溝状遺構実測図

に沿って存在すると考えられるが、底面まで確認された部分はなく、溝幅及び深さは不明である。C区とJ区における確認面の比高差は約3.2mを測り、最も深いI・J区における深さは約1mを計測する。

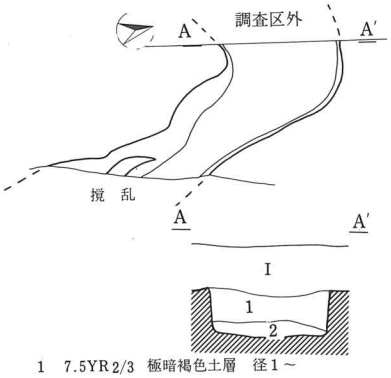
第2号溝状遺構はC区内、第5号トレンチ北端部に位置し、第4号溝状遺構に破壊される。検出長6.9m、深さは60～70㎝を測る。覆土は砂利層を主体とするものである。

第3号溝状遺構はA・B区内、第1号トレンチ北東側に位置する。第4・5号住居址と重複関係にあり両住居址に破壊される。平面形状はA区第5号住居址北東側の撹乱により南西方向に始まり、第5号住居址近くで幅が250㎝と最も広くなり、第4号住居址の西側、北西に向きを変えるあたりで60㎝と最も狭くなる。そのまま南西方向に直線的に調査区外へと続いている。覆土の





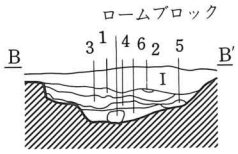
1 褐色土層 ∅2～3㎜程度の橙色粒子を少量含む。粘性なし・しまりあり。
2 暗褐色土層 ∅2～3㎜程度の橙色粒子を少量含む。粘性弱く、しまりあり。
3 明褐色土層 ∅1～3㎜程度の橙色粒子を少量含む。粘性弱く、しまりあるが1層より劣る。
4 明褐色土層 ∅1㎜程度の橙色粒子を少量含む。粘性なし・しまりあり。
5 灰褐色砂礫層 ∅1～2㎝、∅5㎝程度の礫を含む。



1 7.5YR 2/3 極暗褐色土層 径1～2㎝大の小礫を含む。ローム粒子僅かに含む。粘性・しまりなし。
2 7.5YR 2/2 黒褐色土層 ローム粒子・ロームブロック少量含む。粘性なし。しまりややあり。

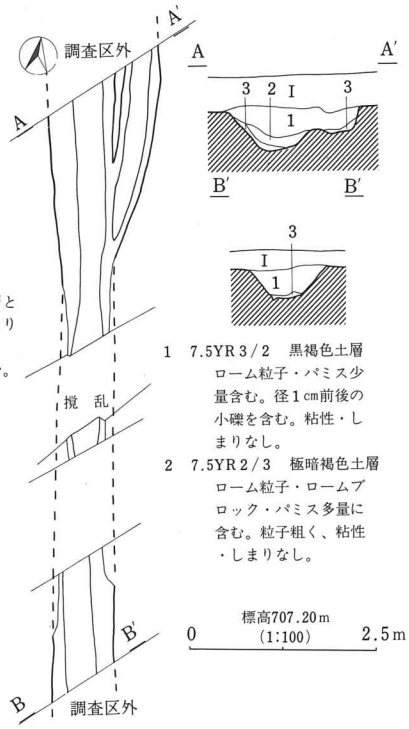
標高711.00m
0 (1：100) 2.5m

第73図 第4号溝状遺構実測図



1 灰褐色砂礫層 ∅1～3㎝程度の礫を含む。
2 明褐色土層 ∅1㎜程度の黄色粒子を含む。∅1㎝位の黄褐色土ブロックを含む。
3 暗褐色土層 ∅2～3㎜程度の橙色粒子を含む。2層と同様に黄褐色土ブロックを含むが2層より少ない。
4 明褐色土層 ∅1㎜程度の橙色粒子、白色粒子を含む。粘性なし・しまりあり。
5 黄褐色土層 ∅1～2㎝程度の礫を含む。粘性・しまりなし。
6 灰褐色砂礫層 ∅2～3㎝の礫を多く含む。

標高712.00m
0 (1：100) 2m



1 7.5YR 3/2 黒褐色土層 ローム粒子・パミス少量含む。径1㎝前後の小礫を含む。粘性・しまりなし。
2 7.5YR 2/3 極暗褐色土層 ローム粒子・ロームブロック・パミス多量に含む。粒子粗く、粘性・しまりなし。

標高707.20m
0 (1:100) 2.5m

第74図 第5号溝状遺構実測図

第72図 第3号溝状遺構実測図

状態から水が流れていたものと考えられ、その平面形状・断面形状等と考え合わせると自然流路の可能性がある。

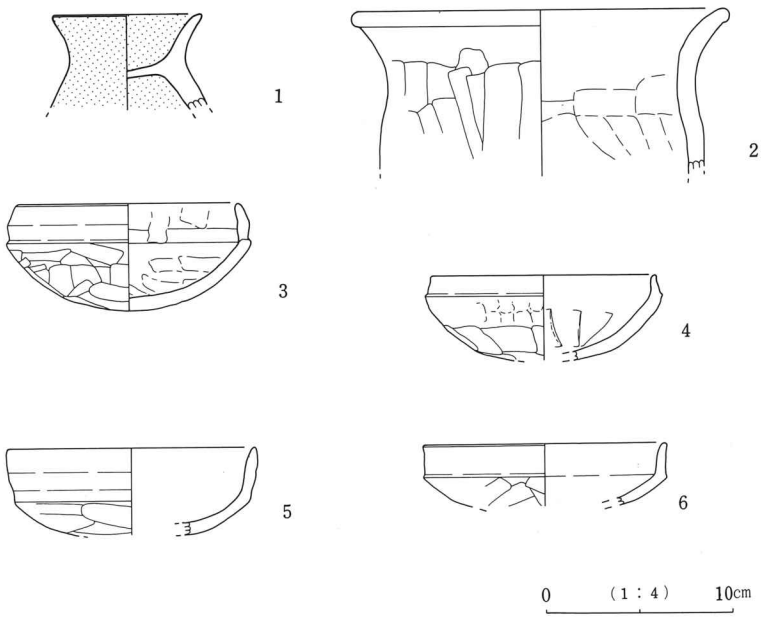
第４号溝状遺構はＣ区内、第５号トレンチ北端部に位置し、第６号住居址・第２号溝状遺構を切る。溝幅は85～160㎝、深さは62㎝を測る。底面から垂直に近い急傾斜で立ち上がるが、南側は徐々に緩やかな傾斜となる。

第５号溝状遺構はＪ区内、第７・９号トレンチより検出され、第13号土坑を切り、中央付近を撹乱により破壊される。検出長8.6m、溝幅56～148㎝を測り、溝底は南方に向かってレベルを低下させ、北端部と南端部の比高差は30㎝を測る。

第６号溝状遺構はＫ・Ｌ区内、第10号トレンチより検出され、第24・25号土坑を切る。また、北側は調査区外であり、南側は撹乱により破壊される。検出長762㎝、溝幅50㎝前後を測り、南に向かって徐々にレベルを低下させ、比高差は47㎝を測る。

遺物（第75～77図、図版三十四）

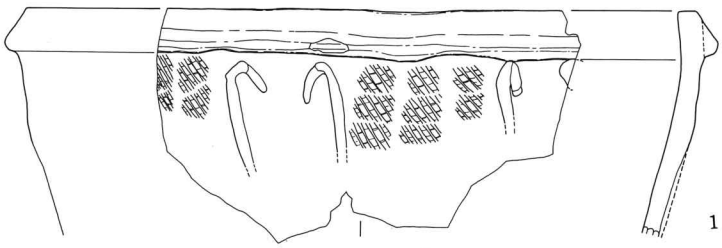
第１号溝状遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が混在して出土しているが、図化し得たものはない。弥生土器には赤色塗彩の施された小片と櫛描文の施文された甕がある。土師器には口縁部が「コ」の字状を呈する甕、内面に黒色処理される坏、高台付坏などがある。須恵器には底部回転糸切りの坏などがある。

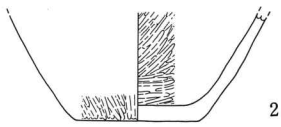


第75図　第２号溝状遺構出土土器実測図

第23表　第２号溝状遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
75－1	器台（？）	8.0 〈5.0〉 ――		内）赤色塗彩 外）赤色塗彩	完全実測 胎土　細砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　ＨＶｅ、7.5Ｒ５／８
75－2	甕	(20.2) 〈8.7〉 ――	口縁部外反し、器肉厚い。長胴甕。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整 外）口縁部ヨコナデの後、胴部縦位のヘラケズリ	回転実測、口縁部１／４残存 胎土　石英少量含む、白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ７／６（明黄褐色）
75－3	坏	(11.6) 5.7 ・	口辺部と底部の境に明瞭な稜を有し、口辺部は内傾する。 底部は丸底を呈する。	内）口辺部ヨコナデ、底部ナデ調整 外）口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／５残存 胎土　２～３㎜大の赤・白色粒子を含む。 焼成　良好 色調　7.5ＹＲ６／４（にぶい橙色）
75－4	坏	12.0 〈4.5〉 ・	口辺部と底部の境に明瞭な稜を有し、口辺部は直立気味となる。底部は丸底を呈する。 粗雑なつくり。	内）底部ナデ調整の後、ヨコナデ 外）口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ、指頭圧痕あり	完全実測、口縁部１／２残存 胎土　微砂多量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ７／4(にぶい黄橙色)
75－5	坏	(13.0) 〈4.6〉 ・	口辺部と底部の境に明瞭な稜を有し、口辺部は直立気味となる。底部は丸底を呈する。	内）口辺部ヨコナデ、底部ナデ調整 外）口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／５残存 胎土　φ１㎜以下の白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　10ＹＲ７／６（明黄褐色）
75－6	坏	(13.0) 〈3.3〉 ・	口辺部と底部の境に明瞭な稜を有し、口辺部は直立気味となる。底部は丸底を呈する。	内）口辺部ヨコナデ、底部ナデ調整 外）口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／５残存 胎土　砂粒少量含む。 焼成　良好 色調　外）10Ｒ３／４（暗赤色） 内）10ＹＲ４／４（褐色）





0　（1：4）　10cm

第76図　第３号溝状遺構出土土器実測図

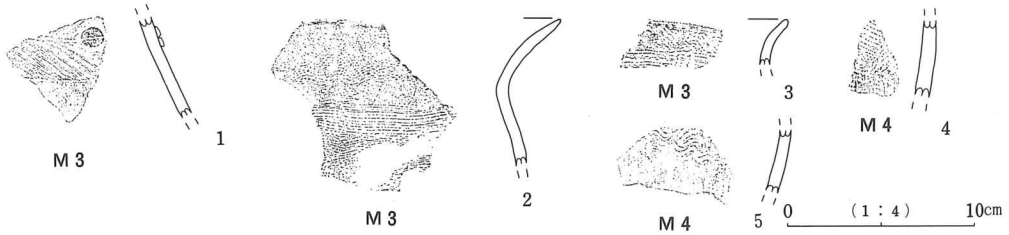
第２号溝状遺構からは弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器が出土しており、弥生土器１点、土師器甕１点・坏４点が図示し得た。75－１は内外面とも赤色塗彩される。器種は不明であるが器台とも考えられる。

75－２は口辺部が短く外反する長胴甕である。75－３～６は口辺部と底部との境に明瞭な稜を有する坏であり、古墳時代後期の土器組成中にみられるものである。

第３号溝状遺構の出土遺物には縄文土器・弥生土器・須恵器があるが、弥生土器の量が最も多い。76－１の縄文土器は、南西から北西に向きを変える最も幅の狭い地区内で出土したもので、

第24表　第３号溝状遺構出土土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
76－１	深鉢	(35.4) 〈12.0〉 ――	括れの弱いキャリパー形（？） 隆帯により口縁部無文帯と胴部文様帯が区画される。	内）蓖状工具による粗いミガキ。磨滅著しい 外） 文）無節Ｌ縄文（縦位回転）を地文とし，鉤状の上端を有する懸垂文を施文する。	回転実測、口縁部１／５残存 胎土　白色系砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　外）10ＹＲ５／３（にぶい黄褐色）
76－２	甕	―― 〈6.7〉 (6.6)		内）横位、斜位のヘラミガキ 外）縦位のヘラミガキ（剥離著しい） 底部ヘラミガキ	回転実測、底部１／２残存 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　7.5ＹＲ５／６（明褐色）



第77図　第３・４号溝状遺構出土土器拓影図

縄文時代中期後半の加曽利系の深鉢口縁部である。76－２の弥生土器は最も幅の広い地区内の出土で、甕の底部であり、内面に炭化物の付着が認められる。１・２とも磨滅・剥離が著しい。

第４号溝状遺構からは弥生土器・土師器が出土している。弥生土器には櫛描斜走文の施文される77－４と櫛描波状文の施文される77－５がある。この他赤色塗彩される壺・高坏の細片がある土師器には外面にヘラケズリの施される甕がある。

第５号溝状遺構からは弥生土器・土師器・須恵器が出土しているが、図示し得たものはない。弥生土器には赤色塗彩された細片があり、土師器には甕・坏の細片がある。

第６号溝状遺構からは土師器・須恵器が出土しているが、細片のため図示し得たものはない。

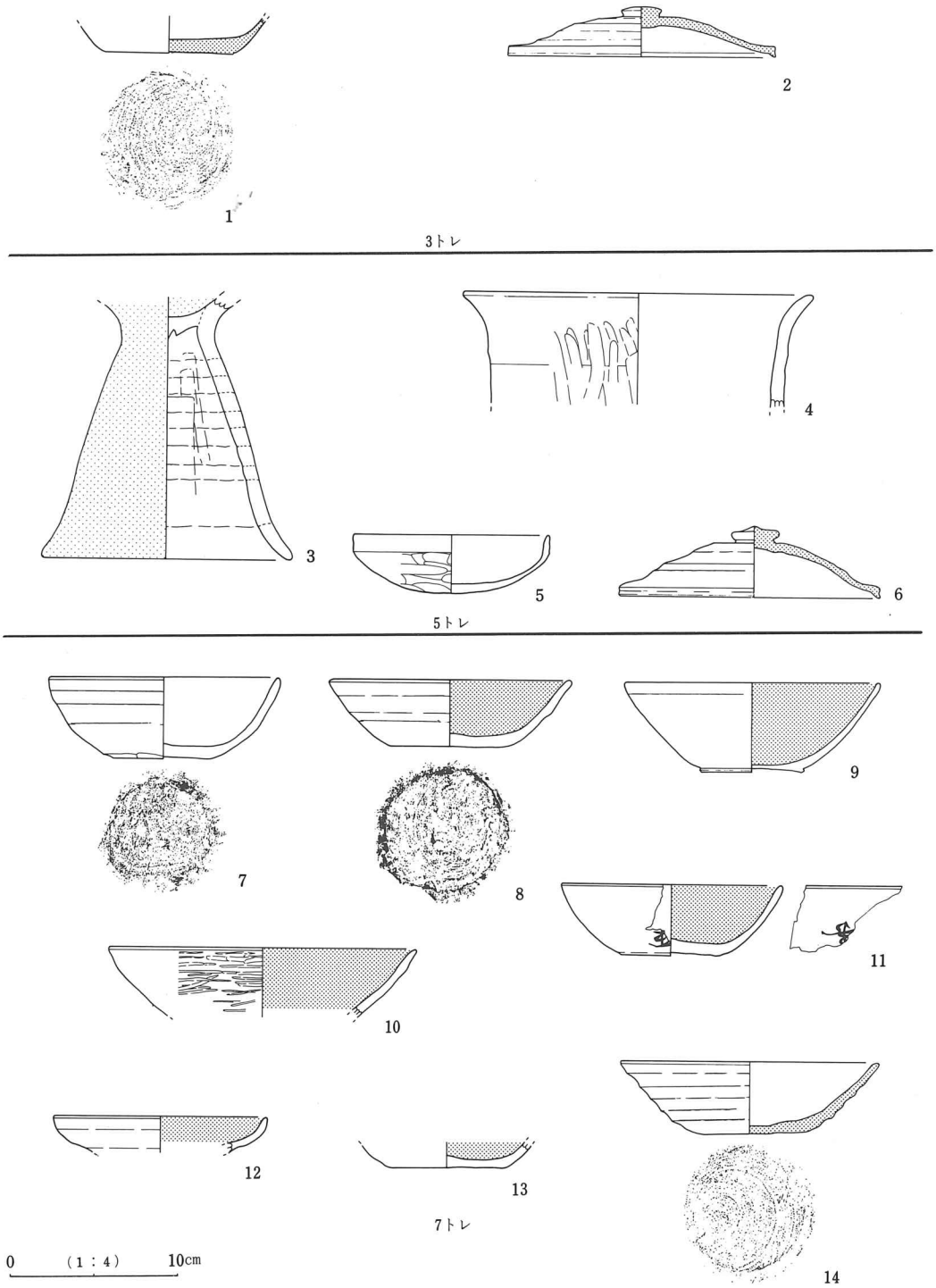
以上、これらの出土遺物は混在して出土しており、時期決定の根拠とはなり難いため、各遺構の所産期は各々の重複関係から推定し得るのみである。第３号溝状遺構は第５号住居址に切られているため、古墳時代後期以前のものであり、第４号溝状遺構は第６号住居址を切っており、古墳時代後期以降である。また、第２号溝状遺構はこれよりも古いものであるが、第６号住居址との新旧関係は不明である。

（高村・三石）

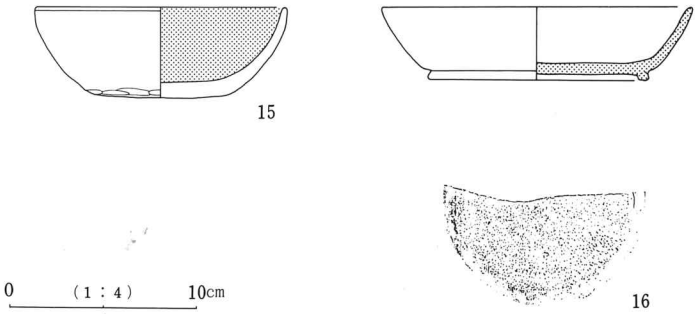
第５節　トレンチ出土土器及び表採遺物

（第78～81図、図版三十四・三十五）

トレンチ出土土器及び表採遺物のうち主なものを図示した。内訳は弥生土器１点・土師器13点、須恵器５点、石製品１点の計20点である。



第78図　第３・５・７号トレンチ出土土器実測図



第79図　第11号トレンチ出土土器実測図

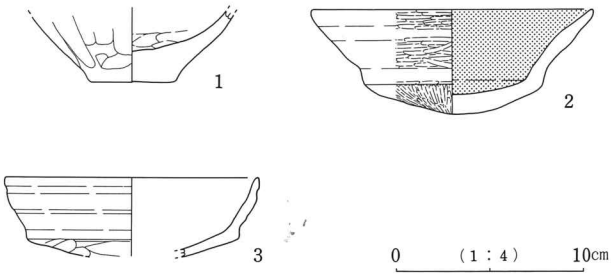
第25表　トレンチ出土土器観察表〈1〉

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
78－1	須恵器 坏	—— 〈2.2〉 7.5	底部回転糸切りであるが、非常に粗雑な切り離し。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測、3トレ 胎土　白色粒子少量、粗い砂粒微量含む。 焼成　良好 色調　2.5Y 6／1（黄灰色） 火襷あり
78－2	須恵器 蓋	つまみ部 2.4 2.9 16.0	偏平なつまみ部を有する。 歪み著しい。	内）ロクロヨコナデ 外）ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ	完全実測、3トレ 胎土　白色粒子多量、黒色粒子少量含む。 焼成　良好 内外面に火襷あり 色調　2.5GY 5／1（オリーブ灰色）
78－3	高坏	—— 〈15.4〉 (15.0)	脚部のみ。 輪積成形。 「ハ」の字状に開き、端部でわずかに外反する。	内）柱状部ナデ調整、裾部ヨコナデ 外）赤色塗彩、柱状部縦位、裾部横位のヘラミガキ	完全実測、5トレ 胎土　白色他微砂少量含む。密 焼成　良好 色調　10YR 7／4（にぶい黄橙色）
78－4	甕	(20.8) 〈6.7〉 ——	口縁部短く外反する。	内）口縁部ヨコナデ、胴部ナデ調整 外）口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリの後ナデ調整	回転実測、口縁部1／5残存、5トレ 胎土　密で精選されている。 焼成　良好 色調　7.5YR 5／6（明褐色）
78－5	坏	(11.6) 3.5 ・	口縁部と底部の境に陵を有し、口辺部は直立気味となる。 底部は丸底を呈する。	内）口縁部ヨコナデ、底部ナデ調整 外）口縁部ヨコナデの後、底部ヘラケズリ	回転実測、5トレ 胎土　微砂少量含み密で精選されている。 焼成　良好 色調　7.5YR 7／6（橙色）
78－6	須恵器 蓋	つまみ部 2.8 4.2 15.6	つまみ部は宝珠形を呈する。 歪み著しい。	内）ロクロヨコナデ 外）ロクロヨコナデの後、天井部回転ヘラケズリ	完全実測、5トレ。 胎土　φ1㎜前後の黒色粒子・φ1㎜以下の白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　7.5Y 5／2（灰オリーブ色）
78－7	坏	(13.8) 4.8 6.0	体部内弯して立ち上がる。 底部回転糸切りの後、ヘラケズリ。	内）横位の丁寧なヘラミガキ 外）ロクロヨコナデ	回転実測、7トレ 胎土　白色粒子微量・砂粒少量含む。 焼成　良好 色調　2.5YR 5／8（明赤褐色）
78－8	坏	(14.5) 4.0 7.0	体部直線的に外傾する。底部回転糸切り。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、7トレ 胎土　白色・砂粒含む。粒子のやや粗い砂粒少量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR 5／6（明褐色） 外面火襷あり

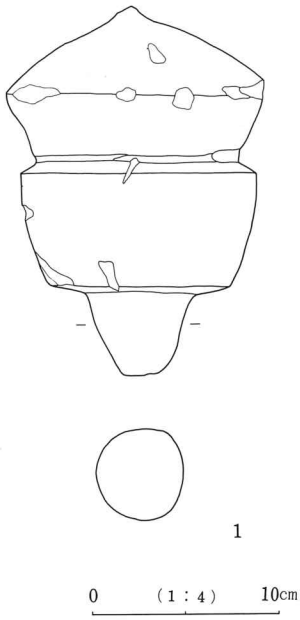
第26表　トレンチ出土土器観察表〈2〉

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調　　整	備　　考
78－9	鉢	(15.2) 5.3 (6.0)	口縁部わずかに内弯する。器肉薄い。 底部回転糸切り。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、底部1／2残存、7トレ 胎土　白色・茶色粒子少量含む 焼成　良好 色調　内）2.5Y 4／1（黄灰色） 外）10YR 5／8（黄褐色）
78－10	坏	(18.3) 4.1 ・		内）黒色処理 外）ナデ調整の後、横位のヘラミガキ	回転実測、口縁部1／6残存、7トレ 胎土　1.5mm大の赤色粒少量含む 1mm大の白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10YR 6／4（にぶい黄橙色）
78－11	坏	(13.2) 4.2 (6.0)	底部回転糸切り。 体部下位に「平」（？）の字と判読不明の墨書二字あり。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／3残存、7トレ 胎土　白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　内）N1.5／（黒色） 外）10YR 6／4（にぶい黄橙色）
78－12	坏	(12.6) 〈2.2〉 ——		内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／5残存、7トレ 胎土　白色微砂少量含む。 焼成　良好 色調　内）N 3／（暗灰色） 外）10YR 6／4
78－13	坏	—— 〈1.5〉 (6.8)	底部回転糸切り。	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、底部1／2残存、7トレ 胎土　白色粒子・砂粒少量含む。やや粒子の粗い砂粒微量含む。 焼成　良好 色調　7.5YR 4／3（褐色）
78－14	須恵器坏	15.4 4.4 6.8	底部回転糸切り。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測、7トレ 胎土　砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　2.5Y 6／4（にぶい黄色） 内外面中央付近黒く焼けている。
79－15	坏	(13.4) 4.8 (7.0)	体部内弯して立ち上がる。 底部手持ちヘラケズリ	内）黒色処理 外）ロクロヨコナデ	回転実測、口縁部1／6残存、11トレ 胎土　白色粒子多量含む。茶色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　内）N1.5／（黒色） 外）7.5YR 6／6（橙色）
79－16	須恵器高台付坏	16.8 3.8 11.8	体部直線的に外傾するが、口径に比して器高低い。 底部回転ヘラケズリの後、高台貼付。	内外面　ロクロヨコナデ	完全実測、口縁部1／2残存、11トレ。 胎土　φ1mm以下の白色粒子・φ1mm前後の黒色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　N 3／（暗灰色）

弥生土器には高坏の脚部（78－3）があり、「ハ」の字状に開き、外面に赤色塗彩が施される。土師器には甕・坏があり、甕（78－4）は長胴甕である。坏は11点あり、丸底で口辺部と底部との境に稜を有するもの（78－5、80－2・3）、底部に手持ちヘラケズリの施されるもの（78－7、79－15）、回転糸切りのまま未調整のもの（78－8・9・11・13）などがある。



第80図　森下遺跡表採土器実測図



第81図　森下遺跡表採石製品実測図

78－11は体部に「平」と思われる字と判読不可能な文字の二字が認められる墨書土器である。

須恵器坏（78－１・14）は底部回転糸切りのまま未調整である。78－１は底部に「×」のヘラ記号が認められる。79－16は高台付坏で、口径に比して器高が低く、所謂盤状の形態を呈するものである。底部回転ヘラケズリの後、高台が貼付される。蓋には78－２・６がある。つまみ部は宝珠形を呈し、かえりを有さず、中央部で器高が高まる形態のものである。

この他、石製品には81－１がある。81－１は五輪塔の空風輪で、風輪の下面には火輪と接続するための柄が突出している。

第27表　森下遺跡表採土器観察表

挿図番号	器種	法量	成形及び器形の特徴	調整	備考
80－1	甕	―― <3.8> 4.4		内外面　ヘラケズリの後、ナデ調整	完全実測 胎土　白色系細砂粒多量含む。 焼成　良好 色調　10YR５／１（褐灰色） 外面底部に火熱を受けた痕跡あり。
80－2	坏	15.0 5.5 ・	口辺部と底部の境に明瞭な陵を有し、口辺部は外傾して立ち上がる。 底部は丸底を呈する。	内）黒色処理 外）口辺部ヨコナデの後、横位のヘラミガキ 底部ヘラケズリの後、ヘラミガキ	完全実測 胎土　白色粒子少量含む。 焼成　良好 色調　2.5YR６／８（橙色）
80－3	坏	(13.6) <4.2> ・	口辺部と底部の境に明瞭な陵を有し、口辺部は内弯気味に外傾する。 底部は丸底を呈する。	内）口辺部ヨコナデ、底部ナデ調整 外）口辺部ヨコナデ、底部ヘラケズリ	回転実測、口縁部１／４残存。 胎土　φ１㎜以下の白色粒子多量含む。 焼成　良好 色調　10YR６／６（明黄褐色）

この他、石製品には81－１がある。81－１は五輪塔の空風輪で、風輪の下面には火輪と接続するための柄が突出している。

（三石）

第Ⅴ章　調査のまとめ

今回、森下遺跡において検出された遺構・遺物の詳細は前述した。検出された遺構は、竪穴住居址20棟、特殊遺構３基、土坑29基、溝状遺構６条である。一方出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、石製品、獣骨等がある。

以下、今回の調査において検出された遺構・遺物のうち、竪穴住居址を中心として簡単にまとめを行っていきたい。

第１節　遺構

今回調査を行った森下遺跡は、東方の周防畑遺跡群、西方の西近津遺跡群に狭まれた道路部分の発掘調査であるが、調査区の東側に、御代田方面からのびる田切り地形の終末部分である小田切り地形（第１号溝状遺構）が存在しており、本遺跡は西方の西近津遺跡群の東側縁辺部分にあたるものと考えられる。

今回実施された調査は、道路拡幅工事に先立つものであり、現道の両側、幅約１～３ｍという限られた範囲内での調査であり、さらに道路によって削平を受けた部分が多く、全プランを確認できた住居址はないが、台地上における遺構の分布をある程度把握することができた。

本遺跡から検出された竪穴住居址は、弥生時代後期（第９・10・12・15・18号住居址）、古墳時代後期～奈良時代初頭（第４・５・６・14・17号住居址）、奈良～平安時代（第２・３・７・11・13・16・19・20号住居址）の三時期に大別される。本遺跡の周辺遺跡を概観すると西近津遺跡[(1)]・若宮遺跡[(2)]・下長畝遺跡[(3)]・周防畑Ｂ遺跡[(4)]等の発掘調査が実施されており、西近津遺跡で弥生時代後期の住居址１棟、古墳時代中～後期の住居址３棟、若宮遺跡で古墳時代後期後半から奈良時代初頭13棟、平安時代３棟、下長畝遺跡で弥生時代４棟、周防畑Ｂ遺跡で弥生時代23棟、平安時代67棟の住居址が検出されている。また、各遺跡の標高は、西近津遺跡が714ｍ前後、若宮遺跡が713～714ｍ、下長畝遺跡が705ｍ前後、周防畑Ｂ遺跡が702～704ｍ前後を測り、下長畝遺跡・周防畑Ｂ遺跡において弥生時代の集落が展開しているのに対し、標高710ｍを越える西近津遺跡・若宮遺跡では、西近津遺跡から後期の住居址が１棟検出されたのみである。本遺跡内においても最も北方に位置する第９号住居址の標高は約708ｍであり、他の４遺跡の弥生時代住居址の分布状況とほぼ一致している。これらを総合すると、小山が指摘したように、弥生時代の集落はおおむね標高710ｍ前後を境にして展開されると考えられる。また、奈良時代及び平

安時代の集落は、若宮遺跡で14棟、周防畑Ｂ遺跡で67棟、本遺跡においても８棟が検出されており、さらに、標高770ｍを測る前田遺跡群[5]・鋳師屋遺跡群[6]においても該期の大集落が営まれていたことが確認されており、かなり広範囲にわたって、相当数の遺構が存在することが推測される。

住居址の平面形態及び規模については、先述したように、今回行った調査が道路の拡幅工事に伴い限られた範囲内での調査であり、さらに、道路により破壊された部分が多いため、全プランを確認できたものがなく言及するには至らなかった。

第２節　遺物

１）弥生時代の土器について

森下遺跡において弥生時代とした住居址には第９・10・12・15・18号住居址があるが、器形の知り得る資料が出土した遺構は第10・12号住居址の２棟のみであり、ここではこの２棟の出土土器を中心に簡単にまとめを行っていきたい。

壺には赤色塗彩が施され、頸部に、篦描横走文による文様帯区画の中に篦描羽状沈線文が施文されるもの（30－１・２、36－３）と、無彩で、頸部に櫛描横走文の施文されるもの（36－１・２）がある。また、前者には円形浮文の貼付されるものもある。この他、胴下半部がくびれて底部へ収束する30－３も存在する。

甕には口縁部から胴上半部に櫛描波状文と櫛描斜走文の施文されるものがある。頸部文様は櫛描簾状文が施文されるが、36－５は櫛描横走文が施文されており稀有な資料である。口縁部形態は頸部から緩やかに外反する形態を呈し、口縁部の伸長化傾向を窺うことができる。

以上、これらの出土土器は弥生時代後期前半、吉田式土器と考えられるものであるが、壺36－１にみられるような大きく外反する口辺部形態や胴下半部がくびれて底部に収束する30－３が存在すること、また、甕の口縁部が緩やかに外半して、伸長化の傾向がみられることなど、次期の箱清水式土器の様相を示すものが存在することから、本資料は吉田式系統の中でも新しい段階の土器として位置づけておきたい。

２）古墳時代以降の土器について

古墳時代後期と考えられる土器は、第４・６・14・17号住居址より出土している。甕は外面に縦位のヘラケズリが施され、胴部にほとんど膨らみをもたない長胴甕が主体を占め、他に、球胴形の胴部を有し、胴部にヘラケズリの後ヘラミガキの施される43－２がある。坏には口辺部と底部の境に稜を有する所謂須恵器模倣坏があるが、第17号住居址からは丸底で偏平な50－５が出土

しており、古墳時代終末期に位置付けられ、第４・６・14号住居址に後出するものである。

奈良時代～平安時代と考えられる住居址には、第２・３・７・11・13・16・19・20号住居址があるが、第11号住居址から須恵器坏が比較的まとまって出土している。底部の残存する33－１～５はいずれも回転糸切りのまま未調整であり、体部の形態も直線的に外傾し、底部の縮小化傾向が認められる。須恵器坏の形態変化は、堤　隆氏が十二遺跡（1988）の報告[7]で口径：底径比（底径÷口径×100）を用いて分析を行っており、本資料も33－４を除いてほぼ42～48の数値を示していることから本住居址は十二遺跡第Ⅴ期（９世紀前葉）に該当すると考える。この他、第13号住居址からは、体部に「井」の墨書のみられる須恵器坏が出土している。須恵器に墨書が施される例は、佐久地方では現在まで報告がなされているもので、佐久市上桜井北遺跡第６号住居址[8]、同鋳師屋遺跡第１号住居址[9]、御代田町野火付遺跡第13号住居址[10]、同前田遺跡第１・７号住居址[11]、同十二遺跡第14（２点）・46号住居址[12]、小諸市宮の北遺跡第９号住居址[13]、同曽根城遺跡第５号住居址[14]、小海町雨堤遺跡第１号住居址[15]の８遺跡11例を数え、土師器と比較して圧倒的に少ない。これらを器種別にみると、坏８点、高台付坏１点、蓋２点と坏形土器が圧倒的に多く、また、時期別に概観すると８世紀第Ⅰ四半期１点、８世紀第Ⅲ四半期１点、８世紀第Ⅳ四半期～９世紀初頭１点、９世紀～10世紀８点と９世紀代に最も多くの出土例がみられる。

以上、森下遺跡の出土土器を概観したが、本遺跡は弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡であり、今後の調査によって本遺跡に展開する集落の一端が僅かでも明らかにされることを期待したい。

（三石）

註(1)　佐久市教育委員会　1971　『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』

註(2)　佐久市教育委員会　1984　『若宮遺跡』

註(3)　1984年　佐久市教育委員会によって調査された。

註(4)　佐久市教育委員会　1980　『周防畑Ｂ遺跡調査概報』

註(5)　御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』

註(6)　佐久市教育委員会　1985　『鋳師屋遺跡』

　　1988　『鋳師屋遺跡　Ⅱ』

註(7)　報文中において、第４段階の須恵器坏について、「前段階の口径：底径比（底径÷口径×100）が50以上の数値を示す場合が多かったのに対し、口径：底径比の数値が45程度と低くなってくる特徴をみせる。」としている。

註(8)　佐久市教育委員会　1978　『上桜井北』

註(9)　佐久市教育委員会　1985　『鋳師屋遺跡』

註(10)　御代田町教育委員会　1985　『野火付遺跡』

註(11)　前掲註５

註(12)　御代田町教育委員会　1988 『十二遺跡』

註(13)　小諸市教育委員会　1981 『宮の北』

註(14)　小諸市教育委員会　1983 『曽根城遺跡』

註(15)　小海町教育委員会　1986 『雨堤遺跡』

引用参考文献

佐久市教育委員会　1971 『佐久市長土呂西近津遺跡緊急発掘調査概報』

1978 『上桜井北』

1980 『周防畑遺跡』

1980 『周防畑Ｂ遺跡調査概報』

1984 『若宮遺跡』

1985 『鋳師屋遺跡』

1986 『大井城跡（黒岩城跡）』

1988 『鋳師屋遺跡　II』

1988 『下芝宮遺跡』

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター　1986 『西裏・竹田峯』

1987 『高師町　西大久保』

1987 『北西の久保―南部台地上の調査―』

御代田町教育委員会　1985 『野火付遺跡』

1987 『前田遺跡』

1988 『十二遺跡』

小諸市教育委員会　1981 『宮の北』

1983 『曽根城遺跡』

1988 『鋳物師屋』

小海町教育委員会　1986 『雨堤遺跡』

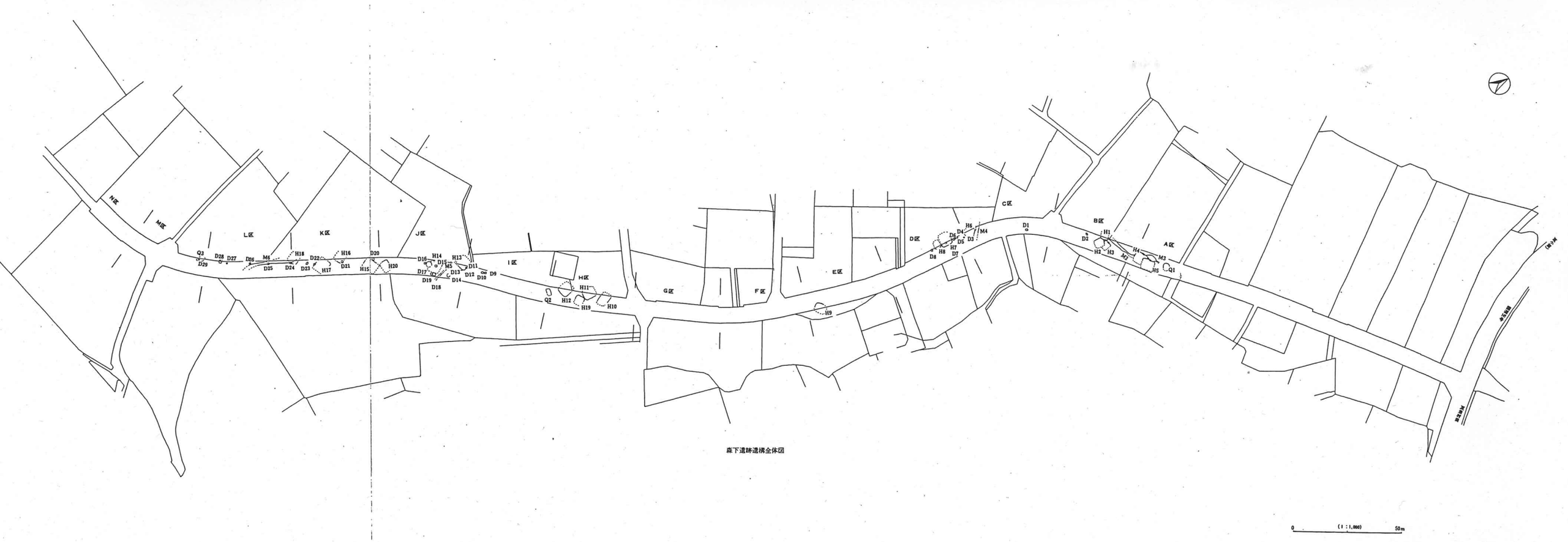
長野市教育委員会　1987 『長野吉田高校グランド遺跡』

山梨県教育委員会　1987 『金の尾遺跡　無名墳（きつね塚）』

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　1985 『浜町屋敷内遺跡Ｃ地点』

岡田正彦　1973 「墨書・刻書土器小考―長野県下出土例を中心として―」『信濃25－４』

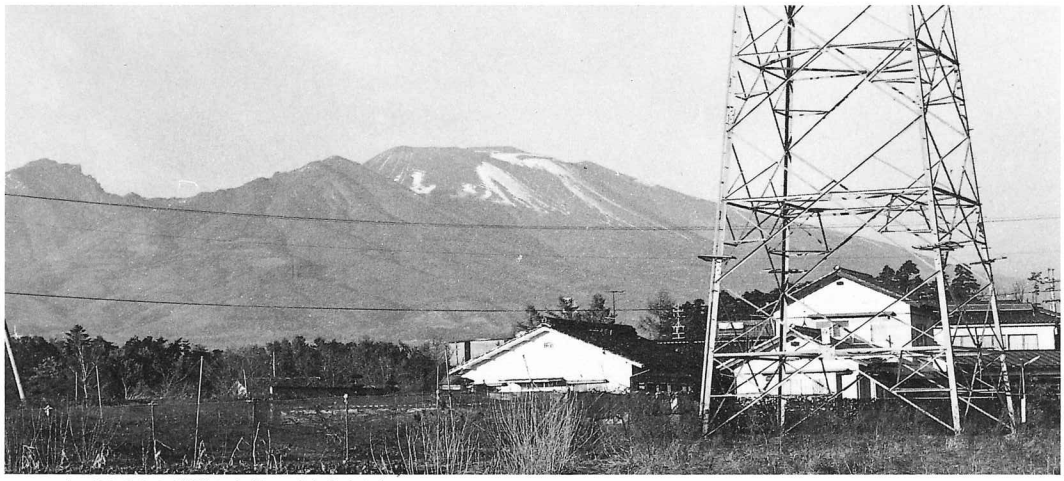
林　幸彦　1982 「周防畑Ｂ遺跡」『長野県史　考古資料編　全一巻(二)主要遺跡(北・東信)』


N区
M区
L区
K区
J区
I区
H区
G区
F区
E区
D区
C区
B区
A区
Q1
Q2
Q3
H1
H2
H3
H4
H5
H6
H7
H8
H9
H10
H11
H12
H13
H14
H15
H16
H17
H18
H19
H20
H21
H22
D1
D2
D3
D4
D5
D6
D7
D8
D9
D10
D11
D12
D13
D14
D15
D16
D17
D18
D19
D20
D21
D22
D23
D24
D25
D26
D27
D28
D29
M1
M2
M3
M4
M5
M6
0
(1:1,000)
50m

森下遺跡遺構全体図

森下遺跡付近航空写真（東洋航空事業株式会社撮影C５－８）

図版二



1．森下遺跡より浅間山を望む（南方より）

2．森下遺跡近景（北方より）

3．森下遺跡近景（南方より）

1．第１号住居址（南東より）

2．第２号住居址（南方より）

1．第３号住居址（南方より）

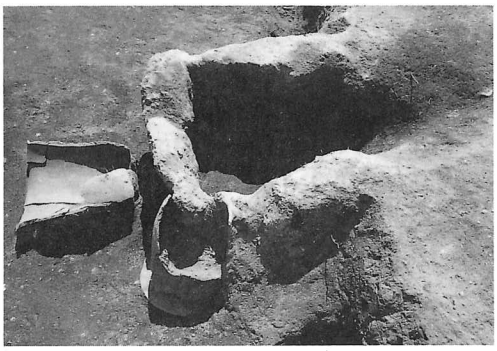
2．第３号住居址カマド（南方より）

3．第１・２・３号住居址（南方より）

4．第４・５号住居址（南西より）

1．第４号住居址（南東より）

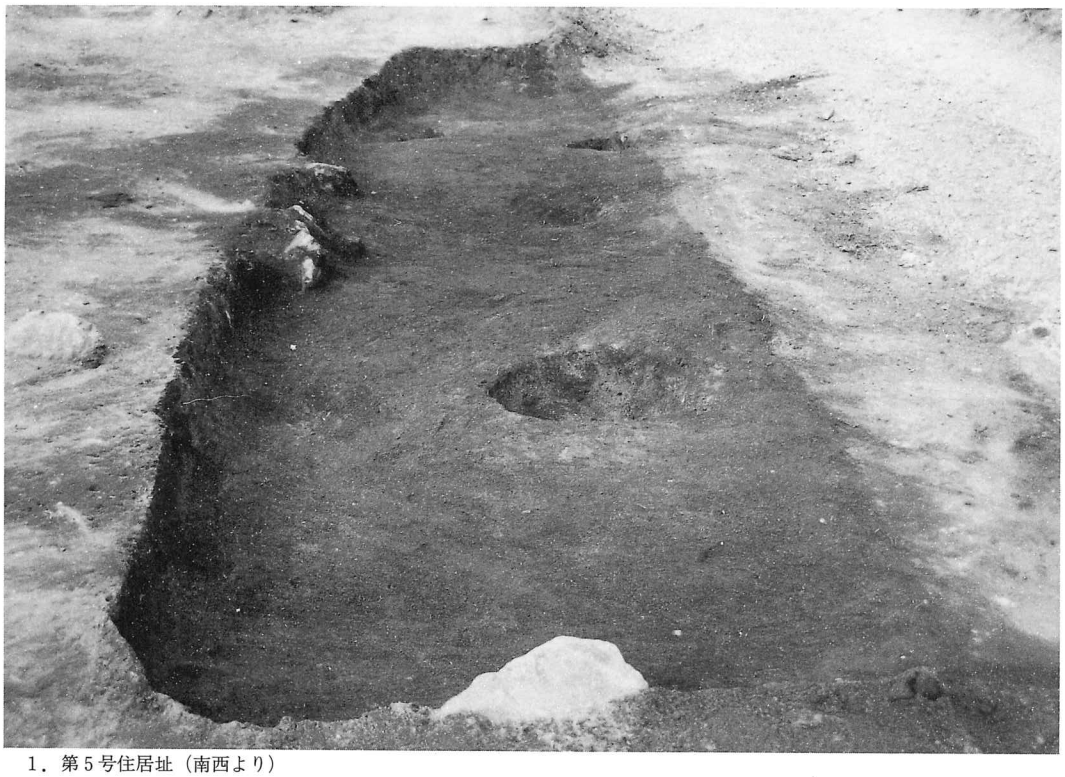
2．第４号住居址カマド（南東より）



3．第４号住居址カマド（東方より）

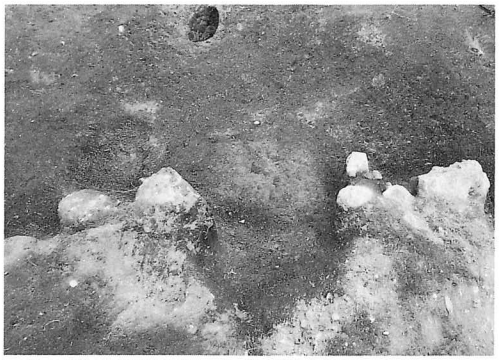
4．第４号住居址カマド掘り方（北方より）

5．第４号住居址カマド掘り方（南方より）



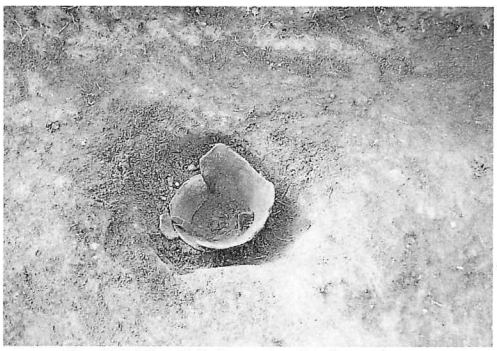
1．第５号住居址（南西より）

2．第５号住居址カマド（南東より）



3．第５号住居址カマド（北西より）

4．第５号住居址カマド掘り方（南東より）



5．第５号住居址遺物出土状況（南東より）

1．第４・５号住居址（東方より）

2．第１号トレンチ（南方より）

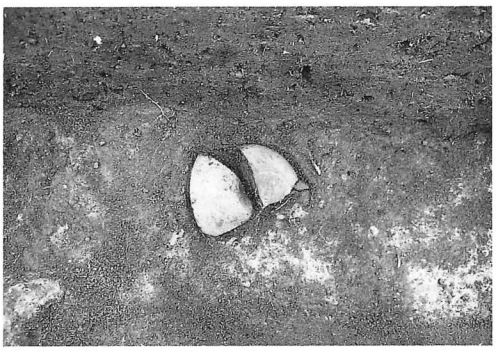
3．第４号トレンチ（南方より）

1．第2号トレンチ（北方より）

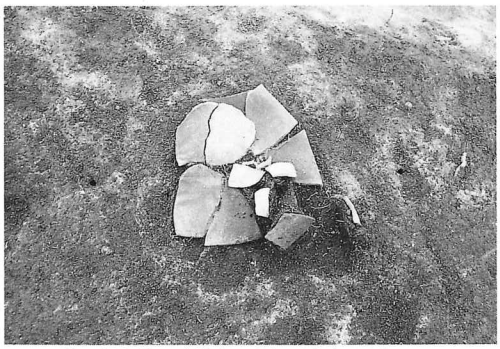
2．第3号トレンチ（南方より）

1．第６号住居址（南方より）

2．第６号住居址遺物出土状況（東方より）



3．第６号住居址遺物出土状況（東方より）



4．第６号住居址遺物出土状況（東方より）

5．第６号住居址遺物出土状況（東方より）

1．第７号住居址（南方より）

2．第８号住居址（南方より）

1．第5号トレンチ（南方より）

2．第6号トレンチ（北方より）

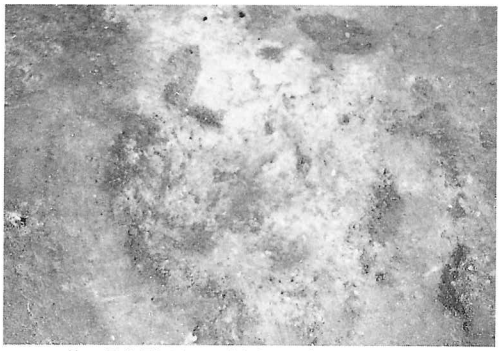
3．第9号住居址（東方より）

1．第９号住居址遺物出土状況（西方より）

2．第９号住居址遺物出土状況（西方より）

3．第10号住居址（南方より）

4・5．第10号住居址遺物出土状況（南方より）

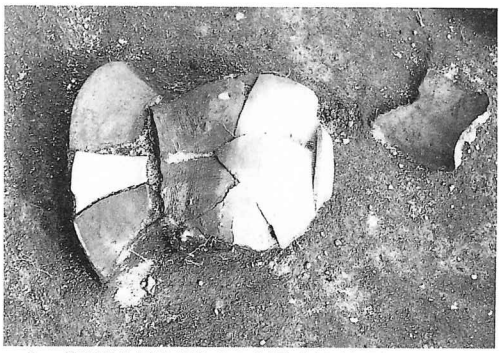


6．第10号住居址炉址（南方より）

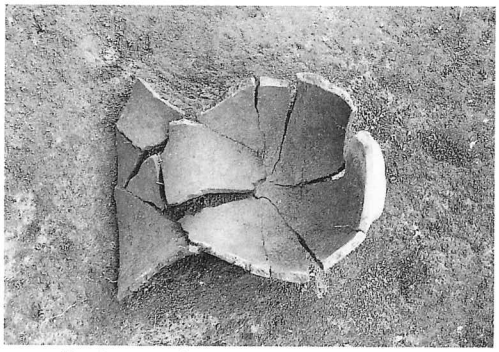
1．第11号住居址（南東より）

2．第12号住居址遺物出土状況（南東より）

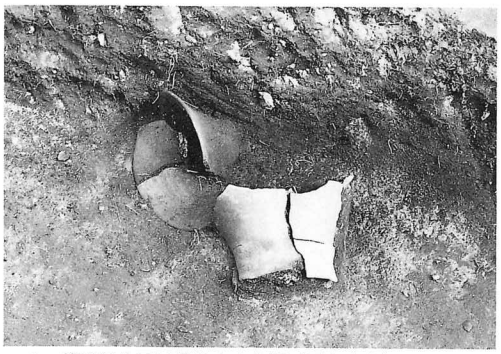
1．第12号住居址遺物出土状況（北東より）



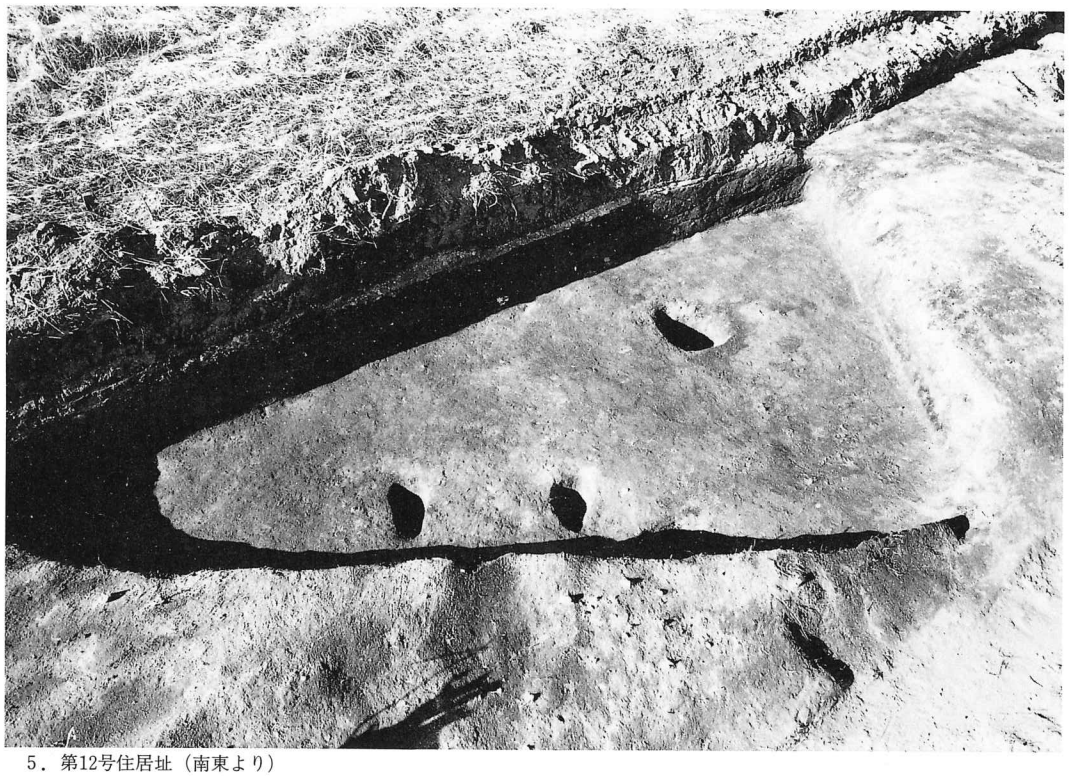
2．第12号住居址遺物出土状況（南西より）



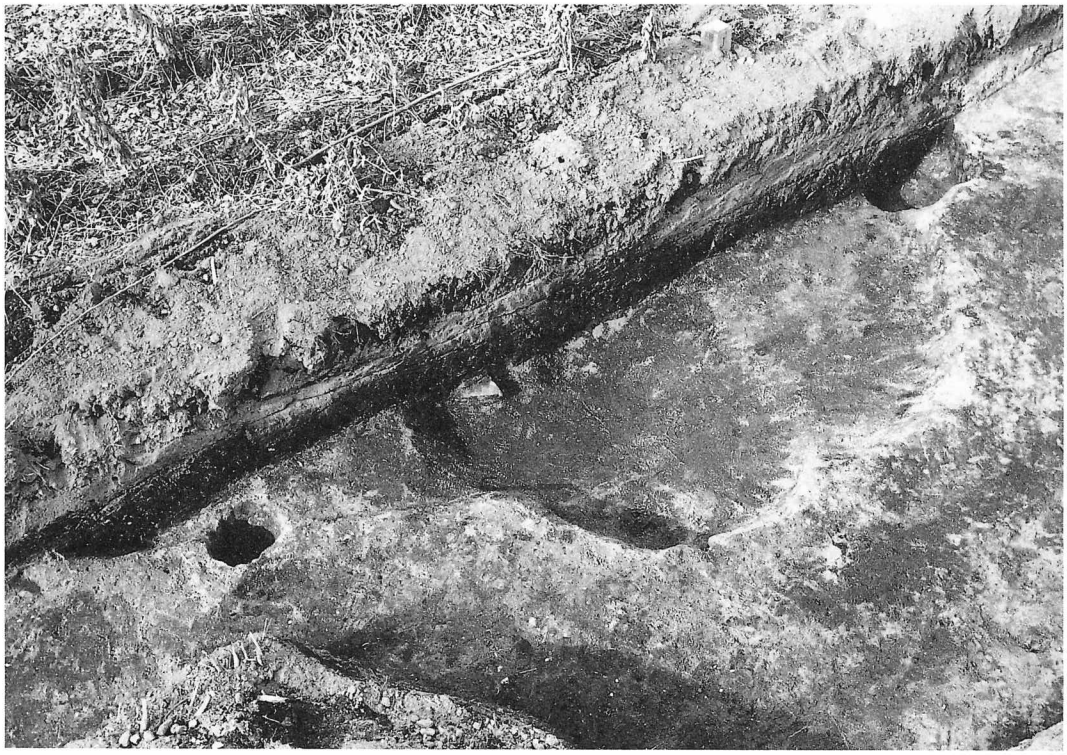
3．第12号住居址遺物出土状況（南西より）



4．第12号住居址遺物出土状況（西方より）



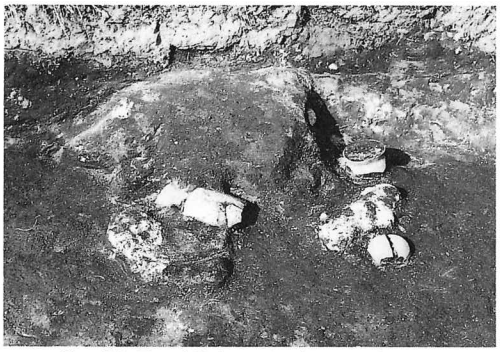
5．第12号住居址（南東より）



1．第13号住居址（南方より）

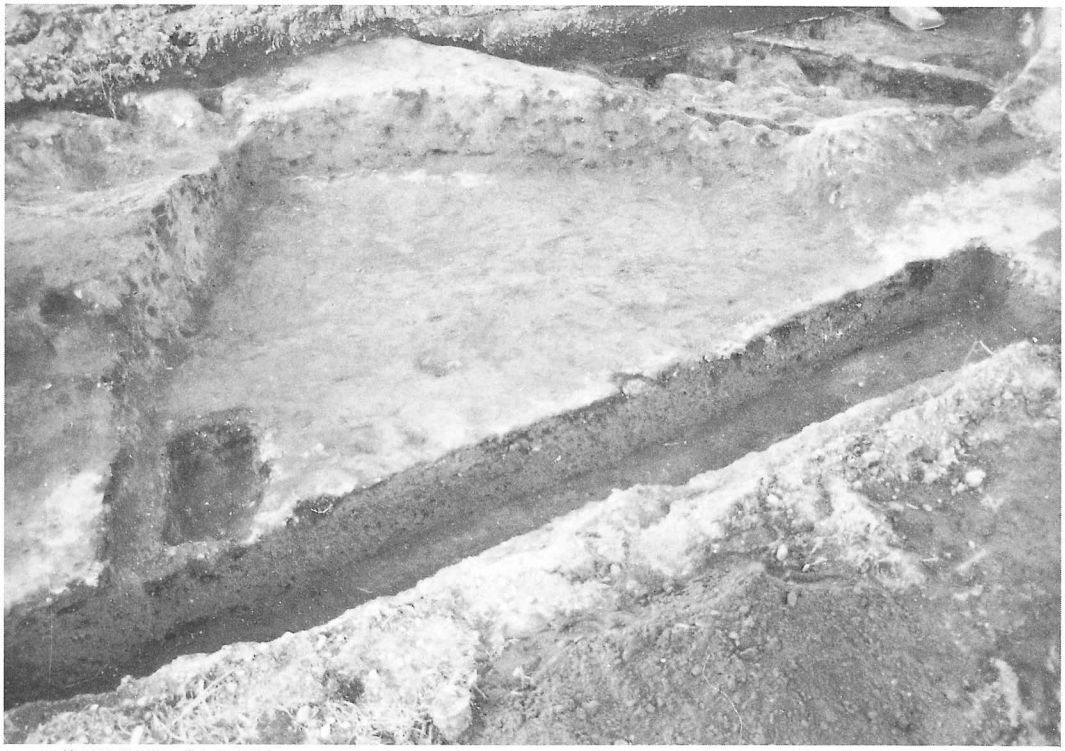
2．第14号住居址（南方より）

1．第14号住居址カマド掘り方（南方より）



2．第14号住居址遺物出土状況（南方より）

3．第７号トレンチ（南方より）



4．第19号住居址（南方より）

1．第８号トレンチ（南方より）

2．第９号トレンチ（南方より）

3．第15号住居址（東方より）

1．第16号住居址（南方より）

2．第17号住居址（東方より）

1．第18号住居址（南東より）

2．第20号住居址（東方より）

1．第10号トレンチ（南方より）

2．第10号トレンチ（北方より）

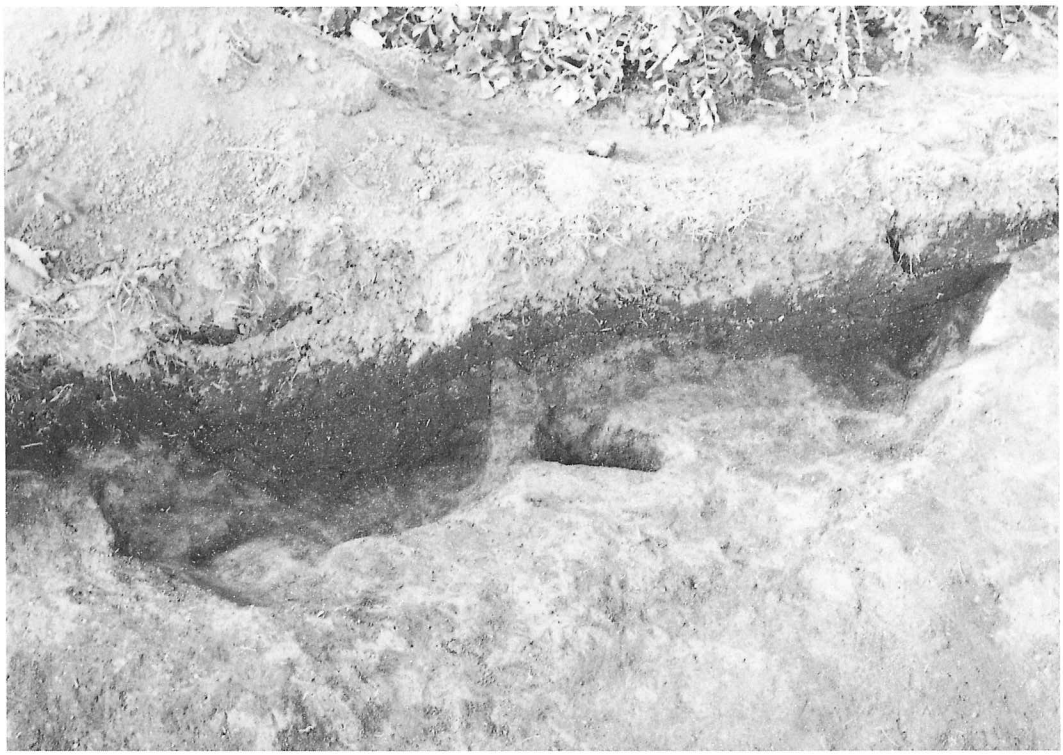
3．第11号トレンチ（南方より）

4．第12号トレンチ（北方より）

5．第13号トレンチ（南西より）

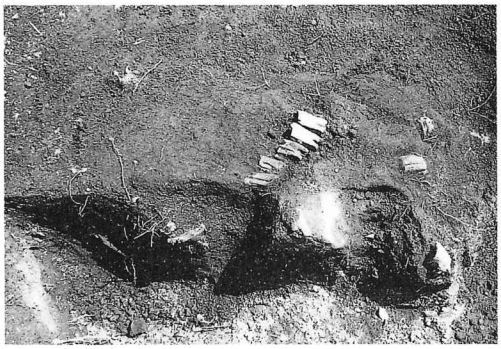
1．第１号特殊遺構（南東より）

2．第２号特殊遺構（東方より）

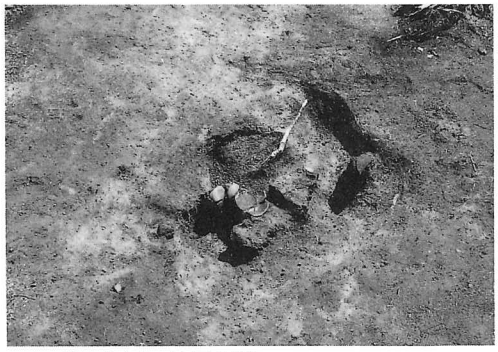


1．第３号特殊遺構（南方より）

2．第１号土坑（東方より）



3．第１号土坑馬歯出土状況（西方より）



4．第２号土坑（南西より）

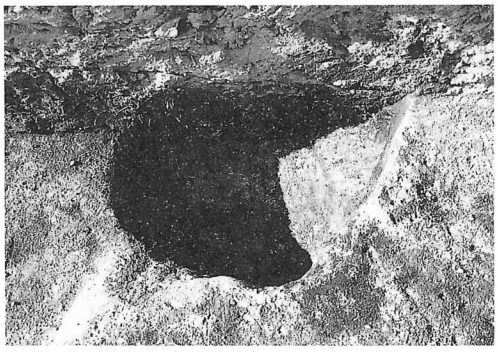
5．第３号土坑（南方より）

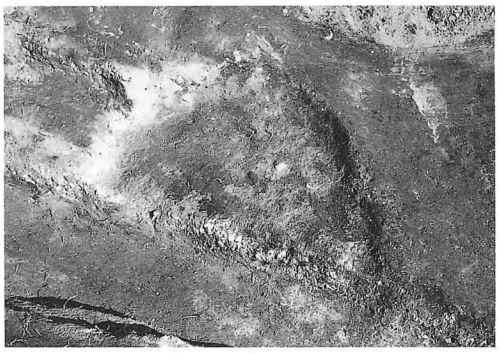
1．第４・５・６号土坑（東方より）

2．第７号土坑（西方より）

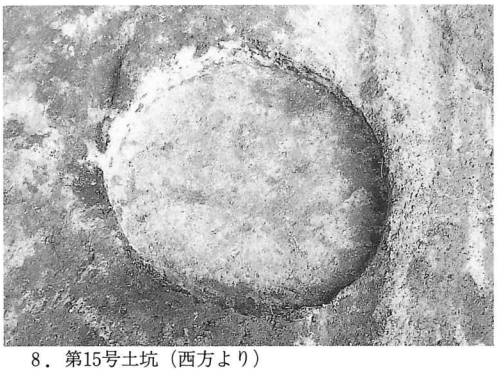
3．第８号土坑（東方より）

4．第９・10号土坑（南東より）


5．第11号土坑（南方より）

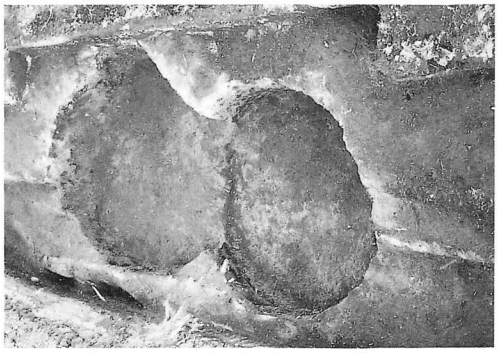

6．第13号土坑（西方より）

7．第14号土坑（南方より）


8．第15号土坑（西方より）

1．第16号土坑（南方より）

2．第17号土坑（南東より）



3．第18・19号土坑（南西より）

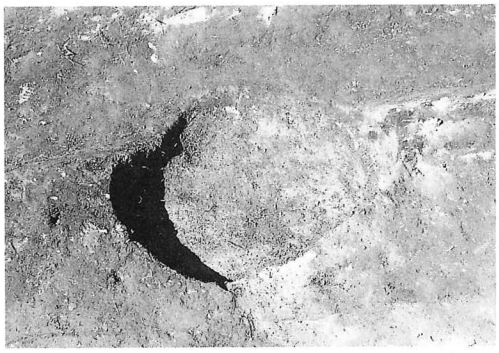
4．第20号土坑（南東より）

5．第21号土坑（東方より）

6．第22号土坑（東方より）

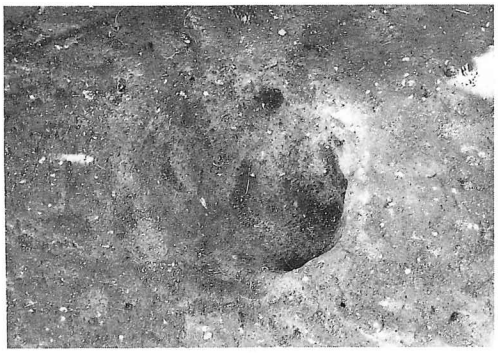
7．第23号土坑（南方より）

8．第24号土坑（南東より）

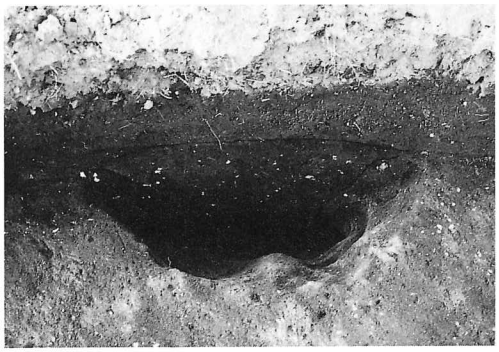


1．第25号土坑（東方より）

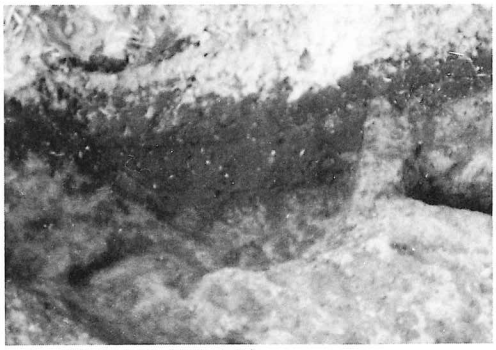
2．第26号土坑（南方より）



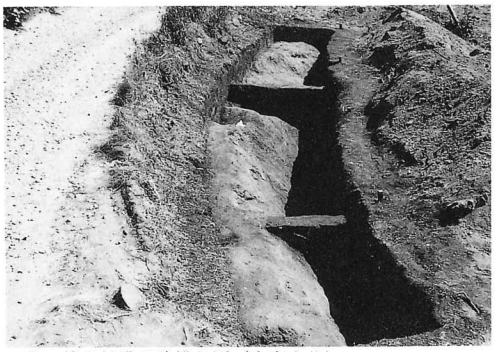
3．第27号土坑（南東より）



4．第28号土坑（南東より）



5．第29号土坑（南方より）



6．第１号溝状遺構Ｃ区（南方より）

7．第３号溝状遺構（南西より）

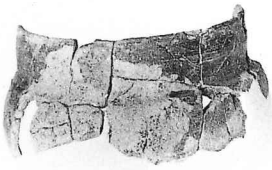
1．第２号溝状遺構（北方より）

2．第４号溝状遺構（東方より）

3．第５号溝状遺構（南方より）

4．第６号溝状遺構（南方より）

5．森下遺跡発掘調査団



16—1

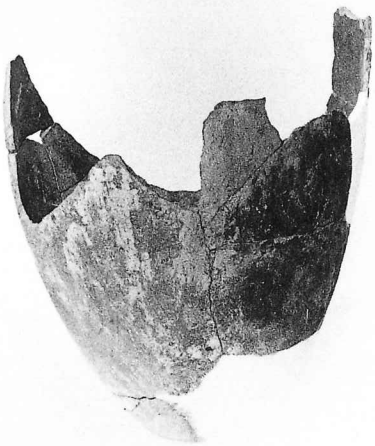
1．第４号住居址出土土器

16—4

3．第４号住居址出土土器

16—2

2．第４号住居址出土土器



19—4

4．第５号住居址出土土器

19—5

1．第5号住居址出土土器

19—7

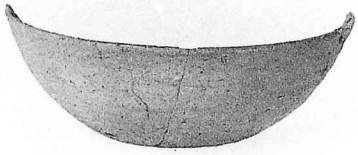
2．第5号住居址出土土器

21—2

4．第6号住居址出土土器

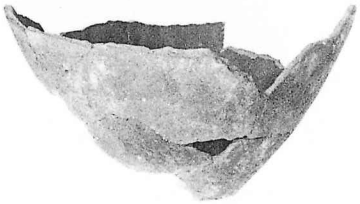
21—1

3．第6号住居址出土土器



21—3

5．第6号住居址出土土器



23—2

6．第7号住居址出土土器

25—1

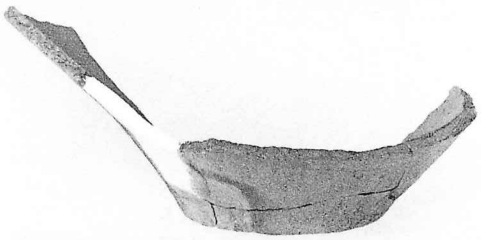
7．第8号住居址出土土器

30—1

1．第10号住居址出土土器

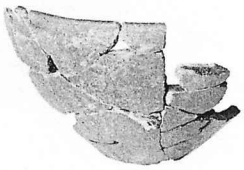
30—4

2．第10号住居址出土土器



30—3

3．第10号住居址出土土器

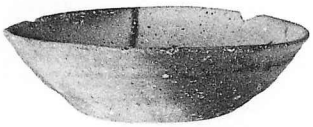


30—5

4．第10号住居址出土土器

30—6

5．第10号住居址出土土器



33—1

6．第11号住居址出土土器

33—2

7．第11号住居址出土土器

33—3

8．第11号住居址出土土器

33—4

9．第11号住居址出土土器

33—5

1．第11号住居址出土土器

33—9

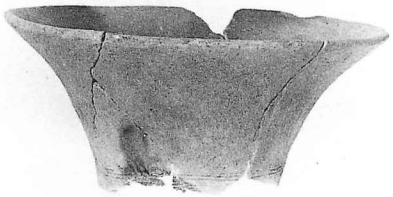
2．第11号住居址出土土器

36—1

3．第12号住居址出土土器

36—3

5．第12号住居址出土土器



36—2

4．第12号住居址出土土器

36—4

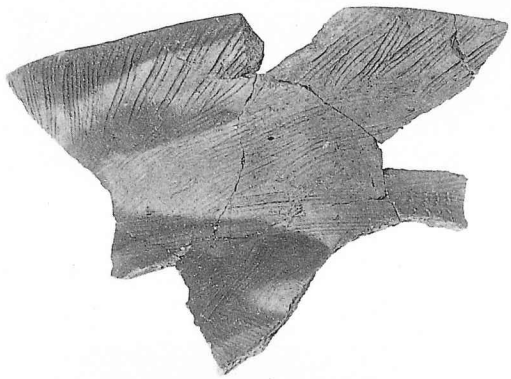
6．第12号住居址出土土器

36—5

7．第12号住居址出土土器

36—7

1．第12号住居址出土土器



37—8

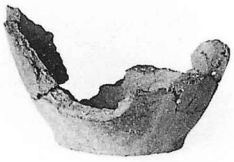
2．第12号住居址出土土器

37—9

3．第12号住居址出土土器

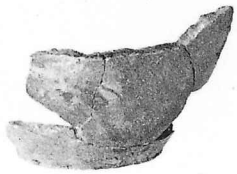
37—10

4．第12号住居址出土土器



37—11

5．第12号住居址出土土器



37—12

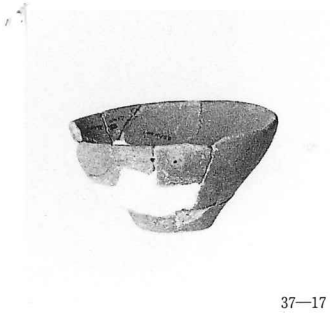
6．第12号住居址出土土器

37—13

7．第12号住居址出土土器

37—15

8．第12号住居址出土土器



37—17

9．第12号住居址出土土器

37—18

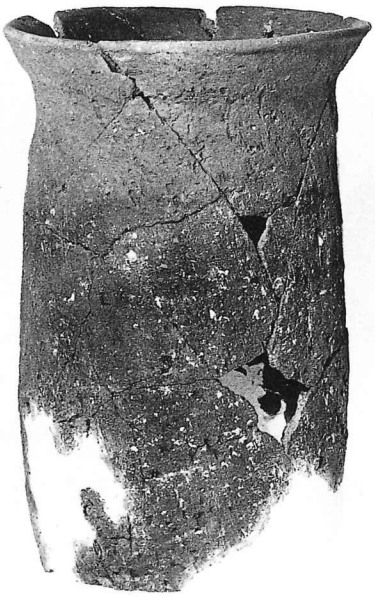
1．第12号住居址出土土器

37—21

2．第12号住居址出土土器

40—1

3．第13号住居址出土土器



43—1

4．第14号住居址出土土器

43—2

5．第14号住居址出土土器

43—3

6．第14号住居址出土土器

48—1

7．第16号住居址出土土器

50—1

8．第17号住居址出土土器

50—3

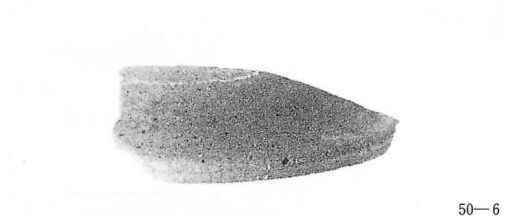
1．第17号住居址出土土器

50—4

2．第17号住居址出土土器

50—5

3．第17号住居址出土土器



50—6

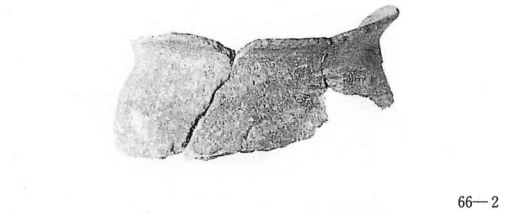
4．第17号住居址出土土器

50—7

5．第17号住居址出土土器

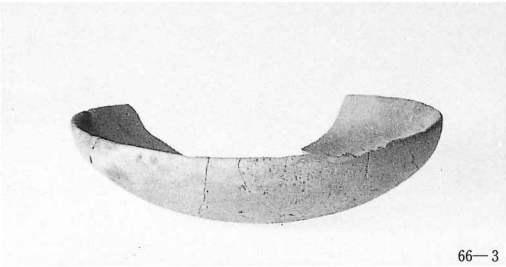
61—1

6．第２号土坑出土土器



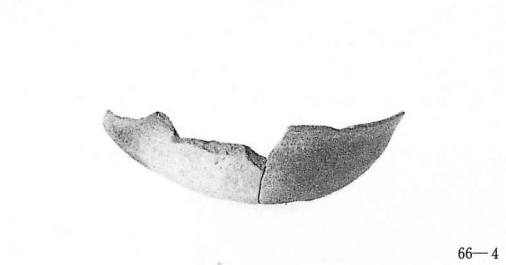
66—2

7．第２号土坑出土土器



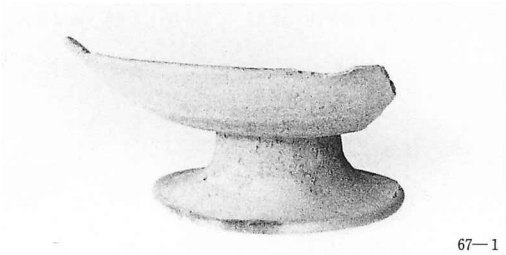
66—3

8．第２号土坑出土土器



66—4

9．第２号土坑出土土器

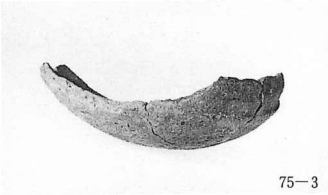


67—1

10．第19号土坑出土土器

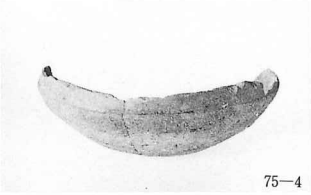
75—1

1．第２号溝状遺構出土土器



75—3

2．第２号溝状遺構出土土器



75—4

3．第２号溝状遺構出土土器

76—1

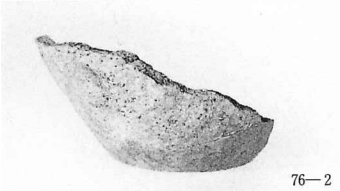
4．第３号溝状遺構出土土器

78—1

6．第３号トレンチ出土土器

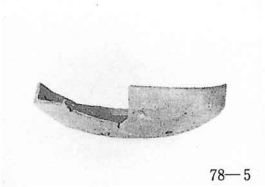
78—2

7．第３号トレンチ出土土器



76—2

5．第３号溝状遺構出土土器



78—5

8．第５号トレンチ出土土器

78—6

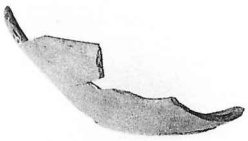
9．第5号トレンチ出土土器

78—7

10．第７号トレンチ出土土器

78—8

11．第７号トレンチ出土土器



78—9

12．第７号トレンチ出土土器

78—11

13．第７号トレンチ出土土器

78—13

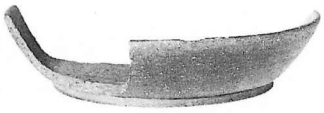
14．第７号トレンチ出土土器

78—14

15．第７号トレンチ出土土器

79—1

16．第11号トレンチ出土土器



79—2

17．第11号トレンチ出土土器

80—1

18．表採土器

80—2

1．表採土器

81—1

2．表採石製品

51—1　51—2

3．第17号住居址出土鉄製品

44—1　44—2　44—3

4．第14号住居址出土鉄製品

59—1

5．第２号特殊遺構出土鉄製品

40—1

6．第13号住居址出土墨書土器

78—8

7．第７号トレンチ出土墨書土器

78—8

8．第７号トレンチ出土墨書土器

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第１集	『西裏・竹田峯』 (TNU NTM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第２集	『池畑・西御堂』 (YIT YMM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第３集	『芝　　間』 (ISM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第４集	『新　町　II』 (IIMII)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第５集	『宿上屋敷、下川原・光明寺』 (YKY YSK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第６集	『淡淵・屋敷前・西片ケ上・曲尾III・曲尾Ｉ』 (KAB KYM KNU KMOIII KMOＩ)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第７集	『高師町・西大久保』 (ATM SNO)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第８集	『北西の久保』 (IKK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第９集	『梨の木』 (NNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第10集	『菅田III・新町III・宮の上・中曾根・藤塚』 (IISIII IIMIII YMM INN TFK)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第11集	『長峯古墳群』 (UNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第12集	『西祢ぶた』 (KNN)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第13集	『薊沢・蔦石』 (NAZ IET)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第14集	『瀧の峯古墳群』 (TNM)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第15集	『腰巻・西大久保II　曲尾II』 (SKM SNOII KMOII)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第16集	『荒田・上金井　東赤座II』 (NAK IHZII)
佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書	第17集	『薊沢II・琵琶坂VI・梨の上II・宮の上II』 (NAZII　IBZVI　NNNII　YMMII)

佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第18集
長野県佐久市

森　下　遺　跡

1989年３月
編集者　佐久埋蔵文化財調査センター
発行所　長野県佐久市教育委員会
印刷所　信毎書籍印刷株式会社